
Wing Fabric ~ はねころも ~

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

W i n g F a b r i c はねころも

【Nコード】

N 9 8 4 9 C

【作者名】

空野妃紫

【あらすじ】

自分の出生の秘密も知らず、普通の高校生として生活してきた朔夜は、ある日を境に普通の生活を送れなくなる。朔夜の前にあらわれた青年は朔夜のために存在するのだといい。朔夜に出生の秘密を伝える。朔夜が誕生することになった秘密。それは遙か昔の哀しみだった。朔夜は哀しみの連鎖に終止符を打つため、刃をとる。

第1話

昔々、とても貧しい青年がいました。青年は体の弱い母親がいて、母親にのませる薬代が家計を圧迫していました。青年は心優しく母親を看病しながら一生懸命はたらいていました。しかし、母親は大病にかかりこれまでに以上にお金がいるようになりました。そこで青年は村のはずれにある湖に満月の晩にのみあらわれる見目麗しい白鳥を捕ろうと夜な夜なその湖にあらわれました。青年はきつとその白鳥は高値でうれるだろうとかがえたのです。

青年が息をひそめ草むらで身をひそめていると一匹の白鳥が降りたちました。その白鳥は優雅な身のこなし、美しい瞳に純白の羽。青年はこの白鳥に間違いないと眠り薬をぬった吹き矢を白鳥にむけました。しかし、そのとき白鳥はみるみる姿をかえ美しい一人の女性へとかわってしまったのです。

天女は白鳥だったときとおなじ純白の衣を身にまとい湖の水と戯れていました。不思議なことに湖の水はまるで意思でもあるようにうごきだし、月の光をあびてよりいつそう輝き、天女を慈しむように彼女と戯れます。青年はその舞い歌う美しい天女の姿におもわず心を奪われそして、不用意に天女のいる湖のほとりへと行ってしまいました。

人がいたことにおどろいた天女はあわててとびたとうとしましたが、青年の声が天女をしばしとどめてしまいました。青年の母親が病にふしているとなると天女はその青年に身にまもっていた羽衣から一粒の薬をさずけました。さっそく、家にかえり母親にのませると母親はたちまち元気になり、いままでが嘘のように働けるようになりました。しかし、母親が元気になっても青年の心にはあの日みた美しい天女の姿がきえません。青年は満月の夜、その湖にいつてみることにしました。

湖でいつものように舞い歌っている天女のもとへ青年がやってき

ました。天女もまたその青年をまつように毎晩この湖にきていたのです。それから毎晩、ふたりは月がのぼるころにこの湖であうようになりました。歌をうたい、かたりあい、ときには夜空を散歩することもありました。そして、幾日も幾日もすぎたころ青年は天女にいいました。

私はあなたを心から愛してしまいました。どうか、私の妻になつてください

天女は喜び青年とともに人里へと降りていきました。青年の妻となつた天女はふたりの男の子を産みました。天女は夫のために美しい衣をおり家計をたすけました。みるみるうちに青年は村一の金持ちになりました。そして、十年がたつたころ、村をまきこむ争いがおきました。村の人々は争いへとかりだされました。青年も例外ではありません。

天女は夫の無事を祈りながら夫の帰りをまちつづけました。しかし、天女のもとへ帰つてきた夫の姿は悲惨なものでした。息をするのがやつとの夫は天女にもう笑いかけることも声をかけることもありません。天女は嘆き悲しみ自分の命を夫にさしました。夫はみるみる回復し元気になりましたが、夫のもとにはもう天女の姿はありませんでした。

朔夜はいつものようにお父さんのつとめる病院にきていた。うまれたときから体がよく一日一回の治療と月にいちどの検査が必要だ。治療とはG 06とかかれた透明の薬品を点滴で一時間かけていれる。さいわいというべきかいまだに手術だけはしたことがない。それだけがゆいいつの救いだった。入院中に自分より小さい子やおなじくらいの子供がたくさんおきな手術をしているのをみてきた。精神的に不安定になつて癩癩をおこしたりきゆうに泣きだしたりしている子をみて手術にたいする不安や恐怖心だけがつのつたのおぼえている。

「朔夜、もうおわつたのか？ いっしょに昼ごはんにしよう」

点滴をおえてでてきたところをお父さんが声をかけてきた。お父さんは白衣をきていて胸ポケットには『広瀬高志』とかかれたネームプレートをつけている。母親はいない。私をうんですぐに死んでしまったらしい。はじめから母親がいなかったせいか母親がいなくて淋しいおもいをした記憶がない。たまに友達の母親をみると『お母さん』ってどんな感じだろう？とおもうことはあっても淋しいとおもったことはなかった。

「体は大丈夫か？」

病院の食堂でうどんをすすりながらお父さんはいった。お父さんは血液病が専門で手術はしない。広瀬明人。お父さんの兄（つまり朔夜の伯父）は遺伝子学の権威でお父さんといっしょにこの病院ではたらいている。というよりこの病院はお父さんと伯父さんの病院で親（朔夜にとって祖父になる）からうけついだものだ。伯父さんには子供がなく朔夜をほんとうの子供のようにかわいがってくれている。朔夜がもの心ついたときには母も祖父母もいなく、お父さんと伯父さんだけが身内だった。そして、伯父さんは朔夜の主治医でもある。

「うん、最近めまいがするのとすこし寒気がするところがあるかなでも、伯父さんにいったけど検査の結果では大丈夫だって」

朔夜はきつねうどんの揚げをぱくつく。ここのきつねうどんは以外とおいしいのだ。じゅわ、とひろがるお揚げの味に舌が満足する。お父さんは「そうか」と心配そうな顔を見ると箸をおいて朔夜の頭に手をおいた。

「あまり走ったりとかするなよ。無理してたおれたりしたらたいへんだからな」

朔夜はすこし心配しすぎとおもいながらも素直に「うん」とうなずく。そして、今日一日のことをお父さんにはなした。もうじき期末試験があつてたいへんなこと夏休みにはどこかつれていってほしいとついでのようにねだった。医者であるお父さんにどこかつれていってもらうのはむずかしいことだけど。毎年の恒例のように朔夜

は「どこか遊びにつれて行って」という。夏休みなのだ。ひとりでは泊まりの遊びにはとてもいかせてはくれない。お父さんも伯父さんもふたりが声をそろえてかならずいうのだ。「そんな体でもしものことがあつたら」とちいさいときは納得できずによく泣いて駄々をこねたがいまではそれも心配ゆえだとおもっているからあまり強くいつたりはしない。

お父さんとわかれたあとすぐに家にかえる。学校はもういつてもHRしかのこっていない。より道もせずかえったのはすこし気分がわるくなつたからだ。真夏の太陽のせいかもしれない。家にかえつたときには目眩までした。いつものことだからじつとしていたらすぐによくなるのはわかつている。

部屋への階段をあがる元気もなくてリビングのソファによこたわる。そのまま目をして気分がよくなるのをまつた。こくこくと時間がすぎるとともに気分はよくなつていった。自分の病気についてあまりよく知らないことはあまりよくない気がするが伯父さんもお父さんもくわしくはおしえてはくれなかったし、注意点だけ守っていればよかった。しっていることは治療として投与しているD 06がいちばん適した薬であることと先天性の遺伝子病であることだけだった。

すっかり気分がよくなると今度は小腹がすいてきた。さつき昼ご飯を食べたばかりなのにそれなのにお腹がすいてくるなんて、そうおもいながらも冷蔵庫をのぞいた。冷蔵庫にはお肉、野菜、ちくわやベーコンなどの加工食品もおいてある。お父さんと伯父さんで時間があるときに食材を買いたしといてくれるからいっぱいある。そんな食材をさつとみてレモンが三つあることにきづく。そのひとつをとりだすと四等分にしてお皿にのせた。最近すっぱいものがなんだか食べたくなる。レモンをオレンジのようにかじりつくとあつというまにすべて食べきってしまった。口のなかに酸味があとをひいている。

階段をのぼって自分の部屋にいくと七時まで寝ることにした。最近

すこし調子がよくない。食欲はあるからそんな深刻ではないだろうけど、いちおうきをつけないと。そうおもいながらホームウェアに着がえる。ニットのパンツに雲の絵がかかれたＴシャツ。ベッドにはいるとすつと眠ってしまった。よく寝てよく食べられるのは病人にとって最大の強みだ。

コンコン

ノックの音で目をさます。あわてておきあがるともう八時になっていた。晩ごはん！とおもってあわててドアをあけると伯父さんがたつていてエプロンをつけていた。伯父さんが晩ごはんしてくれただとおもいながら、ほつとしてあやまる。

「よく寝てたからね。かわりにしといたよ。気分がわるかったのか？ご飯は食べられそう？」

伯父さんが心配そうにいった。朔夜のお腹がタイミングよくなつて伯父さんはほつとしたように笑う。

「食べれそうだね」

やさしい顔でいった。朔夜ははずかしくて顔を赤くすると意地悪をいう伯父さんをのこしてささと台所へとむかった。

テーブルのうえには野菜中心の食事がならべられている。朔夜はあまり肉を食べない、野菜を好んで食べるから伯父さんやお父さんとはいつもすこしメニューがちがう。食卓にすわると食事をはじめた。

「レモン汁でドレッシングをつくったんだがどうだ？」

伯父さんは料理上手だから新作ドレッシングの意見をもとめてきた。

「すこしすっぱいような気がするけど、私はおいしい。それより、この酢の物もつと酢をたしていい？なんか最近すっぱいものが食べたくて」

基本的にはすっぱいものはあまり好きではないのだがどうしてだか最近はやーグルトとかレモン、ひどいときには酢を水で割ったようなものが飲みたくなる。

「暑いからスッキリしたものがほしいんじゃないか。レモンも酢も体にいいからいいじゃないか」

「たしかにそうだけど・・・気分がわるくなって吐いたり目眩がしたりするの。でも、ちゃんと食べられるしどうしたのかな？薬の副作用じゃないよね？」

最後がおもったよりも深刻そうにひびいた。伯父さんはあごに手をあててすこしうなると「一回、胃カメラでも飲んでみるかい。だれがいちばんうまいかな」といった。その言葉にあわてて朔夜は首をふる。

「いい、胃カメラはいいから。それに吐いても食べられるんだから、たいしたことないんだよ。胃は健康！大丈夫だから」

胃カメラなんてのみたくない。のんだ子がすごく苦しかったっていつていたのをおもいだす。胃カメラだけはうけたくない。消化器系に重大な欠損はないからこれまでカメラをのんだことがない朔夜はカメラだけはどうしてもいやだった。伯父さんはそんな朔夜の反応をみておかしそうに笑う。からかわれたのかな、とおもってすこしむっとしてほほをふくらますと伯父さんは真剣な顔になる。

「朔夜、朔夜の体はとても繊細なんだ。なにかあったらお父さんがとても悲しむ。もちろん、伯父さんだっておなじだよ。大事にしてくれ。走ったり飛んだりあまり体に負担のある運動はさけてほしい。ひとりだけの体じゃないんだ。わかってるね？」

伯父さんの言葉に「わかってる」とこたえようとレタスをほおばる。最近、伯父さんもお父さんもますます神経質になっている気がする。「ひとりだけの体じゃないんだ」とお父さんもいった。「朔夜がいなくなったらお父さんはいきていけないから」ともいわれた。だから、伯父さんも「ひとりだけの体じゃない」というのだろうけど。でも、検査で問題ないならそこまで神経質にならなくても。それとも、私にいけないだけでなにか問題があったのかな。

そのまま、食事をして楽しくすごした。朔夜は伯父さんのことも大好きで幼いときには「お母さんがいないかわりにふたりのお父さ

んがいるんだ」と自慢していたぐらいだ。父親と伯父の愛を一身にうけてきた。ふたりにたいしての信頼感はどうなだれよりも強くてふたりを悲しませるようなことは極力しないように努力している。幼いころふたりのいいつけをやぶって発作をおこしてたおれたことがある。目をさましたときのふたりの顔をおもいだすと無茶なことができなくなった。

ご飯を食べおえると伯父さんは食器をぜんぶ洗ってくれた。私は伯父さんが食器を洗っているあいだにのこったものをかたづけたりテーブルをふいたりした。

「伯父さん、これから病院にもどるの？」

エプロンを食器棚のひきだしの突起にかけるとネクタイをむすんでいる伯父さんにきいた。伯父さんは慣れた手つきでネクタイをしめながらいう。

「そうなんだ。まとめなきやいけない資料があつてね。今日はかえれそうもない。そうそう、高志も夜勤でかえれなくなったから今日はひとりになるな」

そんなはなしきいていない。きっと私とわかれたあと夜勤がきまっただろう。それはしかたないけどいつまでも子供あつかいはひどい。

「大丈夫。もう高校生になったのよ。ひとりでも大丈夫」

朔夜は伯父さんを玄関までおくりながらいった。伯父さんは「そうか」と笑うと朔夜の頭に手をおくと「いつてくる」といった。そして、玄関のドアに手をかけると最終チェックのようにいった。

「なにかあつたら電話してくるように。すぐにだ」

「もう、わかつてる。大丈夫だから。仕事がんばってきてね」

伯父さんの背中をおしながらいうと伯父さんは意地悪に笑う。

「あんなに可愛かった朔夜が伯父さんを無下にするようになったんだね」

伯父さんはお父さんとおなじように愛してくれているけど意地悪なところがある。意地悪をされることもあるけどそれでも許せるのは

それ以上に愛してくれているのがわかるから。

「それじゃあ、いつてきます」

「いつてらっしゃい」

伯父さんがでていくとすぐにカギをかけた。世のなか物騒だからふたりがいけないときはかならずカギをかけている。「カギをかけていてもピッキングであけられたらどうする」と伯父さんにいわれてからはチェーンも忘れはしない。できるだけ防犯をすると二階にあがった。お風呂にはいるうかとおもったけどなんだか眠たくなつてベッドにもぐりもんでしまった。あした朝、お風呂にはいれればいい。そうおもいながら朝までぐっすり寝た。

しめきられた暗い部屋のなか、画面上にうつるふたつの胎児をみつめながら男は満足そうにほほ笑んだ。ふたつの胎児はたがいにもかいあっている。完全な人のかたちをした胎児。

「やつと、きたか」

部屋にはいつてきた男にいった。そして、その男は胎児をうつすディスプレイのまえにいくとその画面をみる。

「どうだ。順調に育っているとはおもわないか。着床しただけでも奇跡だというのに双子だ。しかも、われわれのかんがえよりずっと遺伝的な純度がたかい。胎児の心臓の音も力つよい。まだまだ、油断はゆるさないが」

あとからきた男に説明する。椅子にすわっている男はマウスを操作してこれまでの資料をとりだした。胎児はまるい卵から人のかたちにかわっている。一枚、一枚がその成長を証明するかのようだ。ならんだ写真をみながら椅子にすわっている男は感心したようにいう。

「しかし、こうしてみればふつうの人間の胎児とまったくかわらんな。人とおなじように進化の経路をたどっている」

進化の道、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類。人間の胎児もまたおのれの起源を記すようにその進化の道をたどっていく。それ

はどの生命でもおなじことで、生命は自分がそこに存在するまでの経路を示さなければ生まれ得ることは許されないのだろう。

「まあ、われらが女神もまた、おなじように進化の経路をたどっていたがな」

椅子をくるとまわした男はディスプレイとむかいあうようにおかれた壁一面の水槽をみていった。となりにたっていた男はなにひとつ口をひらこうとはしない。ただ水槽がポコポコと気泡をはくのを見ていた。

「K 01はどうした？」

地下牢ともいえるような部屋にいる被験者のことを男はきいてきた。

「一般常識から帝王学すべての学習を完了した」

みじかく男は報告する。椅子にすわった男はたしかめるようにいう。

「語学もすべておしえおわたったのか？」

「ああ。ただ、外にでたがっている」

男はそういうとK 01がかいた絵をわたした。最近鉛筆と紙をもたせるとその絵ばかりかく。おなじ人物の顔。

「またか。こまったものだ。しかし、あったことのない自分の主人をよくもここまで正確にえがけるとは」

男は絵のなかの人物をみていった。K 01にはすばらしい身体機能と脳、そして、人ではない遺伝子ながれている。生命のかたちをかたどったそのものは自分が主のためだけに存在するといつかかない。できるだけだけの知識をK 01におしえこみより完璧なものとしてつくりあげたにもかかわらず困ったものだ。

「女神の体調がすぐれない。このままでは母体はだめになってしまふ。胎児はとりのぞくべきだ」

すわっている男にできるだけ冷静に忠告する。しかし、男は顔色ひとつかえずにいった。水槽のなかの青白く光る水のように人の心がないような顔だとおもふ。

「もう、つぎの段階に実験はすすんでいる。もし女神が耐えられなかったとしてもなんの支障はない。そんなことより、この新しいふたつの命を祝福しようじゃないか」

そういつて胎児の映像にむきなおると愛おしそうに胎児にふれる。胎児にふれている男にきづかれないうちに男は白衣の影で拳をにぎりしめた。爪がくいこみ掌に痛みがうまれてもその力を弱めることはなかった。

今日も学校のかえりに病院に行く。治療だけなら学校がおわつてからでもじゅうぶんまにあう。もし、まにあわなくても身内の病院だから融通はいくらでも聞く。でも、最近はめまいや吐き気があるからなるべくはやく家にかえりたかった。

カーテンでしきられたベッドのうえによこたわりながらぼつ、ぼつと一滴、一滴おちていく透明な液体をみていた。もの心ついたときからなんどもみている光景だ。D 06とかかれたシールもおなじみのものだった。点滴をみているのにあきて目をつぶる。寝るためではなく光りを遮断するため。管でつながれているあいだ朔夜には自由はない。そのことは産まれたときからよく知っている。幼稚園のときまではお父さんが伯父さんがいつも絵本をよんでくれた。おわるまでずっといろいろな絵本をよんでくれたのだ。ときには一〇冊ちかくになったことをおぼえている。

「朔夜、気分はどうだい？」

目をつぶっているとお父さんの声がした。朔夜は目をあけるとお父さんの顔をみる。お父さんはいつもとおなじように優しい顔をしていた。お父さんの悲しそうな顔をみたことがない朔夜は父の顔をおもいうかべるといつもこの顔だ。

「大丈夫。それより、今日は晩ごはんなにがいい？いつもかんがえるのたいへんで」

主婦みたいなことをいう娘をまぶしそうにみると高志はいった。晩ごはんのおかずをかんがえるそぶりもみせてくれない。

「なんでもいいよ。朔夜それより無理しちゃいけないよ。検査ではなんともなくつたつてもしものこともあるからね」

体をきづかってくれる言葉をきくのは何回目だろう。伯父さんもお父さんもほかの人だってかならずといっていいほどこの言葉をいつてくれる。もう、ききあきているのに。

「晩ごはん、リクエストなかったらお茶漬けだからね」

晩ごはんのことをまったくかんがえてくれなかったお父さんにからかうようにいうとお父さんは冗談とおもわなかったのだろう。

「いいよ」といつてほほ笑んでしまった。からかいがない人だとはしつていたもののやっぱりたまにはきのきいたかえしがほしいものである。

「今日はなるべくはやくかえるから。あ、そうだ。お茶漬けだけなら果物をかってかえるよ」

「果物？」

どうして、果物なのかわからなくて朔夜はきいてみた。お父さん疲れてるのかな？でも、そういうときってケーキとかチョコレートとかもつと甘いものがほしくなるんじゃないのかな。

「そう、お茶漬けだけじゃ。体にわるいからね。せめて果物でもたべておかないと」

お父さんのその言葉にすこしあきれて笑った。自分のたべるものにはまったく興味がなくせに娘の食事にはすこぶるきをつかう。お父さんをみていると医者の不養生とはこういうことか、と納得できる。なぜ笑っているのかわからないのだろう不思議そうな目をしている。そこがまたおかしくて朔夜はくすくすと笑いつづけた。

点滴を終えてさつさと帰るとさつそくごはんを炊く。夕飯の仕度のためにながく邪魔な髪をくくる。市販のお茶漬けではすこしさびしいきがして、鮭と梅干をかってからかえった。鮭がやけたころお湯を沸かす昆布茶をいれた。鮭が焼けるとラップをかける。お父さんたちがかえってきたときにはこの鮭をだせばいい。シソとミヨウガをきざんで、自分のぶんのお茶漬けセットを完成させてごはんが

炊きおわるまでソファですわってテレビをみていた。

ピッピッと炊飯器がなる。ごはんが炊けたんだとおもいながらその音をきいた。しばらく蒸らしておいたほうがおいしい。今日はごはんがメインだから手抜きはしたくない。じつはごはんを炊くときに日本酒をいれておいたのだ。こうするとごはんがいつもよりつややかでおいしくなる。ほんとうは昆布でもじゅっぶんおいしいけど気分的にきょうは日本酒にした。

リビングとキッチンのあいだにおいてある電話が急になった。朔夜は受話器をとる。

『朔夜、すこし問題が発生して今日はかえれそうにないんだ。きちんと戸締りして寝るんだよ』

ちいさい子供に注意するようなことをいうお父さんは朔夜がまだまだちいさな子供のようにおもっているのだろう。

「大丈夫よ、わかってる。うん。ちゃんとチェーンもしとくから。」

うん。それじゃあ、がんばってね」

そういうと朔夜は受話器をおろした。そして、まな板のうえでかるく梅干をたたきながらすこしあらめの梅肉をつくる。お茶碗にごはんをよそうために炊飯器をあけた瞬間、ホカホカごはんの湯気がたちあがった。

「うっ」

そのとたん朔夜は吐き気をもようして流しにふした。数回えずいたがなにも胃になかったことがさいわいしてなにもでてこなかった。なにも吐くものがなくても口のなかが気持ちわるい。朔夜は口をすすいだ。キッチンのタオルで口元をおさえるともうすすきりしていた。そして、あいたままになっていた炊飯器からなにともなくごはんをよそう。そしてそこに梅肉、ミョウガにシソを順番にのせていく。すこし、梅肉がおおいようなきがしたけど、まあいい。梅干のお茶漬けの完成である。市販のお茶漬けにはないワンランクうえのおいしさに舌つつみをうちながら朔夜はテレビをみる。けっきょくその日はお茶漬けを二杯もたべた。そして、あまったごはんをみ

ると、どうするかしばらく悩む。明日はお弁当はいらないから、これじゃあごはんがおおすぎる。朔夜はおにぎりにしてお父さんと伯父さんにさしいれてあげようとおもいつくと、鮭をほぐしおにぎりにした。鮭のおにぎりや梅肉ののこりをいれたおにぎりをふたつずつアルミホイルにつつむ。

おにぎりやちよつとしたつけあわせをもって朔夜はお父さんと伯父さんをさがしていた。それぞれのさしいれをいれた紙袋をもって血液内科の病棟にきていたが、お父さんの姿はみえなかった。お父さんを探してキョロキョロしていると顔みしりの看護婦さんが院長室に伯父さんとお父さんがいることをおしえてくれた。朔夜は院長室へとむかった。

夜の病院をふつうは怖いとか不気味とかいっていやがるけど、朔夜にとつては夜の病院は幼いころからそこにあたりまえのようにあったから恐怖心はない。でも、無性に悲しい気持ちにはなった。夜は急患の患者が運ばれたり入院患者からも容体が急変したりする。そのたびに看護婦や医者の方バタバタと走る足音、どん、どん、ときこえる電気ショックの音が悲しかった。

「伯父さんいる？」

朔夜はドアをあけて伯父さんに声をかけた。でも、そこには伯父さんもお父さんもいなくて。朔夜は部屋にはいるとふたりのさしいれを机のうえにおいた。そして、どうしようかすこし悩む。二人がかえってくるまでまつているのは遅くなるといやだし。いまさら病院で泊まりたくない。入院していたとき夜になるとかならずといっていいほど「家にかえる」といって泣いていた。うんとちいさいときのはなしだけど。

メモでも書いとけばわかるよね。朔夜は机におかれたメモ用紙とボールペンをもった。お父さんと伯父さんにそれぞれが言葉を書いてそれぞれの紙袋にいれる。こうしておけば伯父さんからお父さんにわたしてもらえるし、もしかしたら、ふたりともいつしよに

いるかもしれない。

「これでいいかな」

そういうと朔夜は机に背をむけた。なんだかきゅうに眠たくなつた。はやくかえろ。お父さんと伯父さんの顔をすこしみたいようなきがしたけど探してまでみたいわけじゃない。ドアノブに手をかけようとしたときかつてにドアがひらいた。いやかつてじゃない、男の子があけたのだ。手術患者がきるような服をきた男の子だった。歳は自分とおなじだろうか。男の子は朔夜をみてたっている。

「院長先生さがしてるの？ここにはいないみたい。病室で・・・」

きゅうに手首をつかまれた。なにをされたのかわからなくて朔夜は言葉をのむ。どうしていいのかわからず相手のつぎの行動をまつしかなかった。

「あなたはここにいてはいけない」

男の子はそういうと朔夜の手をひいて外へいこうとする。朔夜は自分が拉致されるとおもい手をふりはらおうとした。でも、男の子の手がしっかりと自分の手をにぎっていてふりほどくことができない。

「ちょっとはなして」

朔夜は夜の病院だということも忘れて大きな声をだして抵抗した。そうして、抵抗しているとだれかの足音がちかづいてきた。朔夜はたすけにきてくれたとおもうとさらに声をはりあげて騒いだ。

「朔夜、大丈夫か」

あらわれたのはお父さんですこしほつとする。無条件にお父さんがきてくれたからもう大丈夫だとおもった。ほつとした瞬間、きゅうに息苦しくなる。発作だった。呼吸がうまくできなくなって喉からはひゅうひゅうと音になる。呼吸のしかたを忘れたようなそんな感じになってたつていられなくなった。苦しくて男の子の腕に爪をたててにぎりしめる。

「朔夜っ発作が、発作がおきたんだ。D 06をはやく投与しないと」

お父さんの声がとおくできこえた。男の子は朔夜をよこに寝かすと頭をかかえあげた。そして、あいているほうの自分の腕にかみつき歯で自分の皮膚をさいた。そこからあふれる自分の血液を口にふくむと口うつしで朔夜にあたえた。息もできない食道に無理やりなまあたたかい液体がながれこむ。一口くくんとのみこむと薬を投与されたときとおなじように信じられないほど呼吸が楽になった。背骨がすこしきしむような深い呼吸をくりかえす。ゆっくりとした呼吸をくりかえすともうふつうの呼吸にかわる。

「おとうさん・・・」

よこにいるお父さんに手をのばすと手をにぎりかえしてくれる。意識はあるけどなんだか遠くて状況がわからない。でも、お父さんがそばにいてくれるんだから大丈夫。きっともうなにもかも大丈夫だから。

「あなたをうしなってしまう」

男の子は深刻な目で朔夜をみつめながらいった。その言葉に高志も深刻な顔をする。朔夜にはもうふたりの会話を理解することすらできない。ただ、ゆっくりと体の力がぬけていくのだけを感じていた。

「朔夜をたすけられるのか？」

朔夜をたすけられないのはわかっていた。そして、自分にはどうしてあげることできないこともわかっていた。でも、彼ならできるかもしれない。彼はほかのものたちとはちがう彼は朔夜のためにいるのだから。しかし、質問のこたえをきくまでに明人がきた。

「高志っ」

男の子はその姿にはじかれたように朔夜をだいて窓ガラスにつっこんでいった。窓ガラスは体がふれる前に吹き飛び粉々にくだけちる。高志はおもわず手をはなしてふたりがさる姿をみていた。明人がちかくにきたときにはもうふたりの姿はそこになかった。明人はあわててくれた窓ガラスのそとをみてふたりの姿を目でさがしたが姿がみあたらないことにいらだった声をあげた。

「くっそ！高志、大丈夫だったか？」

明人の言葉にたちあがると「大丈夫です」とこたえてふたりがさったあとの窓をみつめた。そとは暗く冷たくて月のあかりすらなかった。闇のなかににげるようにさっていた男のうしろ姿が目からはなれなかった。そして、青白い顔をした朔夜の顔もわすれられない自分にはなにもできないのだけれど。

「高志、ここをひきはらうぞ」

明人はそういつてきびすをかえて自分の部屋へとかえつていった。高志は自分の胸に手をあてて祈るように静かに目をとじた。ものがこれ以上わるいほうにいかないように、すこしでもいいようにころぶように。

朔夜にはかけているものがある。それは彼女が生きていくために必要なものだった。さらに、彼女の体には負荷がありそれが急激に彼女の命をよわくしていた。

私ではもうあなたの糧になることはできない。そんなおもいで彼女の横顔をみつめる。やすらかに眠ってはいるがその横顔がなんだかいまにもきえてなくなりそうでこわかった。

「ううつん」

朔夜は目をさました。そこは自分の部屋でさっきまでのことは夢だったのだとおもった。お父さんにさしいれをするつもりだったのに自分はいつのまに寝てしまったのか。そんな錯覚をおこす。目がかすんではつきりと天井がみえないがそんなことはささいなことだ。最近よくあることだし、目だけじゃないほかの機能もよわっているようだった。

「きがつかれましたか？」

ききなれない声がして、そちらをぼんやりとみる。そして、レンズがあうと目にうつったその顔におどろいた。あわてておきあがるなるべく彼からはなれるように壁際にへばりつくようにもたれた。

「無理をしないでください。あなたは大切な人ですから」

彼は表情をうごかさずにいったがその目には心配そうな色がうかんでいてとても不安げな印象をうけた。だからだろうか警戒心がとけていくどころか不思議と安心してしまった。だれよりも自分をわかっていてそして、だれよりもちかい存在そんな感じがしたのだ。

「あなたは？名前はなんていうんですか？」

朔夜は彼にいった。朔夜がもう自分にたいして警戒心をゆるめてしまっていることを自覚しながら。彼はみじかく「K 01」とこたえた。事務的な感情のあまりよみとれない声だった。

「K 01？それは名前なの。もしかして名前がないの？」

朔夜は彼の言葉にそうかえした。いくらなんでもそんな名前をつける親はいないだろう。しかし、それなら彼のほんとうの名前はどこへいつてしまったのか。そんなことをおもいながら朔夜は彼に提案する。

「そうだ。私があなたの名前をきめてあげる。それでもいい？」

「あなたがそうしたいのなら」

朔夜の言葉に彼はそうこたえる。朔夜はうれしそうに笑うと一生懸命名前をかんがえはじめる。なんだかひろってきた犬に名前をつけるときのようにわくわくして楽しかった。かんがえているあいだずっと彼は朔夜のことをみていた。そして、朔夜はいい名前をおもいついた。

「そうだ！リヨクにしましょう。きれいな緑の目をしてるからリヨク。」

朔夜はその緑の目をのぞきこんでいった。きれいなその緑の目は自分をいやしてくれるようにおだやかにひかっついて安心した。そつとその顔にふれるときらきらした目をおおうまぶたがすこしうごいた。

「どう？きにいった？」

朔夜はそういうといっそううれしそうにその目をのぞきこんだ。ほんとうにきらきら、きれいな目だった。きれいな目をやさしくほそめるとリヨクは「はい、とても」とこたえた。その顔がよろこん

でいるようで達成感と満足感がわきあがってきた。こんな不審な人が自分の家にいるのにそれなのにそんなに警戒感していない。

「朔夜、あなたにはなさなくてはいけないことがあります」

なのつてもいないのにリヨクが自分の名をいったことにすこしおどろいたけどそれ以上にはなさなければならぬことがきになって「なに？」とききかえした。すこし不安が芽ばえている。それはききたくないようなでも、きかなければいけないようなことのようにおもえた。それはまったくの直感で確証はないけれど。

「あなたはこのままでは生きつづけることはできません。ほんらいなら私があなたの命を保つ役目になっていたのですが、私は人の性をうけてしまいました。そのせいで役目をうばわれてしまった」

彼はたんと語っている。そのことがみように安心した。事実だけを述べていくような口調。それに感覚のどこかでリヨクがけっして自分に嘘はつかないような気がする。求めればなんにもかも真実をはなすというへんな感覚。

「私は死ぬの？」

ちいさいときから抱いていた不安。いずれ自分は死んでしまうかもしれないという不安がいつもつきまとっていた。いずれ人間は死ぬけれど、ふつうそれはもつとさきのことと朔夜くらいの歳の子たちは死を実感することはあまりない。でも、自分はつねにそれを感じなければいけなかった。

「このままでは。ですがあなたがもう一度、私とおなじものを求めれば・・・」

そういつて果物ナイフをてわたした。それは家にある果物ナイフでほんらいなら台所にあるものだった。朔夜はさしだされてもそれをつけとる勇気がなくてどうしていいかわからずただ不安な目でその刃をみつめた。

「あなたがいなければ私は生きてはいけない。私にはあなたに従うことしかできない」

そういつてリヨクは朔夜をみつめる。リヨクの本気な目にふるえ

る手でナイフをさわる。その柄をしっかりとつかむと手のひらを傷つける。一本の線から紅い血が玉をつくってそれがだんだんおおきくなり川のようにながれてベッドのうえにこぼれおちた。しかし、シミをつくるばかりでなにもおきない。

「大丈夫です」

なにもおきないことに困惑の色を浮かべた朔夜の手をにぎりしめてリヨクはいった。血がながれる手をつかまれると変化がおきた。にぎりあつた手から光がうまれる。なにがおきたのかわからず目をほそめるとこんどは朔夜の背中に違和感を覚えた。背中から羽根がはえたようにうすい淡い色の膜のような帯があらわれた。そして、それはひろがり朔夜の体をつつむようにちぢまる。そして、朔夜の体にすううときえていった。

「大丈夫ですか？」

リヨクの声が耳にはいる。ゆっくりと目をあけると体がうまれかわったように感じた。体がいままでになくて力にみちあふれているような充実感があつた。なにがあつたかわからないけど病気で死んでしまうような不安から解放されていることだけはわかる。

「なにがおきたの？」

自分におきたことがよくわからない。リヨクはにぎりしめた手をはなした。

「あなたの命の糧を誕生させただけです。博士たちは『羽衣』とよんでいました」

「羽衣？」

そうきかえすと「そうです」とリヨクはこたえてつづけてこうもいった。「まだはなさなければいけないことがあります」そしてそのまま朔夜の意味を無視するようにはなしはじめ。朔夜にはいるいと疑問がのこった。『博士』とはだれなのか。いま自分がしたことはどういうことなのか。そして、リヨクはだれなのか。しかし、リヨクは朔夜が質問する余裕もなく語りはじめる。

「あなたは人間とはちがいます。あなたは広瀬博士たちによって羽

衣についた血痕からつくりだされました。天からおりてきた天女の復元として広瀬博士たちにつくられたのです。ですからあなたは羽衣をなくした状態では生きてはいけなかった。そして、私があなたの羽衣としてあなたの一部であるはずでした。しかし、私は羽衣と人の遺伝子でつくられてしまったためあなたの一部としては役不足だった。それから、朔夜あなたの体にはふたつの命がやどつてしまっている」

頭はうごいていない。ただ混乱だけがうずまいていた。たしかにリヨクは『広瀬』といった。私とリヨクがお父さんと伯父さんにつくられたかのようにいったのだ。『羽衣』や『天女』はこのさいどうでもいいことのようにおもえた。朔夜の体に子供がいるともいつた。朔夜はこれまでセックスどころかキスすらしたことがない。そんな自分に子供ができるはずがないのだ。だって『身ごもる』ということは性交つまりセックスをしないとイケないはずだ。

「だって、わたし彼氏だっていないのに・・・こども・・・？」

朔夜の困惑した瞳をみつめながらリヨクはいった。たんたんと事実をつげるようにその言葉をためらうことなくいったのだ。

「人工授精です。あなたのお腹にやどっている子供たちは私たちとおなじく広瀬博士たちによってつくられたのです」

その残酷な言葉に感情がついていくわけもなく。混沌としたおもいだけが頭を胸をめぐっている。

「じゃあ、私は・・・」

お父さんや叔父さんにとって自分は愛情をそそぐ血縁者ではなく、研究所にいる檻のなかのネズミとおなじだったのか。娘や姪としてうけていた保護や愛は貴重なモルモットへたいしてのものだとかゆのか。

「あなたしかいない。私にはあなたしかいないのです。あなたが望むなら私はあなたの望みをかなえます・・・」

リヨクがそういつて手にふれてきた。あたえられていたモノがくつがえされた絶望、せつに望まれるようにふれたあたたかな手のぬ

くもり。

「私もリヨクもモルモットだったの・・・」

その事実には涙があふれる。リヨクは悲しい目の色でうなずく。その目の色はまるで朔夜の心そのものようだった。くらくて悲しくてどうしていいかわからない。けれど、現実だけはきたえられた刃物のように冷たく光っている。日常に隠されていた事実は恐ろしいぐらいに残酷でうけとめることだけを強要しているようにおもえた。

「どうすればいい・・・」

リヨクにきいたわけでもなく、ただその言葉が口からこぼれた。どうすればいいのだろうか。リヨクがいったことを嘘だともいこみたい。でも、手からつたわるぬくもりが、リヨクの悲しさが、そして自分にかたりかける緑色の瞳が、すべてが嘘ではないと告げている。常識ではかんがえられないことが、事実であるのだと告げていた。

「あなたの望みそれだけが私にとっての事実です」

リヨクは目線ひとつはなさずにすべてを語った。もう日常には帰れない。自分のお腹には命がやどっている。産まなければならないのか、それとも産まないでいいのかそれすらも自分にはわからない。目をつぶって死を望めばリヨクはそれすらもあたえてくれるのかもしれない。でも、幼いころからの死への恐怖がそれを許そうとはしなかった。いままで生きていくことに必死だった。産まれもった病魔との闘いに朔夜は勝つことだけを望んできたのだ。そのおもいが死を恐怖だとうえつけてきた。

「私たちの産まれた場所へいきたい」

朔夜はそうおもった。言葉だけの事実ではなく、目で、耳で、手でふれた事実がほしかった。それらを感じること、すべてをしること、でしかうけとめられないようなきがした。リヨクが朔夜をだきしめる。窓があいてリヨクの背に翼がはえる。白い翼ではなく、黒く羽根のはえた翼だった。

「白い翼がいい・・・」

「・・・」

朔夜のつぶやきにリョクの翼が白へとかわる。まぶしいぐらいの純白の翼は大きくひらいて夜の闇のなかへときえていった。偽りの日々に心をうしなわぬようにつつみこむ腕のなかで朔夜は白い羽根が大地へと舞い降りるシーンをみていた。

この病院にいる看護婦も医師もすべて組織の人間だ。患者の一部でさえ組織の人間だった。特別区域にいる患者はすべて被験者で、そのことを本人たちは知らない。被験者たちは重病人で集中治療室つまりICUにいるのだとおもっている。彼らはD 06が人間の遺伝子にどう影響するか。そのためのサンプルでしかない。

「高志、資料とサンプルの運搬がおわった。ここからはなれるぞ」

明人の言葉に高志はあやつられるように車へとのりこんだ。これからここは大惨事になる。爆薬がセットされたのだ。研究資料や研究施設をいっさい闇にかえすための爆薬がセットされた。被験者や一般患者を道づれに組織のすべてをけしさるのだ。

「兄さん、朔夜たちはどうする？」

発作をおこしたおれてしまった朔夜の姿をおもいながら高志はいつた。彼女のお腹にはふたつの命がやどっている。組織は朔夜にただいな期待をよせていた。その彼女が自分たちの手もとからきえてしまったのだ。

「朔夜はほかのものたちがおっている。俺たちはこれから上海の研究施設で朔夜とおなじものをつくるようにとの命令だ」

朔夜とK 01の実験結果は貴重な功績で、とくに朔夜の遺伝子とK 01の遺伝子をつけついだ子供たちはなにがなんでもつれもどさなくてはならない。

「車をだせ」

明人の言葉に運転手は車をだす。上海の研究施設はこの四倍はあり、たくさんのサンプルが大きな水槽にいる。しかし、それらサ

ンプルは大気にふれると皮膚がとけ筋細胞、内臓、骨と焼かれてとけてそのかたちをとどめることはない。朔夜はこの壁をこえた唯一の存在だった。そして、子をやどすことにすら成功した貴重なサンプル。

「あと三〇分もすればここはあとかたもない」

明人は起爆スイッチを押してつぶやいた。この施設は爆破されてかたちすらなくなる。おもてむきにはガス爆発として処理される。そして、ここの責任者である広瀬兄弟もこの爆発にまきこまれてあとかたもなくふきとばされる。ふたりの遺伝子でつくられたクローンの一部をみつけれられて、警察で死亡と確定し、世のなかからきえるのだ。

朔夜は院長室の地下にある部屋のなかをみていた。そこにはたくさんの機器があつた。薬品のビンやメスに手術台もあつた。本棚にはファイルがずらりとならんでいて、それをひらけると写真やグラフ、意味のわからない単語の羅列があつた。おくにすすんでいくと扉がふたつあつた。ならんだ扉の右側をリヨクはあけた。リヨクにうながされるまま朔夜は部屋にはいる。壁一面の水槽と水槽につながった機器が目にはいつてきた。

「これは・・・」

朔夜は水槽に歩みよりながらつぶやく。青い液体にはなぜだか懐かしさすら感じてしまふ。そして、水槽にかかれたD 06のプレートにきづいた。

「D 06」

D 06は朔夜が幼い頃からまいにち投与されつづけた薬品だった。それがこの青い液体なのだろうか。朔夜は水槽になんの恐れもなくふれる。この水槽はなんなのだろう。

「この水槽のなかで私もあなたも育ちました」

朔夜はリヨクの言葉に水槽から目をはなしてリヨクをみつめた。

「え？」

「この水槽にはたくさんの私たちとおなじ生命がいた。ですが、まともに育ったのは私とあなただけ・・・」

リヨクは朔夜のとなりにたつ。その表情は暗くてよくわからない。朔夜はもういちど水槽に目をもどした。ポコポコと空気をはきながら水槽は青白くひかっている。リヨクは不意にうしろをむくとおかれているパソコンを起動させてなんとかクリックするとディスプレイに画像がうつった。

「あなたの子供です」

リヨクはみじかくいった。朔夜はその画像をみつめ、無意識にそつと両手で腹部にふれる。なんの変化もみせなかった腹部に胎児の鼓動を感じたかったのかもしれない。たがいにむきあっているちいさな赤ん坊の姿を朔夜は不思議な気持ちでみていた。その子たちが自分のお腹にいるのだ。

「人間の胎児でいうと六カ月ぐらいです」

ふつうのならそこまでくると腹部がふくらめてくるのに。その事実もまた自分が人間ではないということを語っている。右手で画面のなかのわが子の写真にふれた。そして、腹部にあてた自分のてのひらに胎児の鼓動をさがす。

「鼓動がしない・・・」

朔夜の言葉にリヨクが朔夜の左手に自分の手をかさねる。そして、朔夜にいった。

「集中して・・・目をつぶって、手に意識を集中させて・・・」

朔夜はリヨクの言葉に素直にしたがう。目をつぶり手のひらに集中すれば、腹部にたしかなくもりを感じて、そして、そのぬくもりにこたえるかのようにとくん、とくんと自分とおなじ鼓動をきざむふたつの音がきこえた。そして、その音は不思議と朔夜の心をやさしくさせる。目をあけてディスプレイにうつるふたりのわが子を見る。無条件のやさしさがうまれて朔夜の表情をやわらかなものへとかえた。

「この子たちのお父さんはわかる？」

朔夜の言葉にリヨクは表情をくもらせる。リヨクの変化を不思議におもいながらも朔夜はリヨクの返事をまつた。

「・・・私です。・・・その子たちの父親は私です」

リヨク言葉に朔夜はなにもおどろかなかった。そうじゃないかとおもっていたからだ。そして、どんな感情が生まれるよりもさきにほっとしていた。普通の男女のようにさずかった命ではないけれど、すくなくともこの子たちは自分たちとはちがう。無機質で冷たい水槽のなで育った自分たちとはちがうのだ。

「あなたがいらないというのなら私はそのほうがいい」

リヨク言葉の意味がわからない。リヨクはいまこの赤ちゃんたちをおろせといったのだろうか。

「どういうこと？」

朔夜のやさしい表情がいつきに疑惑をふくんだものになる。リヨクは悲しそうな目をとじるといふ。

「あなたの望みはかなえない。でも、あなた以上に優先させるものは私にはありません。この子たちが生まれることであなたの危険がふえることが私は・・・心配です」

リヨク言葉が理解できない。では、リヨクは生まれてこないほうがいいとおもっているのだろうか。どういう形にせよ誕生してしまった命をもののように簡単に捨てることはできない。たしかに、私はこの子たちの鼓動を感じてそして、すくなくともその存在にやさしさを感じた。

「おろせっていうの？」

朔夜のその言葉にかんげんに顔をそらしてしまった。水槽をみつけるようにむけられたその背中が朔夜の目には罪の意識と存在をひどく憎んでいるようにうつった。こたえのないまま沈黙だけがつづいて、そして、時間だけがながれていく。朔夜はリヨクに目をはなせなかった。はなせば永遠にうしなうような、ただその姿をみるこただけしかできない。

ドン、という音とともに地面が揺れた。そして、つぎつぎと花火

のようなおおきな音がきこえてくる。けたたましいサイレン音がおくできこえて、あたりの気配がいつきにざわついたものになる。「なにっ」

わからずに朔夜はいった。リヨクは朔夜を守るようにだきしめる。それをまっていたかのようなとなり出口から爆音がきこえた。鼓膜をやぶるようなその音に朔夜の悲鳴もけされる。目をつぶってちぢこまる朔夜の体をリヨクはささえてつぶやいた。

「逃げます」

そういつとしっかりと両手に力をいれて翼をひろげた。そして、ためらいもなくうえへとんだ。ふってくる瓦礫や爆風でとんでくるガラス片から朔夜を守るようにつつみこんで爆薬から逃れるように暗い空へとでる。そして、高層ビルの屋上へおりたった。

「もう大丈夫です」

朔夜にそうつけて朔夜から手をはなした。朔夜はとっさに庇うようにお腹に腕をまわしていたことにきづいてその力をゆるめながら目をあける。そして、リヨクの姿に喉をならした。おびえをみせる朔夜の瞳にしんそこ悲しそうな瞳をしてリヨクは背をむけた。

「みないてください・・・」

罪悪感にみちた言葉だった。自分の存在を許そうとはしないその冷たい背中に朔夜は手をのばした。白い羽根のはえるその背中にふれる。リヨクの体がびくつとふるえた。

リヨクはヘビの顔を人間に変化させるとちゅうのような顔をしていた。ほほまでさけた口にとがった耳。後頭部から首、胸にかけてライオンのような黄色いたてがみがあり、腕や顔の皮膚は爬虫類のものであった。手の指はきちんと五本あったがその指も爪もトカゲのようだ。たてがみのような毛のはえた背中からは白い羽根がはえているがそのしたは獣のもので、黒い毛におおわれていた。

「リヨク、大丈夫だから・・・」

朔夜はやさしくいつて、リヨクがふりむくようにうながす。リヨクは本来の自分の姿を軽蔑しているのだ。その自分の遺伝子をもつ

子供が朔夜のお腹にやどってしまったことに言葉ではいいつくせないほどの罪を感じていた。

「おねがいですから、うまないでください・・・私はもうこれ以上・・・」

睫毛のないリヨクの瞳には罪への罪悪感と自分という存在への嫌悪感そして、それをうけつぐ子たちへの恐怖感がこもっていた。朔夜はそつとリヨクの胸にふれる。心臓があるそのうえに自分の耳をつけてリヨクの鼓動に耳をかたむけていった。目をつぶって耳にわたわるのはおなじようなとくん、とくんという鼓動だけ。

「大丈夫。リヨク、大丈夫よ。私もリヨクもこの子たちもなにひとつかわらない。おなじ音がするもの・・・だから、大丈夫だよ。リヨク」

朔夜の言葉に力は瞳をとじる。涙をながすことのないその瞳には絶望という言葉しかやどらなかつた。自分には朔夜がすべてなのだ。朔夜の望みは自分の望み。朔夜の感じる痛みでさえ自分は感じたいとすらおもう。その朔夜が「大丈夫」だというのなら、「おなじ」だというのなら、なにも恐れてはいけけない。すべては朔夜の意志なのだから。

バン。音をたててひらかれたそのドアはリヨクをやさしい空間からいつきにひきはがし、侵入者への戦闘体勢へともっていく。朔夜をかばうように背中にあわすと、とつぜんあらわれたものをにらみつける。警戒しながら相手を観察した。拳銃か腰のベルトにある。中肉中背のその男は戦いになれたものの気配をまとっている。博士たちのまわし者だろうか。それなら、拳銃をかまえてはいってきてそして、なによりひとりということはないだろう。

「アルの洞察力はばつちりだ」

男はそういつて、リヨクと朔夜を観察するようにみている。リヨクは体に力をいれた。すぐにも相手に反応できるように体をすこしまえかがみにする。

「きみたち広瀬博士から逃げてきたんだろ」

この言葉をきいてリヨクは相手にとびついた。確実に相手の首筋にかみついたとおもったが、かんでいたものは腰にあったはずの拳銃だった。男はとっさに拳銃を腰からぬいてそれを首にあててガードしたのだ。男はそのままリヨクにはなしかける。

「ちよつとまった。オレは敵じゃない。きみたちを保護しにきたんだ。おい、その子なんとかいってくれ！」

いっこうにゆずろうとしないリヨクにしびれをきかして男はいつた。朔夜はどうしていいのかわからずに戸惑ってたおれこんでもみあう二人をみている。そんな、朔夜に信用してもらおうと必死なのだろう。男は呼びかけてくる。

「たのむ。信じてくれ！オレはきみたちに危害をくわえるつもりはない。ほんとうだ！くっ」

リヨクの牙が男の首筋にせまる。そうでなくても、拳銃でのどをしめつけられかけている。そして、男は真つ赤な顔でリヨクをおしかえそうとしているが、かなうはずがない

「やめて！リヨクはなれて」

朔夜のその言葉にはじかれたようにリヨクは男からはなれる。男はむせかえるのどをおさえながらしばらく咳きこんだ。そうしてやつとはなせるようになるのどをおさえたままたちあがっていう。

「たすかった。殺されるかとおもったぜ」

リヨクはまだ、戦闘態勢をくずしてはいない。朔夜をかばうようにかこいながら敵をにらみつけている。朔夜は「やめろ」とはいつたがどうしていいのか判断をつきかねていた。信じていいのか、わるいのか。でも、リヨクが人間に危害をあたえてはいけないようなきがしたのだ。男が一步ふみだそうとした。それをみて朔夜はさげんだ。

「こないで！」

リヨクの腕を力いっぱいにぎりしめてさげんだ。リヨクを制止するためだったのにそうすることでふるえる体を支えていた。男は拳銃を朔夜たちのまえになげすてると両手をあげていった。

「信じてもらえたわけじゃない・・・か？」

男をにらみつけるリヨクの腕をつかみながら朔夜は男をみていた。リヨクのようににらんでいるのではなく、ただみていた。

「保護するってどういうこと？ 私たちをどうするつもり？」

朔夜は男に問うことしかできない。そのこたえをきいてどう判断すればいいのかわからない。温室で育てられた自分には判断するだけの経験も材料もなかった。

「きてくれたらわかる。きみのことならもう一年以上もまえからみてきた」

その言葉に疑惑にちかい感情がめばえる。

「一年もまえから？」

「そうだ」

朔夜のといかけに男はこたえた。そして、言葉をつないでいく。

「きみもその彼も広瀬博士たちがつくったんだろ。オレたちはもう何百年も彼らと対峙してきたんだ。彼らの非道をとめるために私たちはしるべきことがたくさんあって、しらずにいきっていくことは不可能なだろう。そして、すくなくとも目のまえにいるこの男はなんらかの情報をもっていた。けして信じたわけではない。でも、

「わかったわ。あなたについていきます」

それしかなかった。日常生活すらもどつてはこないのだ。爆音のなかを人々の悲鳴がうずまいていた。声もだせない人はその恐怖すらさげぶこともできなかったのだ。そして、その原因は自分にあるのかもしれない。そうおもうとこのままではいらなかった。しなくてはならない自分がなんであるのか。どうして、お父さんたちは自分たちを産みだそうとしたのか。そのためにはこの男についていくしかなかった。

朔夜はリヨクの背にかくれてそつとお腹に手をまわした。不安なおもいをうちつけたかった。そして、腕につたわるふたつの鼓動にもう心はきまっていた。リヨクが「あなたの望みは私の望み」と本

気でいつていたのなら私の望みはもうきまってしまった。その望みにはリヨクが必要だとおもった。そして、この男も必要になると直感にたおもいで決断したのだ。そう、信じたわけではない。

つれてこられたのは豪華客船。陸のみえない船のうえは自然と不安はなかった。リヨクがちかくにいてくれるからかもしれない。それは不思議な感覚だった。リヨクはそつと朔夜によりそうといった。朔夜が不安がっているとおもったのだ。

「大丈夫です。陸がみえなくとも私があなたを陸まで運びます。どうか、心配しないでください」

リヨクの手をにぎるとにつこりと笑った。その笑顔はこんな状況ででるようなものではなかったけど、自然と笑うことができたのだ。リヨクがいうとおりそのきになればいくらでも逃げるができるのだ。そして、豪華客船の頂点の一室につれてこられた。そこにはたくさんの本とおおきな机にパソコンがおかれている。パノラマのようなガラスのまんなかにその部屋の主がいた。

「おまちしていました。朔夜さん」

部屋のあるじはいう。歳は二〇代前半ぐらいだろうか。東洋人のような黒髪と西洋人のようなすきとおった肌をしている男はしたしげな雰囲気がある。なんでだろうか、リヨクとおなじような同類のようなそんな感じがした。理屈ではない感覚を説明するのはむずかしいけど『同類』もしくは『同種』という言葉がいちばんちかい。

「そちらへどうぞ」

そういつて机のまえにおいてあるソファへ座るようにすすめられた。朔夜はすわるべきかどうするか悩んでいたが、リヨクがすわるようにうながしたのですわることにした。リヨクにエスコートされてソファにすわる。リヨクは朔夜のすぐうしろにひかえるようにたっていた。

「私はアレン・ラエリア。このフェインの創立者です。われわれはすくなくとも敵ではありません。とはいっても、なにからはなせば

信じてもらえるでしょうか？・・・そうですね、言葉をつづるよりもみていただくほうがいいかもしれない」

アレンはそういうと机のひきだしから一本のナイフをとりだした。リヨクの気配がざらついたものになる。でも、アレンからは殺気めいたものは感じられない。それどころか表情すら変化しない。やわらかくやさしいものだ。そんな男がとつぜん自分の手をさしたのだ。その刃は手のひらを貫通している。アレンはなんのためらいもなくナイフをひきぬくと朔夜にその手をみせるようにかかげた。
「っ・・・」

言葉もなくその光景を朔夜はみる。こんなことをするとはおもっていなかった。そして、男の手のひらの変化におどろく。それは、朔夜たちとおなじものだった。

「わかっていただけましたか？私はあなたとおなじです」

アレンの傷はアレンがはなしているともうふさがってしまった。アレンはそれを見るといったん言葉をとめて胸ポケットから真っ白いハンカチをとりだしてその血をぬぐった。

「私は朔夜と同種で、人間ではありません」

その言葉にリヨクが口をひらいた。リヨクからはさきほどのようになざらついた殺気はきえていた。そして、かわりに迷いのある表情をうかべている。

「あなたは私とおなじなのですか？主によって存在を許される私と・・・それとも朔夜とおなじなのですか？」

リヨクの言葉にアレンはしずかに語りはじめる。朔夜が知らないこと、リヨクが知らないこと。彼が知るすべてを。

「私は朔夜さんの種族のオスになります。日本では我々のメスことを天女というんですよ。昔話にでてくる天女です。天女にとって羽衣なくしては生きていけない。それはあなたがたも知っていますね？」

とわれて朔夜はうなずく。アレンはそれをやさしい顔で確認するとはなしをつづけた。

「リヨクくん、きみなら本能的にわかるだろうが、昔話のように天女にとつての羽衣は天へとかえるものじゃない。彼女たちが自分の力のすべてで誕生させたもうひとつの心臓とよんでもいい。それと同時に羽衣は彼女たちの願いを叶えるためのものです。オスにはない、彼女たちだけの能力」

朔夜はリヨクをみる。リヨクは平然としている。羽衣を誕生させたのが願いを叶えるためならリヨクは私が願うことを叶えるのだろうか。リヨクは私がすべてだといっていただけ、こんな強制的なものだとはおもわなかった。

「でも、それじゃあ、羽衣だけを復元すればいいんじゃないの？」

朔夜の疑問はあたりまえのようにわいたものだ。天女の力のすべてだとゆうのなら羽衣だけを復元してしまえばいい。リヨクのように人の遺伝子とかけあわしてしまうことが可能なのに、わざわざ天女をよみがえらせなくても。

「それは、無理です。羽衣だけを復元することはできません。天女と羽衣これらはたがいに存在しあつてこそ機能できる。リヨクくんが人間の遺伝子をつけてでも成長することができたのは朔夜さんがいたからかもしれません」

アレンの言葉にあらたな疑問がうかぶ。リヨクはたしかに私ちゆうしんだけでも、けして自分の意志をもっていないわけではない。私のお腹にいる子供たちをリヨクはまちがいなく「産まないで」といったのだから。でも、その疑問はリヨク自身の言葉でうちけされる。

「私のDNAは九〇パーセント以上が人間のもので構成されています。羽衣のもつ力だけになるべくこの朔夜とのつながりはなるべくないようにつくられました。しかし、私には朔夜が必要です。根底のところではまだつながっている」

「そうでしょうね」

リヨクの言葉をきいてアレンはふくむようにつぶやいた。そして、朔夜にむきなおるとアレンはいう。

「私がフエインをたちあげたのはルフナをとめるためです。彼は自分の野望のためにたくさんの罪なき人々を苦しめています。そして実験で生まれた産物を生命兵器として世界中にばらまいている。彼らは不完全でまだ力を有していないが人間よりも身体能力はたかく、すぐに傷もふさがる。そして、いつていの時間がすぎれば勝手に消滅する。天女や羽衣から誕生したものは私たちのようなものでないと殲滅はほぼ無理でしょう。きみやリヨクくんのような力が必要なんです。僕はきみたちと手をくみたいとおもっている。どうか、力をかしてくれないか？」

朔夜はその言葉をとりあえず信じてみることにした。お父さんたちをこのままにしてはおけない。そして、兵器として消耗品のようにあつかわれる命をこれ以上存在させてはいけないようにおもえた。でも、ふっとおもう。朔夜は肉や魚を食べることもましてや血などみたときには数日ねこんでしまう。

「でも、私、血もみられない」

朔夜の言葉にリヨクがこたえる。朔夜がいままでそうだったのは動物の血肉を処理する能力がなかったからだ。

「もう、大丈夫です。羽衣が穢れをはらいます。あなたの体はいままでとはなにもかちがいますから」

リヨクの言葉に覚悟がきまる。覚悟のきまった凜とした表情を朔夜はしている。戦う決意をした私のあとをリヨクはなにもいわずについてくるのだろう。私がやめるといわないかぎり、どんな茨の道でもリヨクはなにもいわずにすすむのだろう。そんなふうにリヨクの意志をしぼるのはけっして肯定できるものではないが、でも、自分にはリヨクが必要だった。

「わかりました。私にあなたたちの手助けをさせてください」

その言葉がすべてのはじまりだった。けわしく血塗られた道への入り口であり、これまでの平凡な日常との決別を意味した。さしだされた手をにぎりながら朔夜はアレンにいった。

「それと、朔夜とよんでください。なれなくて」

リヨクと朔夜は船のデッキにいた。海の地平線にまっかな夕日が沈んでいく。雲は太陽を中心に金色にかがやいて太陽からはなれるほどその色が赤にちかづいていた。その太陽を海の風をうけながら朔夜はみつめている。そのよこにはリヨクがいてリヨクは朔夜の赤くそまるよこ顔をみつめていた。

「リヨク、私きめたの。この子たちをうむわ」

朔夜はそういうとリヨクをみつめる。リヨクもその言葉に朔夜の瞳をみつめる。そして、とても困ったような目をする。朔夜はリヨクに手をのばす。

「そんな困った顔しないで。リヨクにはこの子たちのお父さんになってほしいの」

リヨクはその手をとってひざまずくとそつと口づける。それはまるでおとぎばなしにでてくる王子様のようだった。そして、目線をあげるとリヨクはもうしわけなさそうにいったのだ。

「私にはあなたとならぶことは無理です」

リヨクの言葉に朔夜はおなじ目線になるようにすわるとリヨクにいう。

「大丈夫。リヨクなら大丈夫。私とあなたは根っこでつながっているんだもの・・・リヨクならきつと、ううん、絶対にいいお父さんになるわ。私もいいお母さんになりたい。産んであげたんの。つらいこともおおいかもしれないけど、いきてみなければわからないことはたくさんあるから」

朔夜にはかなわないとおもう。彼女の意志が自分の意志であることは本能のようなもののに、こんなふうにおもつこと自体が不思議なことなのかもしれない。

「私にはあなた以上に大切なものができません。私にはあなたただけだと覚えておいてください」

リヨクの言葉に朔夜は笑った。夕日はもうおおかたしずんでいて夜のとばりが降りてきている。星と月と夕日にかこまれた世界。世

界のすべてがそこにあるようで完璧だとさえおもってしまふ。その完璧な世界でリヨクも朔夜もなにひとつ不安は感じなかった。未来に希望はなく、茨の闇のはずなのに。朔夜はリヨクの手をとってお腹にふれた。闇のなかにもきちんと光りがあるのだ。ここにちいさなふたつの光りがある。

第2話

朔夜とリヨクがフェインにくわわってからもう一年半がたっていた。この一年半、リヨクはさまざまな実戦をつんできた。リヨクはそうゆう教育をうけてきたのでまだそんなに苦労はしなかった。だが、日常生活はちがった。一般的な常識がないリヨクには悪戦苦闘することがおかつた。電車にのることもそのひとつだ。どうやって乗ればいいのか。どうして、切符を買うのか。そして、どの電車にのればいいのかがわからなかった。一方、朔夜はお腹がめだつようになるまでのあいだに羽衣を使いこなせるようになっていた。実戦はリヨクが反対したのでまだしていないが、それでも戦力になるようにがんばった。

「リヨク、これで今日はおわりだ。どうだ、朔夜のようにすは？子供、うまれそうか？」

レセルバル・サトウはいった。レセルバル・サトウ、通称レセはあの屋上にあらわれた男でいまはチームメートだ。ほかに、バーン・アルジャーノに医者サラ・サファイがおなじチームで、リヨクたちは任務でフランスにいる。朔夜とリヨクはフランスのパリで暮らしていた。アレンの所有するマンションにふたりだけなんです。ほかのメンバーはそれぞれおとなりとしてちかくにいる。そして、いまはフランスにある製薬会社と食品会社を調べてかえってきたところだった。

「いいえ、朔夜はもうすぐうまれそうといっていますがその気配は・・・」

朔夜が妊娠してからもう二年ちかくたつ。朔夜がうむ決意をしてから半年後にお腹がめだちはじめた。サラが生まれてもおかしくなっていくってから五ヶ月もたっている。それでもいつこうにうまれてくる気配をみせなかった。

「そうか・・・検査では異常ないんだろ？」

レセが心配そうにいった。たしかに、心音もしっかりして子供になにか問題があるわけではない。サラがなにも問題がないというのなら我々にはうまれてくるのをまつしかなかった。

「人間の遺伝子で穢れるとリヨクはいつていたな。もしかするとそれが原因なのかもしれない。古来日本では出産は穢れの意味もふくまれている。そうかんがえれば、羽衣がなんらかの影響をあたえているとかんがえてもおかしくはない」

アルがいった。アルのいうとおりかもしれないとリヨクはおもった。血の穢れや気の乱れが朔夜の命をおびやかす。それを浄化しはらっているのが羽衣だ。リヨクにはその力はもうないが彼女の体内にある羽衣はその力をもっている。

「でも、それなら子供はうまれないのか？」

「いや、それはわからない。時期がくればうまれてくるのかもしれない」

アルとレセがはなしているあいだ、リヨクは朔夜のことをおもっていた。今日はサラのところで検診を受けているはずだ。すくなくとも、ひとりでいることはない。そんなことをおもっていたときだった。

「・・・うまれる」

「「え？」」

リヨクのその言葉にふたりはまぬけな返事をかえす。そんなふたりの言葉もきかずにリヨクははしりだす。朔夜のもとへとはしりだした。そんなリヨクの背中をふたりはみつめて、顔をあわすとあわててリヨクをおいかけた。

そのころ、朔夜はおおきなお腹をさすりながらサラとはなしをしていた。今日もサラの家で超音波診断と赤ん坊たちの心音をきいた。なかなかうまれてこない子供たちになにかあつてはこまるからとサラは毎日このふたつの検査をつけるようにといった。そして、それが終わったあと朔夜はサラを自分の家にさそってお茶をたのしんで

いたのだ。

「なかなかうまく来てこないわね。検査はいつも異常はないからいいけど」

サラはコーヒーカップをつくえにおきながらいった。朔夜はお腹を両手でさすりながら赤ん坊たちをみる。

「でも、もうじき生まれてくるきがするんだけどな」

「そうね。どうせ私たちの常識が通用するわけじゃないし。それより、リヨクとはどうなの？」

サラがいった。その言葉の意味がわからなくて朔夜はまぬけにもそのままかえした。

「どう？」

「そうよ。だって、夫婦でしょう？いまは子供がいるからセックスはできないけどキスぐらいはしたんじゃないの？」

からかうようなサラの視線と言葉に朔夜は顔をまっかにそめて反応する。サラはおかしそうにほほえむとこのおぼこい母親の心配をした。サラから見ると朔夜はまだまだ子供でとても二児の母親になれるような感じではない。恋もしたことのないおぼこい朔夜のゆくすえが心配なのだ。

「そんなことしません！」

朔夜は恋すらしたことがない。ただお腹にやどった子たちに外の世界をみせてあげたかった。育ててあげたかった。朔夜にはお父さんはいたけどお母さんはいなくて、どうせ子供を育てるなら両親がふたりそろっていたほうがいいとおもったからリヨクに夫婦になろうといった。できるだけふつうの環境で育ててあげたいから。

「ほんとうに一緒にいてなにもないの？」

寝室はおんなじだし、ひとつ屋根の家で不自然な感じもする。

「してません！それにリヨクはそんなことかかんがえてないです」

「そうなの？」

不思議そうにサラはいった。そして、カップに口をつける。朔夜はたたまれなくてカップに口をつけた。朔夜はカップに口をつけた

ままサラをみる。過激な質問をしたサラはなんでもないようなすずしい顔をしている。うらめしい気持ちでサラをみているとつぜん、腹部に激痛がはしった。

「っ」

お腹をかかえてうずくまる朔夜にサラはあわててちかづいてくる。そして、すぐさま腕時計をみた。陣痛なら時間の感覚をはからなければいけない。胎児はすぐに生まれてはこない。そう、あわてることはないのだ。苦しそうにしている朔夜にサラは声をかける。

「朔夜、大丈夫よ。一回目の陣痛はすぐにおさまるわ」

あくまでも人間の場合だけど、とサラはおもったがきつと彼女たちだっておなじだろう。サラは胸ポケットからボールペンを取りだすと自分の手のこうに『12:27』と書きこんだ。そして、朔夜の背中をさすってあげる。朔夜はうめきながら必死に陣痛の痛みに耐えたがサラがいったとおり数分もたたずにおさまった。

「もう大丈夫です」

ずっと背中をさすってくれていたサラにそういうと朔夜はゆつくりと上体をソファにもたれかける。そして、ふうーと息をはいた。その姿をみてサラが台所へとはなれていった。そして、朔夜にいう。「朔夜いまのうちに腹ごしらえしときましょう。出産には体力がいるから、なにか食べたいものはある？」

「そうですね。冷蔵庫に昨日ののこりのスープがあるんです。それと、親子丼が食べたいんですけどつくれます？」

朔夜の言葉にサラは「オヤコドン」とつぶやくと朔夜にいう。

「次の陣痛まで時間があるんですもの、ふたりでつくりましょう。ライスはあるの？」

「そうですね」

朔夜はたちあがるとさきほどの激痛がうそのように消えてスタスタと歩いて台所へとむかう。そして、ふたりでならんで腹ごしらえの準備をした。

リヨクは必死にはしっている。車でかえるよりも自分の足ではしったほうがだんぜんはやい。リヨクの背後にはもうふたりの姿はなかった。それでもリヨクはきにせずはしっていく。

「朔夜っ」

リヨクは勢いよくリビングのドアをあけた。そこにはリヨクがおもっていたような苦しんでいる朔夜ではなく、どんぶりをかたてにスプーンを口にふくんでいる朔夜がいた。そして、リヨクをみて不思議そうに首をかしげている。

「どうしたの？ そんなにあわてて？」

朔夜ではなくサラがいった。朔夜は口をもぐもぐうごかしている。リヨクはたったままこたえる。

「いえ・・・あの、子供は・・・」

口ごもりながらリヨクがいった。すると、今度もサラがこたえる。朔夜は口にふたたびスプーンをはこぼうとしている。

「そうそう、さっき陣痛があつたのよ。ちょうどお昼だったし、力をつけておこうとおもって。オヤコドン、リヨクもいかが？」

サラの言葉に力がぬける。出産は男がおもっているよりもたいへんではないのかもしれない。リヨクはともごはんを食べるようなきにはなれず、それをことわると朔夜のとなりにすわった。朔夜の親子丼はもう半分以上ない。朔夜はぱくぱく、もぐもぐとたべていてなんともなさそうだった。そして、そのままたべおわってしまう。

「ごちそうさまでした」

手をあわせて朔夜はいうとかさねた食器を台所へはこぼうとしたのでリヨクは食器をとりあげてかわりにはこぶ。サラの食器もリヨクは台所へはこんだ。

「あまり運動してなさそうね」

サラはそんなリヨクをみていった。朔夜は目だけで肯定するとひとこと「隠れて」といった。そして、台所で食器を洗っているリヨクに目をむけると朔夜はつづけていう。

「かえってくるまでに掃除とか家のことをすると怒るんですよ。運

動しないとふとっちゃう」

「いいじゃない、楽で。なにもしないよりしてくれるほうがずっと便利よ」

ふたりはそういいながらリヨクが食器を洗いおわるまでリヨクを魚にはなしをした。リヨクが食器を洗いおえてしばらくしたあと、リヨクとおなじようにものすごい勢いでリビングにレセとアルが突入してきた。サラと朔夜は二人のようすにくすくすわらい。そんな二人をきよとした目でみていた。その後、二回目の陣痛がおり回をおうごとに間隔がみじかくなり、サラは男たちを外においだした。陣痛がおこるたびオロオロするばかりで邪魔だった。

「息をすって、はいッふんばって！」

朔夜はサラの言葉にあわせて息もたえだえに腹筋に力をこめた。信じられないほどの激痛にたえながらも母になる本能が弱音をはかそうとはしない。朔夜はひたすら苦しみにたえながら子供たちと会えることをかんがえた。

「はあああ、ふうッ。くうっ」

頭の線がきれるのではないかというほど腹筋に力をこめてふんばる。サラの声をたよりにタイミングをあわせてふんばる。そうして、たえること一時間後、ひとりめの赤ん坊の産声があがる。そして、その三十分後にふたりめの産声があがった。

サラはふたりを湯船であらいタオルでくるむと出産の苦しみから開放された朔夜にふたりの子供をだかせた。とたんに朔夜の表情が喜びで華やかなものになる。

「ママよ。ずっと会いたかった」

ふたりの子供にはなしかける朔夜の姿はサラに聖母マリアをおもいださせる。そんな微笑ましい母と子をのこして、となりの部屋にまたせている男共をよびにいった。サラの姿をみるなりまっさきにリヨクが部屋にはいつていった。

「うまれたんだな、やっ」と

レセがほっとしたような顔をしていった。サラも自然とほほ笑む

と「ええ」とこたえて性別をつける。

「男の子と女の子よ。母子ともに元気だわ」

サラの言葉にアルがいった。

「これで朔夜も戦いに集中できる。いずれ彼らもわれわれとともに戦うことになる・・・」

うまれてきた子供たちの役割はおおきいものになる。朔夜がそうであるようにふつうの人間とはちがう。フェインにさずかった最高の矛だ。朔夜がくわわってからフェインは彼女の盾になった。

「それまでにおわるだろう」

レセはそういうと朔夜とリヨクのいる部屋へいった。アルは「そうだな」とつぶやく。月はなく、星ばかりが輝く空のもと祝福をうけた子供たちが過酷な運命を背おわないように。彼らが大人になるまでに決着をつけなければならない。

無機質な研究室の暗い部屋。さわがしい地上の世界とはちがい、ここはいつも暗く無機質な機械音とつくられた生命の心臓の音だけが支配している。

手からすべりおちるようになつてしまった女神のかわりのようにたくさんの人形たちがうまれている、産声もあがることもなくときが満ちれば偽造母体からでくる人形たち。今日もまた数対の人形がうまれた。でも、彼女たちは女神とは基本的にちがう。安定的に環境に適応できるように人間の細胞が45・03パーセントふくまれている。この0・03パーセントが人間に女神の力だけをあたえる数値だ。それを発見してからというものの毎日のようにつくりつづけている。

「高志、ようやく次世代がうまれたようだ」

数枚の報告書をつくえになげすてるようにおき明人はいった。つくえにちらばった報告書には娘として育てた朔夜と羽衣と人間の遺伝子でつくったK 01の姿があった。K 01は朔夜をきづかうようによりそっていた。おおきなお腹の朔夜によりそう姿は仲のい

い若い夫婦のようにもみえる。

「やはりひとりは男の子だったんだね」

高志はその報告書を一枚とっていった。そこにはうまれてきた子供たちの性別などの情報と母親である朔夜についてかかれていた。そして、なにより目をほそめてみたのは文章のよこにはりつけられた写真だった。朔夜が双子のうちのひとりを抱いてあやしている。その顔はやさしい顔をしている。幸せをたたえたようなおだやかな顔だった。

「われわれがいま誕生させている子たちはながくはいきられない。以前のようにすぐに崩壊しないだけでしたが・・・それでも不完全だ。しかし、これ以上人間の遺伝子を優先させると傷の治りのはやいだけのただの人間になってしまう・・・」

高志は兄である明人の言葉を朔夜と朔夜の子供たちのうつった写真に目をおとしながらきいていた。そして、兄にあわすように明人の言葉をとってはなした。

「僕たちの予想がただしければ、うまれてきた子供たちは人間の遺伝子を子宮のなかで消滅させているはずだから、かぎりなく女神と羽衣の細胞情報だけをうけついでいるはず」

朔夜に子供をうませることにしたのはわけがある。彼女たちには羽衣が必要だということはわかっていた。しかし、その羽衣のつくりかたがわからない。羽衣を調べていると布のようにみえるそれは繊維ではなく遺伝子をもつ細胞だった。しかし、固有に意志をもつものではなく、みずからは意志をもつことのない生命体だった。動物の手足とかわらない。

そこで明人たちはこの細胞にいろいろなほかの生命の遺伝子をかけあわせてみた。どれもかけあわせることは可能だったが、意志をもちはしなかった。そして、最終的に意志をもったのが人間の遺伝子だったのだ。これについてははつきりしたことはわからない。そして、同時進行で羽衣の本体とでもいえる女神もなんともなんども実験をくりかえしたが成功はしなかった。そんなある日、羽衣と人

間をかけあわせた細胞がかたちになりかけたそのとき、朔夜もまるでそれに平行するように誕生した。この経験をもとにいま誕生している彼女たちには羽衣、人間、女神の遺伝子が小数値の単位でくみあわさって固体として存在している。

しかし、朔夜はだんだんと体が弱っていき本来もっているはずの力ももってはいないようだった。その命にさきがみえたとき遺伝子をのこすために子孫という形で保存しようとしたのだ。そこで、抜擢されたのが羽衣からつくりだしたK 01だった。彼の羽衣の遺伝子情報がうまれてくる子供になんらかの影響をおよぼすとかんがえたのだ。そして、もうひとつ理由があった。彼を観察していくなかで人としての遺伝を消去していくことにきづいたのだ。それは画期的な発見で、すべての人間としての遺伝を消去することはなかったが、意志をもち、力をそなえ、この世界で生きていくための体をえたのだ。彼は朔夜がいなくても存在しつづけることができる。

「この報告書では子供たちに力があるかはわからないが・・・しかし、いちばんかんがえ深いのは朔夜に力があらわれたことだ。いや、目覚めたというべきだろうか。K 01と接触したことでおおきな変化があつたようだ。朔夜が手元からいなくなつたのは誤算だったが、得るものはおおきかった」

高志は満足そうにわらっている兄に背をむけてこの地下の世界から逃げるようにでていく。そんな高志の背に明人はいった。

「高志、明日パリへ飛ぶ。準備しておけ」

高志は返事もせずでていった。明人はそんな高志にきをわるくすることもなく、報告書の写真を手にとった。そこには、敵である三人の人物がうつるっている。明人はたのしそうにその写真をみていた。パリには障害物があるが、かならず子供ごと朔夜をとりもどすきでいた。だれにも邪魔はさせたくない。障害になるのならそれを排除すればいい。それがどんな手段であろうとかまわない。

朔夜が出産をおえてから二ヶ月がたっていた。朔夜はいま、ほ乳

瓶で子供にミルクをあたえている。母乳で育てたかったが母乳はふたりの赤ん坊を満足させるほどでなかった。リヨクはもうひとりの子供にミルクをあたえながら朔夜をみる。ここ何日もふたりの夜鳴きで満足には寝られていないのに朔夜はみちたりた顔をしてミルクをあたえていた。

「紗枝、ミルクのみおわってるよ」

朔夜の声にハツとしたようにリヨクはほ乳瓶をみる。ほ乳瓶はからでそれでもまだたりないとゆうように紗枝はほ乳瓶にしゃぶりついている。リヨクが抱いている子は長女の紗枝。そして、いま朔夜のうでのなかでミルクをのんでいるのが長男の瑠希だ。ふたりはおなじ顔をしていてみわけがつきにくく、服の色が二人を区別する唯一の手段だ。しかし身体的にゆいいつの違いがある。それは目の色だ。琥珀色の目をした子がお兄ちゃんので瑠希、紫電の目をもつ子が妹の紗枝である。

「あ、はい」

リヨクは紗枝からほ乳瓶をとりあげると二本目のミルクをあたえる。勢いもおとろえることなくこくこくと飲んでいく。

「紗枝はよく飲むのね」

朔夜は満足そうにいった。瑠希はあまりミルクを飲まないが、紗枝は食欲旺盛だ。瑠希があまり飲まないといってもサラにいわせれば普通くらいの量は飲んでいらいけど。ふたりの食事の時間がおわるとこんどはおねむの時間でミルクをのみおえてからしばらくあやしているとすすうすと寝息をたてた。

「おやすみ」

朔夜はそうゆうと子供部屋の電気を消してリヨクのいるリビングにいった。子供たちが眠たいように朔夜ももう目が限界だった。

「やっと寝ついたんですか？」

リヨクがソファでくつろぎながらいった。朔夜はうなずくとリヨクのとなりに座った。座ってしまうとよけいに眠たくなった。リヨクの肩に頭をおいてうと、うと、と目をとじてはあける。そんなよ

うすにリヨクはきづかうようにいう。

「眠ってはどうか？ 昨夜もあまり眠れていない」

そういつて、リヨクは朔夜の頭を膝のうえにみちびく。そして、朔夜の体にシヨールをかけた。朔夜はいまいに返事をかえずとそのまま眠ってしまう。リヨクは朔夜の寝顔に安らかな瞳をむけた。そして、読みかけの本を読みはじめる。

そうしてどれくらい時間がたっただろうか。中盤までよんであった本がもう読みおわってしまったている。それでも朔夜は目をさます気配はなかった。となりにいる子供たちも目をさましていないのだろう。物音ひとつしない。リヨクにはこの瞬間、瞬間がとまっているように感じられた。そして、すべての幸福がそこにあるかなのようなそんな感覚にもとらわれている。

このまま時間はうごきださないと錯覚しそうになったとき、となりの子供部屋からものすごい音がした。ガラスをつきやぶる音に朔夜は瞬時に目をさまし、一目散に子供部屋にむかう。リヨクも朔夜とともに子供たちのもとへといった。

「だれっ」

子供部屋についた朔夜がさげんだ。子供部屋はふたりの赤ん坊の泣き声と武装した三人の侵入者で騒然としている。にらみあつてうごかうとはしない侵入者にリヨクはとびかかる。おなじように反応した侵入者はふたてにわかれた。リヨクへとたいじするものとベビーベッドへとむかうもの。朔夜は敵にたちはだかりベッドで泣き声をあげる子供たちをまもる。腕からはうすい羽根のような布がのびている。あの日、リヨクの力をかりて誕生させた羽衣だ。

「子供はわたさないわ」

敵をはじいた羽衣はシウルシウルとかたちをかえて朔夜の手に刃としてあらわれる。朔夜はあらわれた剣をかまえる。相手は両手に短刀をもっていた。実戦経験のない朔夜にどこまで通用するのかわからないがやるしかない。

朔夜がふかく息をしたのを合図にふみこむ。刃がぶつかりあつて

甲高い悲鳴をあげる。とびちる火花は朔夜がなんとか相手についていつていることをしめしていた。リヨクは朔夜を気にながらふたりの敵を防ぐ。人のものではなくなつた両腕は刃すらはねかえしている。

「くっ」

朔夜がおされていることにきをとられた瞬間、ひとりを逃してしまふ。逃れてしまった侵入者は朔夜の腕をきりつけて子供たちをあつというまに手中におさめた。朔夜は子供をかかえた侵入者にきりかかるうとしたが一步とどかない。朔夜の背後にまわつたほかの侵入者が朔夜にきりかかった。

「くうッ」

「朔夜っ」

朔夜のふきだす血をみながらリヨクは叫んだ。まえにたおれこもつとする朔夜を背後から抱きとめると朔夜もつれさるうとする。リヨクは朔夜を抱えた敵の首を左手でふきとばす。そして、朔夜をとりのどした。そのすきにふたりの侵入者は姿をけしていた。朔夜の体からでた血が朔夜の服を汚したがもう血はとまっている。朔夜の傷がふさがるのをみてリヨクはほつと息をついた。

「おわなきや」

傷がなおつたことも自覚しないまま朔夜はたちあがり侵入者を追おうとする。リヨクはそんな朔夜の腕をつかまえるとそれを阻止した。朔夜は蒼白な顔で必死に抵抗しようとする。

「はなしてっ、リヨク手を、子供たちを追わなきやッ」

リヨクは力ずくでひきよせると両腕でしっかりと朔夜をおさえこむ。それでも暴れる朔夜にいった。

「もう追つても無駄です。あなたも体がもたない」

暴れていた朔夜は不意にめまいがおそい。リヨクの腕のなかにくずれおちる。無理もない。羽衣をつかつたあとにあんな大怪我をしてその傷をなおしたのだ。体への負担があつてあたりまえのこと。

「どうしたの？」

「お願いします」

騒ぎをききつけたサラがはいってきた。サラに朔夜をまかせるとリヨクは子供をさらった侵入者のあとを追う。しかし、その姿はななく痕跡すらみつきりはしなかった。

あのうごき。間違いなく博士たちの試作品、いや、もしかしたらもう完成しているのかもしれない。子供だけではなく、朔夜もつれさるうとしていた。

リヨクは自分と同類であろう侵入者のことを考えながら部屋にかえた。部屋にはサラにささえられてやっとなおおいでたっている朔夜の姿があった。リヨクは朔夜の体をささえるように手をのばしたが、朔夜に拒否されてしまう。

「どうして、子供をたすけなかったの」

ちいさくせめる声にリヨクはなにもいえない。サラは複雑そうな顔をしたがそのままにもいわずに朔夜をリビングへつれていった。蒼白な顔でふらつきながらさっていく朔夜のうしろ姿をリヨクはみていた。

サラから連絡をうけてレセとアルがかえってきた。ふたりはサラから事情をきく。朔夜とリヨクのことも。そしていまふたりは別々のところにいる。朔夜は自分の部屋で体力の回復をまち、リヨクはベランダでひとり町をみていた。

「リヨク、子供たちがつれていかれたところがあった。アレスだ。やつらはセヴェンヌ山脈に研究所をかくしもっているようだ」

アルはリヨクの背中に声をかけた。リヨクはゆっくりとふりむくと無表情のままこたえる。

「わたしたちが目をつけていたところですね」

「そうだ。入り口もやっと特定できた。アレスに一軒の家がある。

そこはおもてむきはふつうの家族として暮らしているがその地下室はセヴェンヌ山脈につづいている」

アルはこたえる。リヨクはアルのよこをよこぎるという。

「朔夜に報告してきます」

アルはリヨクの腕をつかまえていった。リヨクはなにもいわずま
えをみている。

「朔夜とはなしあえ。きみは道具じゃない。意志をもった個人だ。
個人と個人がわかりあうには言葉をかわすしかない」

リヨクはなにもいわずにその場をさつていった。頭のなかでなん
どもアルのいった言葉をくりかえす。

私はそんなこと望みはしない。

リヨクはなんども心のなかでつぶやく。アルの言葉をすべて否定
するように。自分が朔夜の一部ではなく個人であることを強く否定
した。

青い屋根にすしクリームがかった白い壁の家。ポストには手紙
が二通。玄関の扉にはかわいいアーチじょうのかざりがあった。
ごくふつうのありふれた家。そこには若い夫婦がふたりですんでい
ることになっている。

レセとアルがかわいいアーチをかざった玄関をたたく。そこから
は若い女がでてきた。にこやかに笑みをたたえてでてきたその女に
アルは冷静な声でつける。

「ここに昨日ふたこの赤ん坊がはこばれたとおもっていますが」

「いえ。そんなことはなかったけど」

アルのといに女はなにをいわれているのかわからないとゆう表情
でこたえる。そして、こたえながら玄関をしめようとした。レセは
閉じようとする玄関のドアを手で阻止する。アルは自分の体で拳銃
をかくしながらわざとにこやかにいった。もちろん拳銃は女にむい
ている。

「すみませんが、あそこにいる私の友人とともに地下をみせてはい
ただけませんか？」

アルはそういいながら拳銃の安全装置をはずす。カチャっという
不吉な音をさせてからさらにつづけた。女はアルの背後にいる朔夜
と目があいあきらかに表情をかえた。

「もちろん、無理にとはいいませんが」

女は拳銃とアルをみてしばらく沈黙するとあきらめたようにドアをあけていった。

「どうぞ」

朔夜とリヨクはふたりのやりとりのようすをみていたが、交渉が成功したことがわかるとその家の玄関へとむかった。体をすこしよけて家にまねいた女を朔夜はみた。女の歳は二〇代前半くらいでブロンドの髪がふんわりとやわらかそうだった。

四人が家にはいると女は玄関をしめて、地下室へと案内した。アルとレセを先頭にリヨクと朔夜はついていく。朔夜の顔色はもどつていてもうふつうに戦える。台所に地下へとつづく階段があった。五段ぐらいの階段をおりていくとそのままおくへといく。しかし、そこにはレンガの床と壁ぞいにおかれた棚だけだ。棚にはいろんな物がおかれていて、ごくふつうの地下の物置のようだった。

「そこからはいらないでください」

女はそういうと棚と壁のあいだに手をいれるとスイッチをおした。スイッチといつてもなにもないようにみえる。きつと手をかざせば反応するようになっているのだろう。

「なにもおきない」

朔夜がつぶやいた瞬間、とつぜんレンガの床がわれていく。ブロックとブロックのあいだは自然なようにみえたがよくみるとすきまがあったのかもしれない。それにあわせて床がひらいてゆくとそのしたにはさらに階段があった。その階段にはおわりがないようにおもえた。

「いま電気をつけます」

女はそういうと先頭にたち、階段を数段おりると床がひらいたところにあるスイッチをおした。たちどころに蛍光灯がついていく。でも、蛍光灯がついてもまだ、そこが見えなかった。女がおりていくのをアルとレセが確認するとレセが朔夜とリヨクもくるように合図する。朔夜はリヨクの顔もみないでおりていった。リヨクもその

あとをおう。

底なしのようだとおもった階段はやっぱりながくつづいていて、一段、一段がひくくおおきいせいかよけいになく感じた。ゆるやかな階段を永遠ともおもえるほどくだっていくとさらに扉があった。扉はこれまでのものとちがい光沢のある鉄の扉だ。案内役の女は扉からでているちいさなわくに指紋をおさえつける。扉からピピッと音がなると指をはなした。扉が自動ドアのようにひらいていく。

アルは拳銃を女につきつけたまま、感覚だけでどのへんにいるのかをイメージする。ゆっくりと下降しながら二キロはすすんだのかもしれない。しかし、まだ扉があり。そのおくにはうえへとつづく階段があった。一五センチから二〇センチぐらいの段がかさなっている。アルはなにもいわず女をうながした。女はさらにすすんでいく。

「ここが最後です」

のぼりきつた最後の扉のまえでいった。最後の扉は指紋と声がかぎになっていて女の声と指紋を認証すると扉はひらいた。

「ここが最後だな」

アルは女に確認すると女はうなずく。それをみてアルは女の後頭に拳銃のグリップをたたきつけた。気絶した女を扉のむこうがわにのこして四人は研究所に侵入した。

「子供たちがいる場所はわからない。まず、メインコンピューターに侵入しよう」

各自の腕についた三センチ×四センチのディスプレイにこの研究所の地図が表示される。そこには自分たちの位置も点でしるされていた。それぞれ点の色がちがう。

「サラ、メインコンピュータールームまでの道を表示してくれ」

アルは腕にとりつけられている装置にむかっていた。すると四人の耳にあるイヤホンからサラの声がきこえた。

『OK、すこしまっていて』

サラが自分のノート型パソコンからハッキングした研究上の情報

と地図をてらしあわせてもつとも効率のよい道筋をだしていく。そして、それぞれの装置に転送した。

『どう？表示されたかしら』

サラの問いかけに四人はそれぞれ自分の腕をみる。そこには赤い線と矢印で道順がしるされていた。さらに、サラは四人に指示をだす。

『研究データーが保管されている場所をアルとレセのほうにおくっておくわ。朔夜とリヨクは』

サラの言葉をさえぎってレセがいった。

「大丈夫。うちあわせどおりにうごくさ」

サラはその言葉に『そうね』とつぶやくとさらに言葉をつぐむ。

四人の成功を願うような声で。

『幸運を祈っているわ』

その言葉をさかいに四人は打ち合わせどおり二手にわかれる。アルとレセは研究データーを盗みに、そして、朔夜とリヨクは子供たちを救いにいったのだ。

リヨクと朔夜はまず、メインコンピュータをめざした。とちゅう何人が遭遇したがリヨクにとって、障害になることはない。それぞれの腕の装置にはサラのコンピュータから妨害電波が送られて発信している。廊下に等間隔で設置されたカメラはいま映像をうつしたまま停止している。つまり、カメラの映像は朔夜たちがおるまえのものがおくられているのだ。

「朔夜、これでとおれます」

メインコンピュータのセキュリティーは厳しく五つの箇所それぞれ複雑なカギがついているようなかんじだ。そして、すこしでも異変を感じると緊急システムが作動してプログラム自体がかわってしまう。

それぞれのプログラムをサラの指示のもとリヨクが解除していった。朔夜にはプログラムを解除するほどの技術はない。自分にでき

ることは羽衣をあやつり、敵をなぎたおしていくことだけ。それも、ほとんど経験をつんでいなんぶんあやしいものだった。

「いこう」

朔夜はそういうとメインコンピュータールームにむかう。リヨクはなにもいわずに朔夜のあとをついていく。朔夜はメインコンピュータールームのまえにきた。ここにくるまでに朔夜とリヨクの体のすべてのデータがメインコンピューターへとつうじるカギとなるように登録を変更してきたのだ。五つのコンピューターには複雑な登録システムと難解な防御システムがあった。それらをクリアしていまここにたっている。

そんなにはおおきくないその扉は蝶つがいやドアノブがついているわけではなく、どちらかというと鏡の板がそこに一枚たっているような感じだった。朔夜はそのまえにたつ。するとドアがうえからしたへと赤い光線をはしらせる。赤い光線は頭からつま先まで朔夜の体を調べる。指紋、脳のしわ、心臓の形に肺胞の数や形、全身の毛細血管、体を構成する臓器の形や血管の数やめぐりかたすべてが扉のカギとなる。

『認証データ一致。どうぞなかへ』

扉は透明になり部屋のなかが見えてみえた。朔夜はそこのかん心臓が口からでそうなほど緊張した。これで失敗すれば子供たちをたすけるどころか防御システムがさどうしてここからでられなくなってしまう。朔夜はほっとして扉をくぐる。扉はまたもとのものにかわってしまった。リヨクも朔夜とおなじようにしてそこをとる。

その部屋にはだれひとりもいなかった。部屋の中央に筒状の装置がメインコンピューターなのだろう。朔夜の予想にはんしてそこにはそれしかなかった。リヨクはディスプレイのひとつにちかづくと画面を操作しはじめる。画面にはいくつかのカメラ画像と朔夜にはよくわからない文字の羅列がながれている。

「朔夜いきましよう。場所をそちらに転送しましたから」

リヨクは朔夜にむかっていう。するとイヤホンからサラの声がかき

こえてきた。それは朔夜の耳にもきこえてきているものできつと四人にきこえているのだろう。

『リヨク、まって。そこからアルたちの部屋をあけてあげてほしいの。どうやらメインコンピューターからじゃないとあかないようになっているみたいなの』

「わかりました」

リヨクはこたえるとふたたびコンピューターにむきなおる。リヨクはふたたび朔夜にはよくわからない作業をしている。すると左のディスプレイの映像がかわってそこにはレセとアルの姿がうつしだされた。アルはうしろ姿だがレセはカメラにむかってピースしている。そして、数分もしないうちにアルたちの扉はあいて部屋のなかへときえていった。

「おわりました。いそぎましょう」

そういつてリヨクは朔夜のまえをよこぎった。なにもいわず表情すらない顔だった。朔夜自身もリヨクと顔をあわせようとはしなかった。リヨクの背中をおうように朔夜ははしる。腕の装置にはどこにむかへばいいのか標されている。ふたつの角をまがり三つの扉をくぐるとそこにはほかとはちがう空間がひろがっていた。絵画の背景のような部屋だった。

そして、たくさんの女の人がいた。年齢はバラバラだが朔夜とそんなにかわらない子からうんと幼い子までいる。彼女たちはギリシヤの女神たちのような服をきている。もしくはインドの女神象のようなそんな布をまいただけの服を身にまとっていた。

彼女たちはこちらをみるだけで騒ごうともしない。朔夜は瞬時に羽衣をだしてかまえた。その姿をみて彼女たちはいろめきだった。その反応はとても友好的なもので朔夜はうるたえる。

「朔夜お姉さまですの？ 私たちお姉さまに会ってみたかったです」
そういつてひとりの女がちかづいてくる。彼女はながく伸びたまっすぐな黒い茶色い髪をしていて、とてもやさしそうな印象をうけた。リヨクは朔夜のまえにたちはだかり女と朔夜をへだてた。する

と女はリヨクをまじまじとみつめてから感激したようにいった。

「あなたがお姉さまの子供たちの父親ですね。赤ちゃんにどこことなく似ていますもの」

朔夜は女の言葉に反応する。

「子供・・・？子供たちはどこにいるのっ」

「案内してさしあげますわ。こちらです」

朔夜の言葉に女はにこやかにこたえる。女が歩くと道がわれていく。朔夜たちはそのあとにつづいた。あちらこちらで黄色い声があがったり尊敬のまなざしをむけられている。朔夜にはそれがどうしてなのかわからない。朔夜たちがまねかれたその部屋にはちいさなベッドだけがおかれていてあとはただひろいだけの部屋だった。

朔夜がちいさなベッドにかけようとしたらとつぜん声がした。その声には聞きおぼえがあった。覚えがあるなんてものじゃない、どこか懐かしささえある。そう、ながい間、無条件で信頼していた人の声。

「朔夜、ずっとあいたかったよ」

声とともにあらわれたのはお父さんの兄、明人だった。

「おじさん・・・」

朔夜は手にもった剣の形状をかえて、ただの布にかえてしまう。リヨクはそんな朔夜のようにすに警戒を強める。覚悟していたのにいざ会うとどうしていいのか困惑すらした。

「朔夜、やっとなににめざめたんだね。うれしいよ。ずっとまっていたんだ」

なにもしらずに育てられていたときとかわらないやさしい表情。

朔夜は頭でわかっていても心がついていかない。覚悟していたはずなのに、なんだったんだろうか。

「朔夜、きみの子だとおもうとほんとうにかわいい。こんな愛おしい子たちがうまれてくるとはおもいもしなかったよ」

明人はそういうとベッドのなかの子供たちをのぞいた。その行動に朔夜はわれをとりもどすと瞬時に羽衣をもとの武器の状態にもど

す。

「彼らには人間の遺伝子がこれっぽっちも検出されなかった」

その言葉に朔夜はカッとなる。子供たちになにをしたのかと。

「子供になにをしたのッ」

「なにもしてないさ。害がおよぶようなことをするはずないだろう。でも、まあ血液検査はしたがね」

朔夜のあらつばい言葉とちがい明人の言葉はおちついている。覚悟していたはずなのにわかっていていたはずなのにいま朔夜は戸惑いや困惑をかくせない。この場の空気とはことなるほど赤ん坊はすすうとおだやかな寝息をたてている。

「朔夜、きみが私たちのもとへかえってくるというなら子供たちの未来は保障するよ」

明人は優しくいった。朔夜には「未来を保障する」といった明人の言葉の意味がわからなかった。そして、混乱と戸惑いを抱えたままきく。

「どういうこと？」

明人は優しい態度をくずさず朔夜にかたりかける。朔夜が幼い子供のときのような、なにひとつかわらない優しい声と顔。でも、それと背反するような現実。

「朔夜が体に異常をきたしたように子供たちにもなにもおきないとはかぎらない。もちろん、朔夜の主治医が優秀なことはじゅうぶん承知している。だが、彼らにはきみたちの正確な情報がない。K01、いやいまはリヨクというのかな。彼の情報ですらたしかなものはないだろう？ げんにきみたちはなぜ子供がうまれるまでに三年もかかったのかわかっていないだろう」

子供がいるとわかってからまだ一年半しかたっていないはずだ。子供がかなり成長していたからサラは妊娠して五ヶ月だろうと思っていた。それをあわせても二年もたっていない。

「三年？」

朔夜のつぶやきに明人は子供にいきかすような声をだす。

「そうだ。二年ぐらいだとおもっていたらう。三年前のきみの誕生日にこの子たちを朔夜にやどした。まさか一度目でここまで成功するとはおもわなかったがね」

朔夜はおどきリヨクはただその事実を悲しくきいていた。朔夜は子供の身になにかおきたとき自分たちではどうすることもできないかもしれない、という不安がわきおこる。そして同時に、ここであらう、というおもいも。

「きみの血液もそうだが、調べたところによるとこの子たちの血液も普通の人間のものでは適応しない。いくら傷のなおりがはいとはいっても大量の血液を失えばきみたちでも死にいたる。知っていたかな」

明人はここで言葉をとめると寝ている赤ん坊のひとりの顔をのぞきこんでから、朔夜の顔をみつめた。朔夜の顔は不安で顔の色がきえている。

「しかし、ここにはきみたちとおなじ血液をもった子たちがいる。ここではないかなる場合によっても対応できる。そうおもうだろう？」

朔夜は言葉がでない。ここにいれば子供たちにもしものことがあったとしても対処できる確率が高い。実際にサラたちも朔夜たちのことをしろうと定期的な検診や検査をおこなっているがわかつていることはあまりにも少ない。

「あなたのもとへいたとしても私たちに未来はありません」

なにもこたえられずにただかたまっている朔夜にかわってリヨクがいう。その言葉はおもっていたよりも強い意志を秘めていた。そして、リヨクは返事をきくまえに明人にむかってふみこんでいった。化け物のように変化した右手の爪をふりおとしたが明人にとどくとはなかった。なにかに阻まれたリヨクははじきかえされると身をひるがえして着地した。

「きみたちのことはなんでもしっている。私たちがつくり育てたのだ。こういう行動にでるか予見することはたやすいことだろう？」

明人はそういうと指をならした。するとどこからか赤ん坊たちを

さらったやつらがあらわれた。そして、不敵な笑みを浮かべるといったのだ。それは彼らへの攻撃命令でもあった。

「あまり手荒なことはしたくはないが、しかたない」

リヨクはむかいくる敵にふみだす。朔夜を守るために両腕の形状がかわる。彼らの刃はけっしてリヨクの腕を傷つけることはない。腕に彼らの刃があたるときに火花がとびちる。朔夜は刃をむけるべきなのかためらっていた。そんな朔夜をみてリヨクがさけぶ。

「朔夜、迷わないでッ」

リヨクの言葉に朔夜ははっとする。子供たちになにかあった場合ここでなら対応できるかもしれない。でも、おきるかおきないかの出来事におびえて子供たちの未来に自由を奪うことはできない。子供に自由な未来をそんなおもいで出産を覚悟したのだ。リヨクだって自由に憧れてあの場所からでてきたのだろう。朔夜はそう信じている。それに、朔夜でなければ守れないものがあるはずだ。リヨクのように悲しむものをまもってあげたいしもうそんな存在を誕生させたくはなかった。迷えば傷つけてしまう。

朔夜はおそいかかってきた敵に刃をふりかざした。ひとりでおそいかかってきた敵はたおれる。血がふるなか朔夜は刃をかまえない。両手でしっかりともった刃を明人にむけた。

そのころ、アルたちは研究データーを収集していた。朔夜たちがメインコンピュータールームでこの部屋のカギを解除してくれたおかげでもったよりもスムーズに作業がはかどっていた。データーは大量にありどのデーターが必要なのかサラの指示をききながらあつめていく。

『レセ、瑠希と紗枝の出産にかかわるデーターはない？子供たちのデーターがほしいわ』

サラの言葉に「へい、へい」とできとくに返事をかえすと大量のデーターのなかからさがしはじめる。なにがうっとおしいかというとCDディスクにかかれているのはアルファベッドと数字のみの記

号であとはまったくおなじようにみえる。それらの記号の意味をしないレセたちはひとつひとつ確認していかなければならない。朔夜たちに扉をあけてもらうときにこの扉のアルとレセ以外の登録はすべてけしてもらった。だから、じゅうぶんに時間がある。それにここからでは外の気配は感じられない。しかし、なにも音がしないだけで扉のむこうではここをあけようと躍起になっているかもしれない。時間があるのかないのか微妙だ。

ディスクの中身を見るための機械音がところどころでなっている。ここにあるコンピューターは五台。それらすべてにアルファベットのことなるCDディスクをいれていく。『K G 3 5 6 1』とかかれたCDディスクをみる。するとそこには胎児の写真とその母体のデータが画面にあらわれた。

「サラ、朔夜たちじゃないが子供のデータがでてきた。母体と胎児のデータがそれぞれのついでで……ちよつとまってくれ……成長にともなる子供の遺伝子の変化ものつてるぜ。どうする？」

サラはレセの報告をきいてなんのためらいもなく『K G 3』のデータをすべてもちかえるように指示をする。CDディスクは五枚もありそれらをすべてせおってきたリユックにいれる。

「サラ、きになるものをみつけた？」

アルは画面をにらみながらいった。サラはアルの言葉に冷静に『なに？』とかえした。

「人間を女神にかえる実験データだ。みるかぎりはじまったところのようでデータ自体はすくないがもってかえったがいいとおもっただが」

『OK。もってかえってきて。人間をかえるっていうところ、気味かわるいけど』

「わかった」

サラの指示をうけてアルは一枚のCDディスクをもちだした。『G H K F 0 0 0』とかかれたそのディスクはほかにはない。その

とき、サラは朔夜とリヨクの異常にきづいた。あわてて映像をつないでふたりのようすをみる。そこには朔夜とリヨクはもちろん高瀬明人もうつっていた。そして、彼の合図で例の兵士たちが朔夜たちをおそいはじめる。

『たいへんよ！朔夜たちのところへはやくいつてあげて』

サラの声に状況を把握したアルとレセはあわてて回収したデータをしまいこむと部屋の扉へむかう。そのとき扉がかってにひらいた。しかし、アルたちはあわてない。予想内のことだが一刻を争ういまはうつとうしいだけだ。

扉が破壊されてそれとほぼ同時にとびこんでくる銃弾をよける。銃弾をおうように敵がなだれこんできた。レセは敵がリヨクとおなじK 01のタイプかどうかをみきわめてほつとする。すくなくともこの部屋にはいつてきた三人はふつうの人間だ。アルとレセはたがいに目で合図をすると拳銃をなん発か発砲する。それにあわせて三人の敵も銃を発砲した。

朔夜は一心に刀をふるっていた。よいけいなことはなにもかんがえず戦うことだけをかんがえる。吹き散る血をあびながら必死に自分を殺した。ここで刀をとめるわけにはいかなかった。朔夜は一心不乱に刀をふりあげては敵をかたづけていく。腕をおとされたもの、腹をきられたもの、それはさまざまで、すべての兵士を戦闘不能にしていた。リヨクもまったくおなじだ。

明人は自分たちが劣勢だと判断すると子供たちを抱きかかえ逃げようとした。しかし、乱暴に抱かれたためか子供たちが目をさます。そして、その瞳はみるみる涙をためてぬれていく。

「まてッ」

子供の泣き声に朔夜は反射的にさけぶと刃をなげる。その刃は確実に明人のところへとんでいったが明人をとらえることはなかった。例のよくわからない壁が邪魔をしたのだ。

「朔夜こんかいはこれで失礼するよ」

ひやりとした乾いた笑いをこぼすと明人はいった。文字どおり鬼神のような朔夜にきおとされて明人は一瞬でもこの壁の存在をわすれたのだ。

子供を抱いて逃げようとする姿に朔夜の冷たい闘志は燃えあがった。鬼神などではあらわせないほどの殺気をひめたつめたい顔だ。刃よりも鋭くひかるまなざしで一直線に子供たちのもとへとむかう。刃をひろい、その壁に刃をふりおとした。

朔夜はさけびながら腕に力をこめる。けっしておしかえしてくる力に負けないようにその力をやぶるように腕に力をいれた。そんな母親の声に反応するように子供たちの泣き声は烈火のごとく勢いを付けていく。そして、次の瞬間、明人の両腕をなにかがきりさいた。そして、明人はその衝撃に子供たちから手をはなした。

「リヨクっ」

朔夜のさけびにリヨクは敵をたおし背をむける。朔夜にとびこむようにはねると防御することなく壁へとつつこむ。リヨクが壁にぶつかる瞬間、朔夜はその壁をはねとばした。リヨクはそのまま子供たちにつつこんでいくと床にすべりこんだ。リヨクは明人を数メートルはねとばした。

「リヨクッ！」

朔夜はリヨクへとかけよる。リヨクの両腕で子供たちが無邪気にほほ笑んでいた。そして、朔夜に手をのばしている。朔夜はその顔にほっとして胸をなでおろす。鬼神とまで感じた朔夜の表情があつとゆうまに母のものへとかわる。

「はやくいきましよう」

リヨクはそういうと子供をだいたまま出口へとかけていく。朔夜はふりかえった。はげしくふきとばされた明人はうずくまっとうめいている。立つことはできないのだらう。朔夜の胸にあつたのは肉親の情なのか、命あるものをモノのようにしかあつかえないものたちへの哀れみだらうか。

「朔夜、はやく」

リヨクにうながされて朔夜はふりきるようにはしりだした。女神と称される彼女たちが悲鳴をあげている。朔夜は彼女たちの攻撃にそなえて神経をとがらせるが彼女たちはなにもしてはこなかった。部屋をでると悩みもせずによい一つの出口へとむかった。たかぶつたいまの体には拳弾すらおそく感じる。

「おい、朔夜！」

とちゅうでアルたちと合流する。アルとレセは出口まできて愕然とした。出口はふさがっていたのだ。しかも、うしろは敵にかためられてひきかえすことは困難だ。

「おねがいします」

リヨクはそう言う子供をそれぞれアルとレセにわたした。アルとレセはなにをするのかわからず不安な目でふたりをみる。

「朔夜、ここから地上までは約一キロです。できますか？」

朔夜はうなづくと神経を集中させる。敵のおつてをふりきるにはこれがいちばんができるだろうか。そんな朔夜をみてリヨクはまえにたつ。朔夜はもちろんアルやレセをも背中にかばうようにしてたつとリヨクは姿をかえた。漆黒の羽根、さけた口とんがった耳、爬虫類の肌に獣の足はまさに異形のものの証。かこんでいた敵はリヨクの姿にあとずさる。化け物を見るようないやな目をしている。

「や、やれっ！」

それでも敵のひとりとは攻撃をうながした。無数の銃弾はけっしてリヨクの体をつらぬくことはできない。リヨクは応戦することはなくただ、朔夜たちを守るように攻撃をすべて防いだ。

朔夜はあせっていた。ここでつかまればアルたちの命はなくなってしまうだろう。人の命がかかっていることのプレッシャーからおもうようにことがすすまない。神経をたかぶらせて自分のうちなる力を開放させる。言葉では簡単なことなのに実際はうまくいかない。一キロさきのはるか地上まで穴をあける。そのためにはいまつかえる朔夜の力のすべてがいる。あせりやプレッシャーのせいかうまく集中できない。ジレンマだけが朔夜を支配する。そんな朔夜に

リヨクが声をかけた。

「大丈夫です。心を鎮めて、なにかんがえないで……。そう、あなただけを感じて」

朔夜はリヨクの声に誘導されるようにすうと自分のなかへとおちてゆく。さつきまでのざわつきが嘘のようにピタっとおさまる。なにかんがえず自分の力を感じてそれを体にためていく。

「朔夜、いまです！」

リヨクの声にみちびかれ朔夜は両手を天にかかげる。手のひらに自分の力を凝縮しはなった。はなたれた力はなにものにも負けることはなく地を天をつらぬいた。朔夜はその場でたおれこむ。リヨクは悲鳴のような叫び声をあげるとまわりのもの鼓膜をやぶく。耳をおさえたおれこんだすきに朔夜たちをかかえて空へとまいあがった。朔夜のおこした風に身をまかせて地上へとまいあがる。翼をひろげて空たかく、おいかけることは不可能なところへとにげていく。そんなリヨクたちの姿をみていた妖しい陰は姿をけした。

第3話

円柱の水槽のなか、ユラユラとながい髪がゆらめいている。ふくよかな女性の体をちたものはその身になにもまとうていない。そんな円柱の水槽の水がぬかれていく。そのなかでひとりの目をさます。うまれてからずっと彼女にとって世界はこの水槽のなかだけであった。水槽の水が完全にぬかれるとガラスがとりはずされる。彼女はじめて外の世界へとでていくのだ。歩行という行動自体はじめてなのだ。彼女はすぐにたおれてしまう。

そんな彼女にひとりの研究員がちかよってきた。ちかづいてきた研究員は年齢三〇代前半の男性でなんの警戒もしていない。彼女は顔をあげて研究員をみつめる。そして、にやりと笑うとちかづいてきた男の腕をとる。そして、そのままちあがった。男はとうぜんのようにその頼りない体をささえる。赤みをおびた茶色い髪がふわふわと散らばる。

「・・・」

彼女は男の耳元でなにかつぶやく。男はその言葉らしき音に疑問をもつと同時に耳たぶをかじりとられてしまった。男は悲鳴をあげてはなれようと暴れるが彼女はしがみつき、ダークブラウンの瞳をほそめてそのまま首にかみついた。まわりの研究員はわが身かわいさに男をそのままにして彼女を隔離するため壁をおろしていく。そんな光景を見物していたのは銀の髪の青年。

「理性がないのか・・・」

そして、青年は彼女を隔離した部屋に行く。おいしそうに男を食している彼女へとむかった。彼女をなんなく捕らえると、その両腕をしめあげる。彼女の腕はキシキシとしなる音をたてる。彼女はその痛みに悲鳴をあげた。

「檻のなかで子だけうませてやる」

彼女の耳につぶやくと腹部をおもいつきりなぐりつけて気絶させ

た。おとなしくなった彼女を研究員にわたすとスタスタとあるいていく。彼女は遺伝的には完璧であるにもかかわらず理性という宝をもっていない。つまり失敗作だ。やはり唯一の成功品は彼女でしかない。

朔夜はベッドのうえで目をさました。無事だったのか、そうじゃなかったのかまだ冷静に判断はできない。返り血をあびた体はきれいになっていてパフスリーブ型のワンピースをきていた。ここはどこなのだろう？と部屋をみていたときだった。コンコンとノック音がきこえた。朔夜はが返事をするまえに訪問者は返事をまたずしてドアをあけてしまう。ドアを開ける乾いた音がひびく。

「目ざめましたか？」

やさしい声の主はリヨクでその姿と声にほっとしている自分にきづく。どうしても、リヨクの姿をみると無条件にほっとしてしまう。朔夜はあわてて布団を頭からかぶった。リヨクは朔夜の寝ているベッドにこしかけると布団のうえから朔夜の頭をなでた。ただなにもいわずになでているリヨクに観念して朔夜は布団からおずおずときまずそうに顔をだす。

「子供たちは？」

朔夜はといかけた。リヨクは朔夜から目をそらす。

「大丈夫です。アルとレセは鼓膜がやぶれて音がきこえないと文句をいっていますが」

朔夜はリヨクの言葉に無事にかえってきたことを確信する。そして、同時にリヨクの横顔からのぞく悲しげな瞳にきづいた。朔夜がリヨクの変化した姿をはじめてみたときのあの瞳とおなじ悲しさだった。朔夜はおもわず手をのばす。

「朔夜？」

リヨクは意図がわからず不思議そうな声をだした。どうしてだろう、リヨクのあの悲しそうな目をみるとなにかしてあげたくなる。今回のことで自分がなんの役にもたたないことがよくわかった。そ

れなのになにかしてあげたいなんておこがましいけど。

「朔夜……」

リヨクがふたたび名前をよんだが朔夜は返事はせずそのままリヨクの腕にしがみついていた。リヨクはそんな朔夜に手をのばそうとしたとき、急になんの合図もなしにドアがひらいた。あわてて朔夜がはなれる。

「ようすはどうだ？……」

そういつてはいつてきたレセはふたりのようすをみて、みるみるとひやかすような顔へとかわっていく。朔夜はそんなレセになにかいわれまいとさきに声をだした。

「大丈夫。もうおきれるから」

そういつてベッドからでていこうとする朔夜にレセはアレンからの伝言をつたえた。

「アレンが大丈夫そうなら部屋にきてくれたってさ」

レセのその言葉で朔夜は自分がいま海のうえにいることをしる。

ここはフェインの本部、豪華客船のうえなのだ。

「わかった。着がえるからまって」

朔夜の言葉にレセはひやかすようにリヨクと朔夜にいう。リヨクはでていこうとベッドからたちあがったところだった。

「リヨク、手伝わなくていいのか？」

その言葉に朔夜は顔をまっかにすると怒鳴るようにふたりにいった。普段でも一人で着がえているのに。

「はやくでてって！」

その勢いにおされながらもレセはたのしそうに部屋からでていく。リヨクもおいだされてふたりで朔夜のきがえをまった。そんなリヨクにレセはいった。

「お姫様とはなかなかおりできてないのか？」

「いつも着替えは一人ですますよ。朔夜は」

リヨクはさえない顔でこたえる。レセはそんなリヨクの態度に溜め息をつく。「はいほうがいいぞ」とひとことだけのこしてその

場をさつていった。リヨクはなにもいわずその場にたちつくしたままだった。人ときあうことをしなかった自分がどうすれば“かなおり”できるのだろうか。まったくどうすればいいのかわからなかった。

おおきな空の絵をはめこんだような窓ガラスのある部屋にはまったくおなじ顔の男がふたり。顔も背格好もなにもかもおなじ二人は色がちがうだけとゆう感じた。アレンはいつもどおりの上品なスーツをきているが、もうひとりはいくつは黒いカッターシャツに黒いズボン。シャツのまえはゆったりとあけられていてアレンがしているネクタイのチューリップのモチーフにかこまれた青い石のネックレスがひかっている。二人は髪の色と瞳の色もちがっている。アレンの馴染み深い黒い髪とはちがうせいか違和感を覚える。その男は白銀の髪をしている。

ふたりはむかいあつて座っている。白銀の髪をした彼は朔夜をみてどこかなつかしそうに微笑んだ。でもアレンは表情ひとつかえようとはしない。朔夜はどうすればいいのかすこしまったがリヨクがアレンのとなりにならざるやうにながす。

「朔夜、彼はルフナ・ラエリア。私の兄だ」

朔夜がソファにすわったと同時にアレンは自分のコピーのような男を紹介した。

「え？」

朔夜の声を見殺して、アレンははなしをすすめていく。アレンに兄弟がいたことなどしなかったしルフナは敵の名前ではないのだろうか。自分たちはルフナをとめるために活動してきたはずだ。

「大切なことはなさなくてはならない。それは私とここにいらっしゃる兄さんがみてきたことだ」

朔夜がどういふことかわからずとまどっているとルフナが朔夜にほほ笑みかけていった。

「朔夜、僕達はいくつにみえる？」

朔夜はアレンとルフナの顔を交互にみる。ふたりの顔はともきれいにととのつていて実際よりは若くみえるのかもしれない。でも、ふたりは青年とよばれるような年齢だろう。

「・・・25歳前後ですか」

朔夜のこたえに満足そうにちいさく笑うとルフナはいう。

「そんなに若くみえる？僕たちの年齢は正確にはわからないが1000と数1000というところかな」

朔夜はおどろいた。そして、ふたりの顔をふたたびみつめたが、どうみても20代中盤という感じだ。だいいち人間ならならもうとつくに死んでいる。でも、アレンは人間とはちがうからこういうことがおきているのかな。それじゃ、朔夜も歳をとらなくなるのだろうか。

「不思議そうな顔をしているね。僕たちはね、ある程度の成長をとげると容姿の変化はなくなるんだ。つまり、ベストな状態までくると老いることがないんだ」

アレンは朔夜のほうに体のむきをかえると朔夜に説明をはじめた。「天女や女神がほんとうに天からまいおりたものだとおもうかい？じつは私たちはこの地球上に存在するれっきとした生命体なんだ。そのものたちの末裔が私たちとその遺伝子でつくられた朔夜、きみだ」

とつぜんのはなしに頭がついていかなくて朔夜はよけいに困惑の色を深めた。しかし、アレンはきにすることなくはなしをすすめてしまう。まるで理解を求めてはいないともいうように。

「私たちの種族は進化の頂点をきわめた。高い知能、おもいのままにかえることのできる姿、そして、なにより人が進化のなかですてていった脳の機能の70パーセントをも自由にあつかうことができた。しかし、どの種族もおなじように進化のなかでなんらかの犠牲をはらいながら進化していく。たとえば渡り鳥が長時間とんでいるために肺の構造を複雑にしたために肺病を発生しやすくなったように、私たちの種族もその犠牲をはらうことになった・・・」

アレンはそこで言葉をきった。朔夜はつづきをうながすようにアレンの言葉をくりかえす。なにがしたいのかよくわからない。ここまでのはなしを聞くとなにも犠牲とよべるようなものをはらってきたようにはおもえなかった。

「犠牲？」

アレンはそれでもそのつづきをいおうとはしなかった。それを見かねてルフナがはなしはじめる。

「僕たちがはらった犠牲。それは生まれてくる子たちが全部メスだけだということだ。生命にとってはいちばん深刻なことだ。種をつなぐことができなくなるからね。そして、僕たち以降まったくオスがうまれなくなった。つまり、どこかでオスを調達しなければいけなくなつた。そして、異種族同士で子をつくることを可能にするために誕生したのが羽衣だ。人に羽衣をわたすことによって子供をうむことができるようになった。しかし、それだけではおわらなかつた。きみもよくわかつているだろう？」

ルフナはそういうと朔夜の目をまっすぐにみつめる。そして、朔夜はアレンとのもうひとつのちがいをみつけた。ルフナの瞳の色は黒い色をしている。しかも、アレンの親しみやすい眼差しとはちがい、ルフナの黒い瞳には他をよせつけないような感じがあつた。

「羽衣をてばなしてしまえば彼女たちは数年もしないうちに死んでしまう。しかも、そうしてうまれてきた子供たちは純血ではなく人との混血で力をうしなっているものたちがおおかつた。もし、もっていたとしてもお粗末なものだ。僕たちの足もとにもおよばない」

「でも、瑠希は男の子なのに」

朔夜の言葉にルフナは恍惚とした表情でこたえる。それはまるで国を救った英雄をたたえるようなはなしかただった。

「きみのオリジナルはゆいいつオスもうめるメスだった。彼女はオスもメスも両方わけへだてなくうんだ。僕たちの妻である彼女はたくさんの子を産んでいった。彼女によって滅びへの速度はおちたかのようにおもわれた……。しかし、彼女は人間のオスに恋をして

しまった」

朔夜はルフナの口調がすこしかわったようなきがした。その変化はごくごく微妙なもので確信はないけれど。アレンはルフナの言葉に説明をたしていくようにはなしはじめる。

「彼女はその男に一枚の羽衣をあたえた。通常、一枚しか誕生させることのできない羽衣を彼女は二枚も誕生させていたから、私たちは彼女をとがめはしなかった。だいたい私たちと人間ではあまりにも寿命がちがうから一時のことだとあまくみていたんだ」

アレンはそこでいったん言葉をきると悲しいことをおもいだしながら言葉をつなぐ。

「男の村のちかくで争いがうまれた。男はその争いにまきこまれて瀕死の怪我をおった。彼女は迷うことなくのこりの羽衣で男をたすけた。私たちがそのことをしったときにはもうておくれだった。彼女はその男の数十年の寿命のために自分の命をささげたんだ」

冷静をとりもだしたルフナはここからが本題だともいうような顔で朔夜にはなしはじめた。

「きみは彼女のすべてをうけついでいる。そのことはこんかいの出産で男女が平等にうまれたことではつきりとしている。僕の願いは滅んでしまった種族を復活させることだ。そのためにきみには僕の花嫁になってほしい。純血である僕と君が子をふやせば種族はふたたび栄え、栄光のときはかえってくる、そうおもわないかい？」

ルフナは朔夜に自分のもとへくるように誘っていた。ルフナはそういうとたちあがり、おおきな空へとあるいていく。朔夜たちはたちあがることなくルフナをみている。ルフナは窓に背をむけると朔夜にほほ笑みかける。

「きみのナイトはかなり優秀だね。さつきから私にたいする警戒をゆるめようとはしない」

ルフナはリヨクをみていった。朔夜はリヨクをみる。いつもかわりないようなきもするけどそういわれればリヨクの気配がごとくなくとぎすまされた感じた。そのときだ、とつぜん空をとらえてい

たおおきなガラスが割れたのは。ガラスは内側にはじけとぶことはなく、そうまるで自分からかってに割れたようにすらみえる。

「朔夜いい返事をまってるよ」

そういうとルフナは窓のしたにとびおりる。ルフナの体が落下して一瞬きえる。朔夜はあわててたちあがると姿をたしかめに窓のほうへとむかった。そして、したを確認しようとしたとき、白い羽根のはえたルフナが羽ばたいた。そして、そのまま羽ばたきながら姿をけた。“愛おしい”という言葉がいちばんあうだろうあの瞳はなぜ自分にむけられたのか。朔夜はそんなことをかんがえながらきえてしまった彼のうしろ姿をみていた。ひろがっているのは海とだけこむような青い空。

ルフナがあらわれてから二週間がたっていた。朔夜たちは本部である豪華客船のうえで生活している。いろいろと情報はいってきているようだがもうひとつ裏がとれていなかった。でも、そのなかでひととき気になる情報があった。それは韓国で人間をG 06にかえる大規模な実験がおこなわれていることだ。これは確かならいたいへんなことになる。ルフナのいつていたことはもうひとつ現実みがなかったが、これが可能であれば現実みがますことになる。

朔夜は子供たちといっしょにお昼寝中だ。そのよこでリヨクは読書をしていた。ながれるクラシックの音楽が午後のおだやかさを物語っている。今日のぶんのトレーニングをおえた朔夜はほんとうに幸せそうにねむっている。

瑠希が目をさました。きれいな紫の瞳をねむたそうにあけている。リヨクは本をベッドサイドにおくと瑠希をだきあげる。まだ、おきるにははやい時間だ。やさしく寝かしつける。寝たりないのだろう瑠希はすぐにまた眠りはじめた。

朔夜のよこに瑠希を寝かせると子供にかこまれて寝ている朔夜の前髪をそっとかきあげる。幸せだと感じる瞬間だった。そのとき、ノックの音がした。リヨクはおこさぬようそっとドアへむかう。そ

こにいたのはレセでレセは外にできるように親指でしめした。彼もいまお昼ねの時間帯だとよくしっている。

部屋からだとアルとサラがいた。ふたりはむずかしい顔をしている。こういう顔をしているときに仕事のはなしでいいはなしだったことはない。リヨクをみるなりサラがノート型パソコンの画面をみるようにリヨクのほうにむけた。その映像には複数の人間が点滴でつながれていた。点滴の袋にはもう薬品はいっていなかった。そして、次の瞬間、点滴につながれた人間が異形の姿へと変化したのだ。それは、この世の生き物とはおもえないもので形はちがうけれどリヨクとおなじようにみえた。

「これは・・・」

リヨクのつぶやきにサラはこたえる。映像のなかの異形の化け物は無機質な白い部屋のなかであばれている。分別がつかないのだろう。

「人間を強制的にK - 01と結合させたのよ。ただ、どうしてこんな姿になるのかはわからないわ」

「G 06との結合は無理でもK 01つまり羽衣との結合は可能ということだ。そして、この映像もみてくれ」

アルがそういうとサラが映像をきりかえる。全身を黒で武装したあの兵士がひとりその部屋にはいつてくる。しかし化け物は襲おうとはしない。それどころか甘えるようになしぐさでちかよってくる。さらにちがう映像ではなんと拳銃の弾が頭にあたり死んでいたのだ。リヨクの体は鋼よりもかたく銃弾くらいはなんともない。

「これでわかるように、強度はまったく人間とかわらない。しいていえば頭を打ち抜くかまつぶたつにするしか死なないようだが」

レセがいった。これは失敗なのだろうか？リヨクはかんがえる。ルフナは完全な種の復活をねがっていた。そうかんがえるとこれは失敗作なのだが。

「問題なのは三日後にこの薬品が韓国にばらまかれることよ。韓国の人口が約4万人、なんパーセントの確率で発症するのかわから

ないけど半分でも2万人の人が異形化するわ。しかも、これを治療する手だてはない。もちかえってきた資料にもあったけど、K 01は他の生物の細胞と結合すると結合された生物はそれをのぞかれた状態で生きることが不可能。つまり結合したが最後、もともどることは100パーセント不可能ということね。しかも、すこし操作して人間の遺伝子にしか結合しないようにしてあるわ」

「そうになると、人間はやつらを始末するってわけだ」

レセがいった。なるほどはなしがみえてきた。ルフナの狙いがわかったのだ。純血が朔夜、子供たちそしてアレンとルフナの5人しかいない。たとえ朔夜がどんなに純血の子供を男女へだたりなくうめたとしてもそれはほんの少数でしかない。そのまま、ねずみこうで増えたとしても人間が頂点をきわめている状態では繁栄はむずかしい。つまり単純に人間は邪魔なのだ。約60億の人間を始末しなければならぬ。

「この映像でもわかるようにおなじ遺伝をもつものを仲間としてかれらは決して攻撃しないわ。たぶん、朔夜やリョクに襲いかかってくることはない。でも、みてわかるように人間は襲うの。たぶんK 01をもたないものはすべて彼らの標的になるとおもうわ」

K 01で化け物にかえた人間に人間をおそわせ。襲われた人間もその発症した人間をおそう。奇妙な伝染病だとおもわせること治療法がないことがその悪循環に拍車をかけて人間はみずから滅ぶというわけだ。

「阻止する手段は？」

リョクの言葉にサラはあたらしい情報をつたえる。

「三日後の正午、チョンジュの上空でK 01をのせた爆弾が爆発するわ。大気拡散でひろがったときの被害は予測できないけれどもちがいに爆発地点から半径100キロは汚染される」

「発射してしまうまえに回収すれば問題ないのでは？」

リョクの言葉にサラは残念そうに首をふるとこたえる。

「発射場所がわからないの。韓国の研究所も正確には場所が特定で

きていない。そうなる上空でとめるしかないけど、この情報もどこまで信憑性があるかわたがわしい。ほとんど運まかせだわ。運よく発見できたとしてもどうして回収できる？」

サラの言葉にリヨクはすこしかんがえてからいった。

「私と朔夜なら爆発をとめることができます。あとは正確な位置さえわかれば」

「正確な位置・・・」

サラはつぶやくとふとおもいつく。ひきだしから一枚のディスクをとりだすとデーターをおこした。それは朔夜とその子供たちのデーターだった。

「これを見て、朔夜と瑠希のデーターなんだけど・・・」

三人はパソコンをのぞきこむ。サラはマウスでみてほしいデーターをひきだした。それは偶然とれたデーターだった。

「朔夜の脳波を測っているときのものよ。ここをみていて・・・わかる一瞬、脳波が乱れたでしょう。次はこれ、瑠希のデーター・・・わかった？瑠希の脳波も乱れたでしょう？朔夜の脳波が乱れるほんの一瞬まえなの」

レセもアルもリヨクでさえサラがなにをいいたいのかわからない。それでという顔をしている三人にサラはさらに説明をつづける。

「いいこのとき、朔夜と瑠希は別の部屋でそれぞれ脳波をしらべていたのよ。瑠希がとつぜん泣きだ。そしたら、朔夜が反応した。いままで偶然だとおもってたけど、朔夜の脳波が乱れるときがたびたびあった。正確なデーターがないからいいきれないけど朔夜と子供とのあいだにはなにかテレパシーのようになにかあると呼びあうとおもつ。実際、脳波が乱れたあとはすぐに朔夜は子供たちのところへいこうとするわ」

サラの言葉をきいてアルとレセはひとつおもいあたることがあった。それは朔夜が子供をうむときだ。リヨクはなん数十キロとはなれている朔夜の出産を感じしていたのだ。人外なやつとあまりきになかったが、これがサラのいうテレパシーなら応用すれば爆弾の

場所があるていど判明する。

「なるほど・・・リヨクも朔夜の異変にはいちはやくきづくな」

アルはそういうとリヨクをみた。

「みずから意志をもたない細胞の状態ならうまくいけばこちらによぶこともできるわ。リヨク、いまからテレパシーで朔夜をおこしてここによんでくれる？できるかしら？」

サラの言葉にリヨクはうなずくと目をして集中する。朔夜のこをかんがえて朔夜によびかけてみた。これで正解なのかよくわからないがそれでいいような気がする。その状態で数分がすぎた。

「やっぱ無理か・・・」

レセが残念そうにつぶやいたとき、コンコンとノックの音。三人はドアに注目した。ゆっくりあいて顔をだしたのは朔夜だった。

「あのー、リヨクいます？」

「これなら、いけるかもしれないわ」

よろこぶサラの声にうれしそうにふたりも賛同する。リヨクは目をあけると朔夜にはほえみかけた。朔夜はなにがどうなっているのかよくわからず、顔に疑問をはりつけていた。

韓国チヨンジュ上空。地上は雲に隠れてここからはみることはいかない。そして、朔夜とリヨクはそんな場所にいた。時計を見るとあと5分で正午になる。リヨクは朔夜とともにK 01をつんだ爆弾をよびよせようとしている。リヨクが朔夜にしたこととおなじようにしているのだが、大丈夫なのだろうか。一応、地上でサラにも探してもらっているがリーダーにうつらないよう操作されているとかんがえるほうがまとまだ。

朔夜の羽衣は鳥の羽になっていてその翼は清らかでうつくしい。リヨクも姿をかえ自分の翼でとんでいた。このまま地上に降りたてば人々は天使と悪魔が降臨したとおもうかもしれない。

刻々と時間はながれていくが爆弾があらわれる気配はない。朔夜が失敗したのだろうかと不安になった矢先、とおくから地響きのよう

なひくくおもい音がした。それは確実にちかづいてくるようだった。朔夜とリヨクは目をあけるとあたりをみまわす。きこえてくる音はあまりにもたよりになく方角をたしかめるには条件がわるい。それでも、耳をくばり、目をはりながら懸命にさがす。そのとき、朔夜の目にキラツと光るものがみえた。朔夜はより集中してその光をみる。

「リヨクっ、あれッ！」

朔夜は光りをとらえると背をむけて耳をすましているリヨクに声をかけた。リヨクも光りの物体をとらえる。ふたりは一瞬、目をあわせると爆弾のほうへと腕をのばした。そして、集中する。

遠くできこえていた地響きがだんだんとちかづいておおきなものになる。会話が成立しないほどにちかづいてくる。朔夜は必死でアレスを脱出したときの感覚をおもいだそうとする。それでも、あまりうまくいかない。シミュレーションですらあまりうまくはいかなかった。ほぼぶつつけ本番になってしまった緊張と不安。

せまりくる圧力と轟音。朔夜の体にはそのリアルさとおれてしまいそうな心があった。このままでは成功しないと心が折れそうになったとき、リヨクが耳元でなにかいった。言葉はわからなかったがひとりではないことをおもいだす。不安な気持ちをリヨクがささえてくれることをおもいだした。ここにくるまえリヨクはいつてくれたのだ「なにがあってもそばにいる」と。

ひとりではないことがこんなにも心強い。朔夜はこの雲のしたでふつうに生活する人々のことをおもった。ここだけではない。これが爆発したら世界中の人たちがふつうの生活をなくしてしまう。自分がそうだったように。爆弾は朔夜をおしかえそうとゆっくりと前進している。

「わわわあああああ」

朔夜は叫んだ。自分がどんな声で叫んでいるのかももうわからないうほど轟音はちかづいていて、朔夜にとってこれがラストチャンスだった。かわせるギリギリまでがんばる。このチャンスを逃してし

まったらリヨクは朔夜の命を優先してこの場からはなれる。そのことはみんな承知している。

不意に朔夜の世界から音がなくなった。さっきまでの轟音や圧力、風もない。ただ、そこには朔夜の意志だけがある。そして、朔夜のなかでみちていくなにか。体のうちからとめどなくあふれでるようなそんな力をかんじた。その力のながれに身をまかすことだけしかしたくなかった。いや、できなかった。正解を体が細胞がしっているようなそんな不思議な安心感。

リヨクは迷っていた。朔夜がなにかをつかみかけていることはわかるがもうこれ以上は。朔夜の身をなによりも優先すべきなのに、それはあたりまえなことなのに、朔夜の力を朔夜のおもいを信じてみたい。たとえそのせいであぶなくなつたとしても自分の身を犠牲にして朔夜を守ればいい。そんなおもいがリヨクを抱いた瞬間。朔夜の雰囲気かわる。感じたことのない朔夜感覚にリヨクは不安よりも安堵を感じた。いける。

K 01をのせた爆弾が変化をみせはじめる。スピードが急激におそくなつたのだ。それだけではない、爆弾をつつむ弾力のある力。そして、手のほんの数センチさきでとまった。それだけではない。つまれていた爆弾のタイマーもとまっている。完全に無効にするこ

とができたのだ。

リヨクがそのことを確認し爆弾をささえるためそつとふれる。爆弾が起爆しないように分解していく。二色の液体がまざると爆発するしくみになっていた。コードをきりそれぞれの液体がまざらないように分解しパラシュートをつけておとしていく。レセがとちゅうで回収することになっている。リヨクがK 01を手にもったとき、朔夜の瞳に意志がやどる。朔夜はそのとたんにささえる力をなくした。しかし、K 01は回収したあとでおちていきはしない。朔夜はどうやらトランス状態になっていたようだ。

「朔夜、おわかりましたよ」

リヨクの言葉に朔夜はK 01をみる。K 01は卵のような力

プセルにはいつていて、おおきさもリヨクの手におさまるものだった。といつてもいまのリヨクの手はおおきいからダチヨウの卵くらいといったほうがわかりやすい。でもこれぐらいのものでサラのいつていたほどの被害があるとはおもえないのだけど。

「はやくもどろう。つかれちゃった」

朔夜はそういつと白い羽根をはばたかせる。リヨクも朔夜をおいかけて黒い羽根をはばたかせる。ふたりはおわつたことへの安堵と達成感で油断していた。そのとき、リヨクの体をなにかがすめたリヨクも朔夜も反応がおくれる。猛禽類が獲物をとらえるような鋭いつぎき。

「やつぱりみにきて正解だった」

リヨクからK 01をうばつたものはそういつ。リヨクは自分がK 01をもつていないことに相手の手元をみてはじめてきづく。

朔夜はその顔をみて信じられずつぶやいた。

「ルフナ」

白い羽根のはえたルフナはやさしく笑つとK 01をゆつくりとおとした。朔夜はなにがおこつたのかわからず反応がおくれる。それでも、のこりの力でK 01をひろつた。空中にういたまま不安定な状態のK 01。リヨクはそれをうけとめにいきたいがそれができない。ルフナの気配がそれを許しはしないのだ。格がちがつ。その本能的なおもいが体が無謀にうごくことを拒む。

「朔夜やつぱりきみは油断できない」

朔夜はK 01を自分のもとへ移動させるだけの力はない。ささていっているので精一杯だった。そんなことをみぬいているのかルフナはK 01に自分の力をぶつけた。朔夜はその力をはねかえすことができなかった。そして、K 01は衝撃をうけて加速して落下していく。

「あつ！」

朔夜はあわてておいかける。おなじように落下するとそれをおいかけた。しかし、力をつかいすぎた朔夜にはもう羽衣を維持するだ

けの力はなかった。朔夜の白い清らかな羽根が崩壊していく。そして、そのままきをうしなった。ものが落下するように朔夜の体がおちていく。

「朔夜ッ」

リヨクは朔夜をおいかける。リヨクには朔夜たちのように遠隔操作をするような力はない。空気の抵抗をなるべく殺すようにリヨクは朔夜にむかって落下する。そんなふたりをみてルフナは満足そうにつぶやいた。

「残念。チエックメイト」

そして、その場からきえる。のこったのは舞いちる二枚の羽根だけ。

リヨクは朔夜の体に手をのばすと自分の腕のなかにひきいれる。しっかりと両腕で抱きしめると黒い羽根をひろげた。羽根は落下の圧力に負けることなくしっかりとひろがり落下を阻止した。そのまま、二、三回はばたとリヨクは腕のなかの朔夜の安否をたしかめる。

「んう」

朔夜はちいさく声をもらした。朔夜は無事なようだ。リヨクはきをうしなった朔夜を安全な場所へとつれていこうとした。とおくからレセののっている飛行機がみえた。リヨクはやくこの場から撤退しなければいけないことをつたえる。そして、なるべくはやくその場からはなれた。

地上におちた卵型のカプセルは落下の衝撃で放射状にとびちり、風にのってひろがった。K 01によって異形化したものたちは人としての心をうしないみにくい羽根をはたかせ世界へとびちった。水をも汚染し一ヶ月後には朝鮮全土を侵食した。朔夜がそのことをしったのは三日たったあとのテレビのニュースでだった。

テレビでは異形化したものへのあつかいについて連日、口論されそれでも解決はしなかった。各国独自で対策をねり、ある国ではそ

れらをとらえ隔離し、ある国では殺した。感染経路や感染条件もわからない人間たちはただ不安に怯え恐怖した。感染者があばれて檻を破壊しようとしている。それをみたものたちがあわてて麻酔銃をうっているシーンもあった。

朔夜はその光景に責任を強く感じた。一度はこの手につかんだのだ。もっと自分がしっかりしていればこんなことにはならなかった。朔夜は自責の念にかられ、ふさぎこんでしまった。世界では二次感染がおこり保護をうたっていた人々にもそんな余裕がなくなると本格的に患者の殲滅へのりだした。ルフナがえがいたように世界はかわっていく。

朔夜がふさきこんだまま一年がすぎた。朔夜はあれからまるつきり食事をとらなくなり、自室からでてきこなくなった。圧倒的な流れにはかなわないことへの絶望が朔夜からすべてをうばっていく。子育てをすることもなくただ、海の上をうかぶこの船からみえる空をみてすごす日々。体をささえるのは管からながれる透明な栄養剤だけだった。すっかりやせ衰えた体には以前の服がかなしくうつる。リヨクによって手いれされた長い髪だけが元氣だったころの朔夜の面影をもこしている。

リヨクは朔夜に子供たちをあわせなかった。とてもあわせてあげられるような状況ではなかったのと、リヨク自身、朔夜の反応がこわかった。もしあわせてみてなんの反応もなければもう朔夜が自分のところへはけっしてもどってこないようなきがして。

サラは点滴を補充するたびに朔夜に声をかけたが、朔夜はどんなはなしをしても反応しなかった。だた、流れていく空をみるだけ。朔夜の体にはもうなにもやどってはいないようなそんな状態だった。フェインの衛星通信にアクセスがあった。それはルフナからだった。アレンはそのしらせをうけるとただちに回線をつなぐように指示した。アレンはセンター司令室でルフナのアクセスにこたえた。

『やあ、アレン。ご機嫌いかがかな？』

ルフナの声だけがひびいた。アレンは返事をしない。少しまが
あき、ルフナはきにするようすもなく本題にはいりはじめる。

『朔夜はいないのか？もし、いないならよんできてくれ。いますぐ
にだ』

「朔夜はとても外にでられるような状態じゃない」

『それじゃあ、はなしはすすまない。K 01のワクチンのことだ。
きになるだろう？朔夜がきたらまたアクセスしてくれ』

アレンが断わるとルフナはそういつて回線をきった。部下が回線
をつなごうとしてくれたがつながることはなかった。そして、アレ
ンはあきらめたように朔夜をつれてくるようにとアルにつけた。ア
ルはどうぜんのように困惑したがそれでもそれしか手がなかった。
ワクチンがほんとうか嘘かわわからないが、自分たちにその用件を
けりとばすだけの度胸はなかった。

数十分もたたないうちに朔夜があらわれた。レセとサラもいつし
よにいる。朔夜はリヨクに抱えあげられそれでもここに意識はない
ようだった。白い服の裾からのぞく白く細い足が痛々しかった。ア
レンはふたたびルフナにアクセスするように指示する。回線がつな
がった。

「ルフナ、朔夜をつれてきた。K 01のワクチンのはなしはほん
とうか？」

アレンの言葉にルフナは『ああ、ほんとうだ』とこたえるとつづ
けてはなしはじめた。

『あれは実験のなかで偶然できた産物だ。いや、発見したといつて
いい。リヨクきみがそのきっかけだった。なぜ、あのような姿にな
るのか？理性がないのか？それは羽衣の本体がないことに関係する。
リヨクきみは朔夜よりさきにうまれたからそんな姿になった。しか
し、朔夜がこの世に誕生するには羽衣であるリヨクがさきに生まれ
てくる必要がある。君たちが戦ったことのある兵士たちはリヨク
とおなじように女神を誕生させるためのものにすぎない。』

リヨクは朔夜をみた。朔夜はなにも反応せずうつむいて自分の手

をみている。サラは疑問におもった。主のない状態でうまれることで理性をたもてないのならリヨクはどうなのだろうか。

「矛盾があるわ。あなたのいうことが正しいのならばリヨクがいま理性をたもてていることはありえないわ」

サラはいった。サラの返答にたんたんとした声でルフナが返答をかえす。

『リヨクの場合、まったく主が存在しなかったわけじゃない。細胞レベルであるが朔夜は存在していた。しかし、そこからさきに発展するにはリヨクの存在が必要だったというわけだ。その証拠にリヨクは主の完全な誕生をまちのぞんでいただろう？』

サラたちはその言葉にリヨクをみた。リヨクはそのことを否定はせず肯定の意味でうなづく。自分という存在を意識するもつとまえ、それこそ誕生とともに朔夜をおもいつづけた。あえない日々のなかでつのつていったのは彼女なしではいきてはいけないとゆうおもい。会えばそのおもいはより深くなった。

『今回ばらまいたものは主をまったくもちはしない。つまりK 01は主が存在するが、今回のK 02には主はいない。さらに厳密にゆくとK 01にはうまれながらに人間の遺伝子をもっているということだ。遺伝子は形成のとちゅうでそれぞれのバランスをとりながら形づくる。そのことが、リヨクたちに理性と考える力をあたえている。女神の一部であって個別であるのはそのためだ。しかし、K 02はちがう。複数の羽衣から形成されていることと人間の遺伝子をもたないため生き物にふれるとそれに寄生して支配しようとする。その性質をいかしたまま人にだけ反応するようにしたのがK 02だ』

K 01とK 02そして、女神の関係はわかった。では、どうすればその支配から救いだせるのか、アレンはきく。

「説明はわかった。それでどうすればいい？」

『簡単なことだ。指示してやる主をつくれればいい。女神の遺伝子を感染者の体にいれることで体のなかに主をもつことになる。まった

く、ただの人間にもどることは無理でも人の姿にもどり理性をとりもどす。そして、つくったワクチンがS 98だ」

そこで言葉をきるとルフナは朔夜にかたりかけた。その声はたんたんとしたものではなく、やさしく口説くようにはなしはじめる。

『朔夜、僕とのはなしを覚えているだろうか？きみが僕のそばにいてくれるというのならこのワクチンをわたしてもいい？』

ここにいるものはその条件に絶望をかんじた。朔夜の状態があまりにもわるすぎる。いまのはなしすら理解できているかわからない。こんな状態の朔夜をわたしてしまうことはできなかった。もちろん元気であつてもわたせるはずなどない。

『もちろん。子供もきてくれるとうれしいけど、きみさえいればそれでいい』

とても了承できる内容ではなかった。はなしあわなくてもこたえはきまっている。アレンは断わろうと口をひらこうとしたとき。

「私だけいく」

それは一年ぶりにきく朔夜の声だった。しかし、弱々しいものではなくしつかりとしたものだった。それでも、ながいあいだ食事をとっていなかったせいかな声にはりはなかった。

「朔夜、私はっ」

リヨクはひさしぶりに朔夜の声がきけたことよりも、一年ぶりにきいた朔夜の声に拒絶されたことがショックだった。リヨクの言葉に朔夜はしつかりとリヨクの瞳をみる。そこには強い意志がやどつていて有無をいわせないほどの強さがあつた。

「ルフナ、私だけがればいいでしょう。子供は必要ないでしょう。おなじように有無をいわせないという意志をふくんだいいかただった。だれもなにもいえなくなる。音も動きも一瞬とまる。それをうごかしたのはルフナの声。」

『もちろん。朔夜だけいればいい』

「どこにいればいい？」

『むかえにいくよ』

朔夜は「わかった」とこたえる。そして、念をおすようにいった。「かならず。K 02のワクチンをもってきて」

『わかつているよ。もってこなかったらひどいめにあう?』

ルフナのこのふざけた言葉に朔夜はこたえる。

「逃がさないわ」

朔夜からでたとはおもえないような声ですごんだ。烈しい感情をしずかにふくんだそれは、その場にいるものを凍てつかせるほどの効果があり朔夜を説得しようとかんがえていたもののおもいも同時にうちくだった。ルフナの声も神秘的な声にかわる。

『二時間後にむかえにいく』

そして、通信はきれた。朔夜はリヨクからおりとやせほそった両足でしっかりとたち、ほほがこけてしまった顔でリヨクにアレンにそして、その場のものたちへいった。

「子供たちをたのみます」

その二時間後、護衛をつれたルフナが朔夜をひきとりにきた。朔夜は最後に子供たちに子守唄をうたった。それは、よく朔夜がくちずさむもので、また、広瀬高志に歌ってもらったものだった。お父さんはヘタクソだったけど。

朔夜は子供たちがやすらかに眠ったのをたしかめると迷いなく部屋をでる。リヨクの瞳がたえられないものをみるように悲しくて、朔夜はきつとわすれられないだろうとおもった。朔夜とひきかえにワクチンを手にいれたがだれの心にもやりきれなさのこるのだろうか。

朔夜がさつていくその背中をひきとめるために手を腕をのばしてだきしめたかった。いまならまにあうとゆうおもいともうまにあわないとゆうおもいどちらも正解でどちらも不正解のようにおもえるけれど、その判断はつきはしない。

朔夜の表情にもその背中にもいつさいの迷いはなく。潔いほど覚悟をきめていた。そのことがみんなの心に哀愁をいろこくのこしていく。そして、さつていくヘリの音がはなれるその音のくるしさに

リヨクの瞳からはひとすじの涙がながれていて、だれもその涙をとめようとはしなかった。しずかにながれる涙はリヨクのおもいの深さやおおきをあらわしているかのように。リヨクがはじめてながした涙はくるしくて哀しいおもいだけが胸にのこる。もう、会えないかもしれない朔夜の姿はながれる涙でにじんではつきりとうつしとめることができなかった。

第4話

あれから六年の月日がたっていた。朔夜が自分たちのもとをさつたあの場面はいまでもわすれられない。子供たちはもう七歳になっ
ていて、ふたりはおなじ顔をしているのに紗枝は朔夜に雰囲気かど
ことなく似てきた。リヨクは“朔夜をみた”とゆう報告をきくたび
に子供たちをつれてその場所にむかった。しかし、朔夜をみつける
ことはかなわなかった。

「パパ、ママはきれいよね？」

ふたりはリヨクの膝にのってアルバムをひろげている。アルバムの
はじめのほうは朔夜と子供たちがうつっている写真だった。お腹
をおおきくしている朔夜やうまれた子供といっしょに寝ている写真
はリヨクがみてきた朔夜だ。リヨクは膝のうえにのっている紗枝に
いう。

「そうだね。ママはいちばんきれいだったよ」

紗枝とは反対の膝にのっている瑠希がとうぜんのようにいった。

瑠希はやんちゃ坊主でおもわぬことばかりをして手をやかす。

「あたりまえだろ。だって、おれらのママだぜ」

ふたりをつれて朔夜をさがしに世界中をあるきまわったせいか子
供たちはいろんな国の言葉をはなすようになった。ただ、日本語だ
けはリヨクがおしえた。日本にいく機会がなかったからだ。子供た
ちが日本語をはなすことで朔夜とつながっているようなきがした。
だから、普段はなす言葉は日本語になっている。

「Buongiorno」

そういつてドアをあけたのはサラだ。サラはイタリア人だからイ
タリア語をはなす。朔夜がいたときにはしらなかったことだ。アル
はドイツ人、レセはフランス人。これも朔夜がいるときにはしらな
かった。興味がなかったから朔夜以外。でも、いまは朔夜だけをお
もいつづけるのはつらかった。わすれることはできそうもないなら

せめて意識がそこへいかないようにしたい。

「今日も元気そうでよかったわ。パパ借りていいかしら？」

サラは子供たちの頭をやさしくなでるとそういった。子供たちは「いいよ」とわらいながらこたえる。朔夜がのぞんだ幸せがここにあるのに朔夜の姿はそこにはなかった。サラはアルバムのなかでわらう朔夜の写真を目にいれる。

「サラ、おれたちのたんじょうびおぼえてる？」

瑠希がいった。瑠希はプレゼントにほしいものをみんなにいいふらしている。プレゼントはふたりの楽しみで毎年くる誕生日、クリスマス、なぜかバレンタインやホワイトデーがちかづくときとそわそわとさわぎだした。そして、あと三日でふたりは八歳になるのだ。

「わかってるわ。日曜日におおきなプレゼントをもってお祝いにいくわ」

サラの言葉になんども念をおしている瑠希と「わたしも、わたしも」とさわいでいる紗枝。そんなふたりをなだめるとふたりで部屋をでる。部屋をでるときサラの上着から力ギがおちた。

「サラ、おちたよ」

紗枝はきづいてサラにしらせた。サラはふりかえると紗枝をみる。紗枝は手をつかわずにサラにおちた力ギをわたす。サラはそれをうけとった。そして、「G r a z i e」というと部屋をでていった。紗枝にも瑠希にも朔夜とおなじ力がある。リヨクのように体を変化することはできないが不思議な力があった。

ふたりをのこして表にでるとサラは仕事のはなしをはじめた。朔夜とひきかえにえたK 02のワクチンはたしかに画期的な効果をしめしたが、まったくおなじものをつくることはかなわなかった。複製品としてつくったワクチンは姿を人間にもどすことはできても理性をとりもどすことはできなかった。

「これが今回完成したワクチンだけでもやっぱり理性をとりもどさせることはできないわ。核となる物質はやっぱり女神、彼女たちから採取しないとダメみたい。核がないままじゃどうしても完全な

ものはつくれないわ」

資料とともにサラが説明をはじめ。K 02の完全なワクチンの半分を世界中にばらまいた。といっても、K 02のように大氣中にながす方法はできなかった。直接、ある一定のワクチンを接種させなければならなかったのだ。かといって、なんの知識もない各国の代表者にそれをおくりつけてよいものか悩んだ結果、自分たちでワクチン接種をすることにきまった。

「おくられてきたワクチンでは対処しきれない、とゆうわけか」

いまにも溜め息をつきそうな声でアルはいった。リヨクはこれから自分がどううごけばいいのかきく。リヨクにとっては人間がどうなってもよかった。ただ、憤りだけがつのった。朔夜を犠牲にしたにもかかわらず対処できない。そのことが悲しく無力におもえた。「どうします。へたに人間の姿にもどすとみわけがつかなくなってしまう」

リヨクの言葉に八方ふさがりなようなきがして、レセが溜め息をつく。朔夜がいなくなってからもうこうして活動しているが具体的な方向性はみえていない。K 02におかされた人間のように未来を創造するだけの力がなかった。ただ闇雲にはしっているだけだ。

「リヨク、いちど日本にいつてみないか？」

アルの言葉にリヨクはどう反応すればいいのかわからない。朔夜と自分がうまれた場所。その場にはもうなにものこってはいないのに、いまさらいつてなんになるのだろうか。

「子供たちがいま私たちの希望だ。未知の力を彼らは遊びのなかでコントロールしている。日本で生活させることが彼らにとっていい刺激になるかもしれない」

「いいでしょう。そのかわり条件がある。朔夜が育ったあの家をかえられるのならいきます」

リヨクは覚悟をきめた。子供たちはずっと母親の姿をおっている。アルバムをひらきながら母親のはなしをかならずきいてくる。母親の育った日本にもいつてみたいとふたりはいつていた。それでも、

いけずにいたのは自分のかつてなエゴからだった。怖かったのだ。彼女の存在をのこす国に行くことはものすごく恐ろしいことのようにおもえた。

「わかった。用意しよう」

そういつてアルはケイタイで電話をしはじめた。相手はアレンだろう。ふたりはまえもってはなしあっていたにちがいない。リヨクは日本をおもいだす。どの国よりもながくいたのにどの国よりもとおく感じる。いまリヨクにとって日本はそんな国だった。子供たちにこのことをしらせたらさぞよろこぶだろう。いちど母親の育った国をみてみたいとさわいでいた姿が目につくんだ。母親を追いかけている二人にはいい刺激になるかもしれない。

朔夜が育った家は売りにだされていた。それをアレンが買いとつてくれたのだ。売っていたらここにもどつてくることはかなわなかったかもしれない。子供たちはバタバタとはしりまわって家のなかを探索している。あとからレセもくることになっていて、ここで生活するのは自分たち三人とレセとの四人だ。レセは子供たちの護衛役だ。リヨク自身もしばらく休みをもらっているが、いちよう護衛をつけることにした。

リヨクがこの家にきたのはあの一度のだけだがそれでも、朔夜の気配がどこかしらに感じられる。家具が十年もそのままおかれているせいかもしれない。ほこりっぽい部屋の空気をいれかえるため窓をすべてあけた。さわやかな風が家のほこりっぽさを一掃する。

「パパ、にかいにベッドがあった。ママのかな？」

リヨクの手をひっぱって瑠希がいった。そのまま瑠希はリヨクを二階につれていこうとする。リヨクは手をひっぱられ、そのままつれていかれる。ふと朔夜をおもつ。こうして朔夜に手をひいてもらわないと自分はふみだしていく道すらわからない。

朔夜の部屋はあのと時のままだった。家具にかかっていた布はも

うとりのぞかれていて、床にまるめられている。ベッドにつつぶしている紗枝はいいにおいがするといつてよろこんでいた。リヨクは窓をあける。ベッドにすわると子供たちが膝にまとわりついてきた。リヨクに質問をする。

「ここがママのおへや？」

紗枝はそういつて部屋をみわたす。リヨクが「そうだよ」とこたえるとふたりは口々にいった。

「わたしここでねる」

「おれがここでねるんだ。さえはこわがりだからパパとねろよ」

「パパとここでねるの」

ぎゃあぎゃあとケン力をはじめたふたりにリヨクはいう。

「三人でねましよう。しばらくパパも仕事がないから、いっしょにいられますし」

リヨクの言葉にふたりはペアとうれしそうな顔をする。「ほんと、ほんと」と念をおしてくる。リヨクは「ほんとです」といつてふたりを納得させた。夕方になるとかたづけもだいぶんおわっていてレセにふたりをまかせてリヨクは外にでた。ゆつくりとこのあたりをみてまわりたかったのだ。朔夜がふつうに生活していたときのまますべてがのこっているとはこれっぽっちもおもわれないが彼女があるいた道だとおもうと寂しさが補えるようなきがした。ただ彼女を感じたい。

日がほとんど沈んでいて赤い空をおうように暗く青い空がかぶさっている。日本の空だ。この空すらリヨクはみて育たなかった。あまりみたことのない懐かしい空。坂をくだっていく、そのままぶらぶらあるくとリヨクが育ったその場所は更地になっていた。緑の空き地になったその場所にたつ。その場所にねむるリヨクの思い出は暗い牢の部屋とぼうだいな時間。

「・・・・・・・・」

地下牢があつたその場所にたつた。そのときの名残はやはり跡形もない。あの生活がうそのようだった。朔夜の存在すらなかったよ

うにおもえてくる。では、どうして自分はここにいるのだろう。

空はすっかり濃くなり太陽の気配のかわりに月の気配があたりをつつんでいた。帰る気にもなれずあてもなくあるく。交差点で信号にひっかかった。赤い信号がかわるのをまっている。そのとき反対側の交差点にたつひとりの女性に目がとまった。目が意識するまえに心が緊張する。リヨクはおもわずあゆみだそうとしたが、となりにいる人に腕をつかまれた。

「あぶないですよ」

信号は赤、車道にはたくさんの車がいきかっている。ふたたびその交差点をみたがそこに女性の姿はなかった。リヨクのつもりもったおもいがみせた幻影だったのだろうか。それとも彼女はそこにほんとうに存在したのだろうか。いまはそれすらたしかめるすべはない。

それから数日がすぎた。子供をつれて散歩にいく。こんな生活をしているせいで子供たちはおなじ年ごろの子供たちと遊んだことがほとんどなかった。もちろん学校にいったこともない。勉強はリヨクがおしえた。ルフナが子供たちをあきらめていないとゆうのがフエインの見解だったからつねにレセやアルが護衛としてつきそっている。

「パパ、あそんできてもいい？」

ふときづくと公園のまえにいた。瑠希や紗枝とおなじ年齢の子たちはいない。みんな小学校にいつている時間だ。

「いいですよ。目のとどくところにいてくださいね。それと力はつかってはいけませんよ」

ふたりは「はい」と返事をする。公園へとはしっていった。元気で好奇心おうせいなのがあのふたりのいいところだ。おかげでどこにつれていっても馴染めなくて苦労するとゆうことがない。リヨクは公園のベンチにすわりながらふたりをみていた。木陰になつていてすずしい風がふいている。ゆるりと前髪がゆれた。公園にいるお母さんの視線をきにする素振りもみせない。子供たちはジャング

ルジムにのぼっている。瑠希はすこしあぶないこともしているが、あれぐらいならだいじょうぶだ。もともと丈夫だからあれぐらいのところから落ちててもけろりとしている。

「ふう」

溜め息をついてうなだれる。交差点でみた女性はみまちがえだったのだろうか。そんなことばかりかんがえていた。ここに彼女がいるのだろうか。この日本に。人目をきにせずおいかければよかったとすらおもってしまう。羽をひろげたとびたてばおいつけたかもしれない。

ひとりの男の子がきゅうにうずくまる。ガタガタと体をふるわしていた。男の子のお母さんがわが子の変化にきづいてちかづいて声をかけていた。男の子はなにもこたえない。するととつぜん背中がもりあがってたちまち姿をかえた。K 02を発症したのだ。あたりは騒然となった。わが子をつれて逃げる母親、泣き叫ぶ子供、あばれるK 02の発症者。

騒ぎにやっときづいたリヨクはジャングルジムをみる。子供たちはジャングルジムのでっぺんで不安そうな顔をしてみている。紗枝なんて目に涙をためている。リヨクが子供たちのところへかけようとしたとき、変化した化け物が母親をおそおうとしていた。リヨクは母親のまえにたち、ふりおとされた刃のような手をうけとめた。

「さがってくださいっ」

リヨクは母親にいった。しかし、母親はなにもいわずすわりこんだままだ。わが子がいかなことになってしまったことへの衝撃とおそわれた恐怖でうごけないのだとリヨクはおもった。リヨクは力まかせに腕をひきちぎる。これでは死なない。すぐに再生してしまう。基本的に捕獲することになっているが、迂闊にも今日は捕獲ロープをもっていない。殺すしかないとおもったとき、足に母親が必死になっけしがみついていた。

「殺さないで！お願いっ、私の子供なのッ」

リヨクはその行動にとまどう。どうすればいいのか悩んだ瞬間、

首にむかつて手がふりおとされる。リヨクは反射的に腕でガードした。しかし、そこに刃のような手があたることはなかった。化け物は背中から血をふきだしていた。リヨクにしがみついていた母親は発狂したような声をだした。しかし、子供はもとの姿をとりもどしていた。母親は子供をだきしめてなんどもなんどもわが子の名を呼びながら泣いている。

なにおきたのかリヨクにもわからない。たおれてきた感染者の背後に刀をもった女性がたっていた。洗練された戦士のような鋭い雰囲気のある女性だ。しかし、懐かしいこの感じはわすれることはない。

「……朔夜……」

リヨクはつぶやいた。それはけっしてリヨクの記憶のなかにいる朔夜ではなかったけれどまぎれもなく朔夜だった。朔夜は刃を布にかえ一瞬でけた。彼女はかえり血すらあびてはいない。リヨクに背中をむけた朔夜はそのままさっといこうとする。

「朔夜ッ」

リヨクは朔夜の腕をつかむ。けっしてはなさないように強く握った。しかしそんなリヨクにふりむきもせず朔夜はひとこと「はなし」といっただけ。その拒絶の言葉に手から力がぬける。

「パパ」

紗枝の聲がリヨクの手に勇気をあたえる。ふたたびしっかりとにぎりしめる。いつのまにかジャングルジムからおりたふたりの子供はちいさな瞳をゆらしていた。朔夜をみて紗枝はいう。

「ママ？」

朔夜はその言葉にわずかに反応する。しかし、子供たちをみようとはしなかった。ふたりの子供はよりそって朔夜をみていた。朔夜はリヨクにもういちどいう。

「はなして」

リヨクはそれ以上朔夜を拘束できなかった。ゆっくりと手をはなす。手がはなれた瞬間、朔夜は姿をけした。子供たちはリヨクには

しりよってきてわんわん泣いた。リヨクはなだめるようにふたりの頭に手をおくと朔夜のいたその場所をみた。六年ぶりにみた朔夜にはリヨクの好きだった明るい笑顔はなかった。

その日の晩。朔夜は生まれそだった家を遠目からみていた。明かりがついていて昔のなにも知らないころの家のようだった。そこには朔夜がうしなったものがすべてあった。もう平穏な生活は望まないと決意してみじかくきつた髪はあまり効果はなかったらしい。リヨクが子供が日本にきているときいて、のこのことみにきてしまっている。

公園で瑠希と紗枝をみたとき、ひと目でわが子だとわかった。おおきく成長した子供たちに母親だと名のる資格はないとわかっていてもこの腕にだきたいとおもってしまった。姿をみせるつもりはなかったのにアクシデントがおきてしまった。「ママ」と呼ばれた瞬間、我をわすれてしまいそうになった。

おおきくなっていた。朔夜の記憶にあるふたりの姿は言葉もはなせないほどちいさくて、自分の腕のなかにすっぽりとおさまっていた。一生懸命ミルクを飲んでいた紗枝。元気に手足をうごかしていた瑠希。お腹にいるとしたときから愛おしかったわが子。

二階の朔夜の部屋だったその窓から明かりがきえる。部屋はしずまっつてしまい、まどろむ気配をみせる。朔夜は記憶のなかにある幼いわが子の寝顔をおもいうかべた。いや、いつでも目をつぶれば自然とうかぶ。安心した穏やかな顔で安らかな寝息をたてていたわが子。もう、この腕にだくことない。

ルフナはゆったりとした椅子にすわりながらちいさな男の子に本をよんでいる。やさしい黄色い光りのなかにある白銀の髪がキラキラとかがやいて神のようだ。子供の目は朔夜とおなじ色をしていた。そして、ルフナとおなじ白銀の髪。子供は無邪気な顔で絵本の絵を指さしている。西洋の絵画のようなシーンだった。

「おかえり」

ルフナは朔夜にきづいてほほ笑んだ。朔夜はルフナに返事をかえずと子供をだきあげた。子供は三歳で幼い顔をうれしそうに朔夜にむけている。朔夜は子供の髪をなでた。白銀のきれいなやわらかい髪はふさふさしていて朔夜の指のあいだから逃げていく。

「きょうはどこいったの？」

幼い声がかいてくる。朔夜はやさしい声でこたえる。

「外にわるい人がいないかみまわりにいったのよ」

「わるいひといた？」

「いたよ。でも、メツてしといたからもう大丈夫」

朔夜は子供の鼻をかく摘みながらいった。子供はうれしそうにあまりそばにはいられない母親とじゃれている。

「ママとおはなしがあるからお姉さんたちのところへいつてきなさい」

子供にルフナはいった。子供は素直に返事をする。朔夜の腕からおりてとことと出口へと歩いていく。朔夜はそのうしろ姿に今日みた子供たちの姿をかさねてしまう。そして、さっきまでの顔とは正反対の表情でルフナとむきあった。

「はなしつてなに」

「あいかかわらず、僕には冷たいんだね」

「そんなことないわ」

「僕には笑いかけてもくれない。笑った顔をみせてほしいよ」

ルフナの言葉に朔夜は言葉をかえさない。ルフナはあきらめたような表情をしてはなしはじめ。

「もう、やめたらどうだ。きみがどんなにがんばっても感染を防ぐことはできないよ。それに」

「だまって」

朔夜のしずかな制止にルフナははなすのをやめた。かわって朔夜がはなしはじめる。朔夜はこの六年間どこへいってもかならずルフナのところへとかえってきている。今回も中国へいつてきたばかりだ。

「かならずあなたのもとへ帰ってる。それさえ守れば好きにしてい、といったのはルフナ、あなたよ」

「たしかに・・・でも、家族の時間も大切にしてほしいものだね。きみとの約束どおり人間にはもう手をだしてないんだから、やさしくしてくれてもいいだろう」

ルフナはそういうと朔夜の腰に手をまわす。そのままちいさな子供のように頭をおしつける。ルフナの甘えるしぐさに朔夜はこたえようとはしない。六年前、リヨクたちと別れたあとルフナと約束をかわした。リヨクたちのもとへけっしてかえらないかわりに人間にはもう手出ししないこと。それはいまでも有効でルフナは守っている。

「今日リヨクにあったわ」

朔夜の言葉にルフナは頭をはなしてみあげた。両腕は朔夜の腰にまわったままだ。そのままルフナは「それで」と朔夜をうながした。それはまるで約束をたしかめるような響きだった。いや、約束の効力を強めるためにいわれた言葉だ。

「それだけよ」

朔夜はそういうとルフナからはなれていった。ルフナの頭に朔夜の言葉がのこる。なにもかたらず「それだけ」といったことに約束の不安定さを感じた。それでも、約束を破ることはできない。破棄してしまえばやつとおもいでつなぎとめている彼女は水がこぼれるようにいなくなってしまうだろう。そして、もう二度とかえってはいない。

「愛している・・・か」

ルフナはフェインの彼女の言葉をおもいだしていた。彼女が人間の男に羽衣をあたえて身ごもったときルフナはフェインをせめた。そのとき、フェインはいったのだ。

『彼を愛しているから』

その言葉にルフナははじめて彼女にフェインにひどく拒絶されたよくなきがした。これまでに僕たちのあいだにできた子供たちはなん

だったのだろうか。ルフナなりに愛していたのに。彼女が自分からはなれてもうかえってこないようなそこしれぬ不安。それとおなじようなものを感じていた。

あれから二週間がすぎていた。朔夜がいた、と報告してからアルとサラが日本にきた。あのあと子供たちはパニックをおこしていたがいまは落ち着きをとりもどしている。いくら時間がたっても落ち着きをとりもどせないのはリヨクのほうだった。

「公園で感染した男の子の資料と警察からコピーした資料」

サラは机に二枚の紙をおいた。そして、説明をはじめめる。K 02についてののはなしだ。子供たちはいまお昼寝ちゅうでよく寝ていた。

「男の子は完全に感知していたわ。まるでK 02のワクチンを打ったように。そして、朔夜の血液が現場におちていた。不思議におもって昔、検査用に採血した血液をK 02に感染したマウスに注射してみたの、するとすぐに治ったわ」

「なんだって？」

その言葉にレセが訝しげにこたえる。それがほんとうならばあるとき朔夜をひきかえにワクチンを手にいれる必要はなかった。

「ほかにアレンの血液や瑠希や紗枝の血液でも試してみたけどレプリカとおなじ完治まではいかなかった。つまり、朔夜の血だけが感染者をなおすことができるの」

「では、朔夜の血液からワクチンをつくることは」

「簡単にできたわ」

実際、精製に一時間ほどしかかからなかった。サラはカバンからちいさな瓶をとりだした。そのなかには黄色い液体がはいっていて、K 02のワクチンとまったくおなじようにみえた。

「しかも、威力はこっちのほうがうえだった。朔夜からつくりだしたほうはたった一滴あれば十分に効果をみせたわ」

「じゃあ、あのとき朔夜をひきわたしたのはなんだったんだ。俺た

ちははめられたのかよっ」

レセは怒りをあらわにいった。あのときワクチンとひきかえにきえていった朔夜の姿がリヨクの頭にうかんだ。

「おちつけ。つまり朔夜がいればワクチンの量産は可能ということか？」

アルはいうとサラをみた。サラは疲れたようにメガネをとっていた。フレームのないメガネがつくえにおかれる。

「そうゆうことになるわ」

そこにいるだれもがやりきれない顔をしていた。そのまま沈黙がながれる。しかし、リヨクはちがった。彼女をとりもどしてもいい理由がここにできたのだ。彼女のそばにいられない理由などもない。「朔夜が彼のもとにいる理由がなくなったということですね」

リヨクのおもわぬ力強いものいいに三人はリヨクをみる。リヨクの顔には後悔や悔しさはなく、ただまえをみつめようとする強さがあつた。やらなければならぬことがはつきりとしているものの強みなのかな。リヨクは決意にみちた瞳でいう。それはアルたちに告げたものではなに自分への言葉だった。

「ルフナをおとしましよう。もとをたたないと朔夜がいてもきりがないですから」

朔夜はたしかに自分を拒絶した。それでも、そばにすることを望んでしまう。博士たちがそうつくつたのならそれを叶えようとあがくことになるの罪があるだろう。朔夜はリヨクのすべてで、リヨクは彼女のすべてではないけれど、それでも、自分には彼女が必要だ。リヨクの言葉にアルは患者の救済よりもルフナに重点をおくことを決意した。たしかにもとをたたなくてはなん解決にもならない。「私が船からもどるまでおとなしくしている」

アルはそれだけをいうと日本をはなれた。司令官であるアレンに協力をえるため。フェインの全力をかけて終わりにするために本部へとむかう。レセもサラもそれでいいとおもった。この六年、まったくルフナのことを調べていないわけではなかった。寝るまもおし

むほど彼らの研究所や行動を監視していた。それでも、手がだせなかったのはK 02のことと朔夜のことがあったからだ。でも、もうそんな遠慮はいらない。朔夜が感染者を治す力ギならやすやすわたしておくことはない。

アルが本部にむかつてから数日がたっている。もうアルは本部にっているところだろう。サラがいつていたが豪華船はいまインド洋にいらしい。許可がでしだいかえってくるといっていたが、もうそろそろかえってきてほしいころである。やはり会議がながびいているのだろうか。

「パパ、ポストにおてがみはいった」

紗枝はそういつて手紙をもってきてくれた。いまからレセとおでかけでレースいっぱい服と明るい髪につけられたピンクのリボンがかわいい。リヨクは「ありがとう」といつてから手紙をうけとる。「レセのゆうことをきいて、気をつけていつてきなさい」

紗枝はうれしそうに笑うと、「いつてきます」といつてからリヨクのはほにキスをしてでていった。窓の外から三人のたのしそうな声がきこえてとおざかつていく。

真っ白な封筒には送り主はかいておらず、かかっている字にもみおぼえはなつた。リヨクの名前だけかかれた封筒をあける。封筒とおなじ大きさの一枚の紙とクレジットカードのようなプラスチックのカードがはいっていた。そして紙に書かれた文字をよむ。

『親愛なるリヨクへ。今日の午後六時、私のうちでパーティーをする。なんにんできてもらってもかまわない。きみの親愛なる友、ルフナより』

そのカード以外なにかはいつていないか封筒をみるともう一枚紙があつた。そこには地図と暗証番号がかかっている。リヨクはその地図と暗証カードだけをもつとあとはゴミ箱にすてた。時計をみると一三時一九分をさしていた。約5時間、時間がある。地図をみるといまからればじゅうぶんまにあう。リヨクはあわてて身支度をととのえると家をでていった。

レセたちは七時前に家にかえってきた。子供たちは買ってきたおもちゃをあけて遊んでいる。レセはリヨクの姿がみえないのでサラに連絡をとることにした。もしかしたら、ふたりで仕事のはなしをしているのかもしれない。

「サラ、仕事でもはいつたのか？」

『いいえ、アルもまだかえってきてないし、オフのままよ。どうかしただ？』

「リヨクがいないんだ。今日はどこもいかにいていつてたから、仕事かとおもって」

『買い物でもいったんじゃない。きにしすぎよ』

サラの言葉に「そうだな」とこたえようと電話をきる。なにか嫌な感じがするが、最近ナーバスになっているのかもしれない。だいたい、リヨクも子供ではいし、それに、自分よりリヨクのほうが強いし丈夫だ。しかし、リヨクは一時間たつてもかえってこなかった。

地図にかかれたとおりనికిてみた。案内人がたっていてリヨクをおくへとまねきいれる。おくられてきたカードはキーカードで、そのキーカードをつかつて部屋にはいるとそこにはルフナがまちかまえていた。ゆつたりと白いソファにすわっていて彼以外だれもいない。

「ようこそ。きてくれるとおもっていたよ」

そういつてルフナは手をさしのべたがリヨクはおうじない。ルフナはうけとつてもらえなかった自分の手をみてから「まあいいか」といつてガラスばりの壁をみるようにいつた。そのしたにはくつろいでいるたくさんの女性と子供がひとりいた。子供の髪はルフナとおなじ色のようにうだつた。子供がひとりだけちがう服をきた女性にちがづいていく。

「朔夜……」

リヨクの肩に手をかけて、ルフナがいつた。それは、自信にみちた言葉のようにリヨクにはきこえた。

「私と朔夜の子だ。かわいいだろう？男の子だよ。甘えん坊だがやさしい子なんだ」

ルフナの言葉以上に子供と朔夜の姿に衝撃をうける。朔夜に甘える子供とそれをあたたくうけいれる朔夜の姿がそこにあった。幸せそうに笑う朔夜は自分がうしなってしまったもののものだった。それでも、リヨクのおもいは不思議ときえはしなかった。自分がこれほど欲深いとはおもわなかった。

「あなたは子供で朔夜をしばらくつけているのですか」

おもったよりも挑戦的なひびきだった。その言葉にルフナの表情がかわる。リヨクもまたきびしい顔になった。リヨクはまっとうからルフナをみた。ルフナもその挑戦をうけるようにリヨクをみすえる。

朔夜は子供の相手をしながらいやな感覚を感じていた。それは具体的に言葉にできるようなものではなく第六感が感じているような不確かで不確定なものだ。でも、確実に朔夜をおちつかせなくさせる。

「パパを探してくるわね」

とうとう朔夜はそういうとルフナを探しにいった。なんとなくルフナのそばにいたほうがいいようなきがした。いつもの部屋にいたがそこにはいなかった。朔夜はそれでも部屋をみてまわる。だれにきいても「知らない」とこたえるだけだった。外にでたとはかんがえにくい。自分がいるときにルフナが外へでかけることはほとんどなかったから。

胸にかけたキーカードで部屋をあける。この部屋からは彼女たちがくつろぐ姿が一望できる。そして、そこにあるシーンに朔夜の表情がかたまる。ルフナに頭をふまれているリヨクの姿があった。リヨクの体は傷だらけで耳からも血をながしている。

「なんで・・・」

やっとのおもいででた言葉だった。ルフナは朔夜をみるとリヨクから興味をうしなつたようにはなれていく。リヨクはぼろぼろに傷

つきながらも朔夜をかすかにひらく目でみていた。そして、必死に朔夜の名をつわごとのようにつぶやく。朔夜は傷ついたリヨクのもとへかけようとした。その行動をルフナにとめられる。

「そっちにいくの？」

ルフナの言葉に朔夜は絶句する。そして、動きをとめた。それでも、ルフナにいった。体中に警告音が鳴りひびいている。

「やぶったの」

「彼は人間じゃないだろう。きみとの約束はまもっている」

朔夜はないもいわない。たしかに人間に手をだすなどはいったがそのほかのものにはふれていなかった。約束は破棄されていない。

朔夜はリヨクをちらりとみていう。

「殺すの？」

「どうしてほしい？」

ルフナはこたえがわかつているのに朔夜にきいてくる。このところ朔夜にはこたえられなかった。そんな究極の表情をしている朔夜にルフナは笑いかけるとかるくいった。

「殺さないよ」

そして、部下に連絡するとリヨクを隔離してしまった。タンカーにのつてはこばれていくリヨクを朔夜はみることができなかった。心配なまなざしをむけることはたぶん許されはしない。

ルフナが寝たころをみはからってリヨクの幽閉された場所へいった。特性の白い扉は朔夜たちの力がきかない。朔夜にはこの扉をあけることはかなわなかった。それでも、リヨクが心配でこんなところまできてしまう。そつとみるとリヨクは粗末なベッドのうえでなににもかけずに眠っていた。傷は癒えていていつものリヨクの顔だ。服には生々しい血のあとがある。朔夜はしばらくそこでリヨクをみていた。けつして声をかけることなくみているだけ。そして、だれにもきづかれないようにそこをはなれた。

リヨクは目をさます。朝なのか夜なのか昼なのかわかすらない。そんな部屋はあの育った場所をおもいださせる。あのころの自分とい

まの自分がかさなつて夢か現かもわからない。やつとのおもいで自分の状況をおもいだすとリヨクは冷静に自分の体の状態をたしかめた。

手をにぎったりひらいたりしてうごくかどうかたしかめる。肋骨にひびがはいっていたが、それはもう治っているようだった。おきあがると、足を見る。ここが一番ひどくおられた、とゆうよりも碎かれたとゆう表現がいちばんただしい。

足はさすがになおっていませんね。でも、内臓は無事だ。

リヨクはおもつたよりも状態がいいことにすこしほっとする。時間はどれぐらいたったのだろう。完治するまでうごかないほうがいいと判断するとリヨクはよこになる。それになにもふつうの部屋にとじこめられているとおもわなかった。あの。地下牢のようにきつと力はずうじない。目をつぶれば朔夜の顔しかうかばない。そのまゝ朔夜の夢をみる。

朔夜は家を見ていた。その家はごくありふれた一般の家族が住むようないさくておだやかな表情をした家だった。しかし、そこでありふれた生活をおくつたのはもうなん十年もなん百年も昔のことのようなきがする。もう、朔夜には縁のない場所。

そのころレセはリヨクがかえってこないこととゴミ箱にすてられていた手紙をよんであせっていた。リヨクがルフナのもとへいったのは明確な事実だがその場所がわからない。アルと連絡をとるとアルはいそいでかえってくる、といって電話をきつた。もし、場所がなかったとしても子供たちだけをのこしていけはしない。子供たちの安全を優先するようにきめているからだ。

リヨクの安否がわからないことで子供たちも不安な気持ちをかかえているようだった。瑠希も紗枝も泣きだしそんな気持ちをぐっと我慢している。パパなら大丈夫だと、自分たちのもとへかならずもどってくるのだと懸命にわるい気持ちをおさえつける。

「瑠希、あれ」

リヨクの姿をさがすように窓の外をみていた紗枝が瑠希にいった。瑠希は紗枝が指さしたさきを見る。でも、なにもなかった。

「なにもないじゃん」

「よくみて、ママがいる。くろいやねのうえにいるじゃない」

瑠希は黒い屋根をさがした。たしかになにかぼつんとしたものがみえる。よくよく目をこらせばそれはたしかにママだった。

「ママ！ママならパパをたすけてくれる。レセにいわなくちゃっ」

瑠希がそういつてとなりの部屋にいるレセのもとにいかうとしたとき。

「あ、ママどつかいちゃう」

瑠希は窓にへばりつくと朔夜の姿をみる。すわっていた朔夜がこちらに背をむけてたっている。いまにもどこかへいつてしまいたいそう
だ。

「紗枝、いこう。ママをおいかけるんだ」

瑠希はそういうと窓をあけてそこからでいこうとする。紗枝はすこし躊躇いをみせたが意をけつして瑠希の後をおった。

朔夜がその場をさるうとしたとき、だれかがひっしに呼ぶ声がした。朔夜は空耳なのかなとおもったが、なぜかもう少しここにとどまらなければいけないとおもう。そして、そのまま三〇分がすぎたがなにもだれもあらわれなかった。今度こそその場からさるうとした。

「ママー」

子供の声がきこえた。朔夜はあたりをみまわす。でも、子供の姿はみあたらない。やっぱり空耳だとおもいはなれていこうとするとまた「ママ」とよぶ声がある。

「ママ、したをみて」

朔夜はその声にみちびかれるように道路をみる。そこには、おなじ顔をしたふたりの子供がいた。朔夜は動揺する。なぜ、ふたりがここにいるのだろう。ふたりはフェインによって守られていたのに
単独で行動しているなんて。

「ママ、パパをたすけてっ、ぼくたちもてっだから」

瑠希は朔夜をみあげながらいった。ふたりはどうも自分の体をうかすことができないらしい。朔夜はふたりをのこしてさろうとした。そんなお願いきくことはできない。ルフナとの約束が朔夜をしばっている。

「ママ、まって」

紗枝はいった。朔夜はふりかえる。ふたりは必死だった。すぐるようにうるませた目でみつめられて朔夜はもう、どうしようもなかった。お腹にいるときから愛おしかったのだ。そんな子供たちにこんなふう泣きつかれてきて母親として朔夜はつっぱねることができなかった。母親なんてなれるわけがないのに。それに、子供たちにはリヨクは必要だった。

「おうちにかえりましょう。レセとはなしをしないと」

そういつて、朔夜はふたりを抱きかかえた。子供の足で走るよりも朔夜が抱いていったほうがはやい。子供をだいたまま朔夜は羽根をひろげる。そして、そのままとびたった。朔夜はちいさな手をみた。「しっかりつかんでいてね」

ちいさな手が必死に朔夜にしがみつく。朔夜はおとさないように腕に力をこめる。もういちど子供たちを抱ける日がくるとはおもわなかった。

朔夜は庭におりたった。家のなかにいるサラと目があつた。サラは信じられないようなものをみる目で朔夜をみていた。

「信じられない・・・」

朔夜はなにもいわずに部屋にはいった。部屋は朔夜が生活していたときのままだった。家具も柱の傷も壁にかいたちいさな落書きもなにもかもそこにあつてなにも変化はなかった。あのころにもどつたと錯覚してしまいそうなほどにかわらない。

「レセはどこにいるの」

「レセ？よんでくるわっ」

朔夜の言葉にそういいのこすとサラはレセをよびにいった。朔夜

はソファにすわる。三人がけのソファのまんなかすわると瑠希と紗枝が朔夜のとなりにとうぜんのようにすわってきた。そして、朔夜の膝にそれぞれいさな手をおいた。

「ママ、オレもパパさがしにいく」

瑠希の言葉に紗枝も「わたしもよ」といった。朔夜はふたりをみてからいう。つれていけるわけがない。あんなところ。あそこには・

・だめよ、あぶないから。ここでパパの帰りをまっいてあげて・
・ちゃんとつれて帰ってくるから」

朔夜の言葉にそうすんなり納得してくれるはずもなく瑠希はリビングにかざられた花瓶の水をあやつつてみせながらいった。

「だいじょうぶだって、紗枝だてこんなことできるし。パパよりはつよくないけど、レセよりはオレのほうがつよいもん」

朔夜はその光景におどろく。研究所にいる二世たちはこんなことできはしない。それどころか、朔夜とおなじように母体として生まれきた子たちのなかにも力をもっているものたちは全体の三割にもみたないのに。

「ほんとうに朔夜がかえってきたんだな」

驚いて二人をみていた朔夜に部屋にはいつてきたレセはいった。その声は事実だけをのべていた。ほんとうに帰ってきたわけではないことをわかつているようだったが、念をおすように朔夜はいう。朔夜はすわったままレセをみあげる。レセの顔はなにもかわっていないように感じたが、やはりすこし老けていた。朔夜の六年とレセたちの六年はちがう。

「帰ってきたわけじゃないわ。リヨクをたすけるまで手をくむのよ」
六年前とは朔夜の雰囲気もはつする言葉もちがっていた。すくなくとも六年前の朔夜はこんないかたはしなかったし、こんなに影をまっつてはいなかった。みじかくきられた髪にも痛々しさをかんじる。

「リヨクのいる場所まで案内するだけ、あとはかってにやつてくれ

たらしい」

「案内だけって、どうやってオレだけでリヨクを助けることができる」

「日本の研究所はほかのところよりもセキュリティがよわいの。それは、あそこにいる一世や二世の子たちが自由にうごきまわれるように配慮された結果よ。外からのアクセスは不可能なわりになかからのアクセスは子供でもできるほど簡単」

「つまり、侵入さえできればやりたい放題とゆうわけね。私もいっしょにいけばいいのね」

朔夜の説明に要領をえたようにサラがいった。朔夜はサラをみてからさらに説明をつづける。

「リヨクのとじこめられている部屋には私やリヨクの力はつうじない。だから、コンピュータで解除するしかない。でも、そこだけはセキュリティがきびしくてたぶんサラにしかできない。コンピュータは建物のなかにあるものだつたらどこでもアクセス可能だわ。すべてがメインコンピュータのようなものだから・・・それとこれが暗証番号」

朔夜はそのへんにあつた紙『deity』とかいてわたした。サラはそれを受けとると一瞬だけみて胸ポケットにしまう。

「朔夜、ひとつきいていいかしら。どうしてあなたの血液だけがK02を完治することができるのかしら。わからないのならいいけど」

「フェインとルフナやアレンの子供から採取したものだからよ。彼女たちの遺伝には色濃くフェインの遺伝がうつがれている。そんな子たちばかりを選抜して遺伝情報をもとに復活させられた子たちつまり私の遺伝子をかならずもっていてその割合がおおきい子をルフナは育てている。羽衣は女だけの能力だから、男であるアレンやルフナは関係ない」

「だからね。だから、瑠希と紗枝の血液では反応が違ったのはそうゆうこと」

レセは大人しくはなしをきいていたが口をはさんできた。

「じゃあ、紗枝には羽衣がつけられるわけだ。つくろうとおもえば」

朔夜はうなずいた。可能だろうとおもう。一世たちのなかでは自分で羽衣をつくった子たちだっている。

「とりあえず、いそぎましよう。リヨクがいつまでも無事だとゆう保障はないから」

朔夜はたちあがってそういうとレセやサラもそれに賛同するとそれぞれ準備にいった。準備がおわるとふたりは子供たちにいいきかせるようになんども口がすっぱくなるほどいった。「ついてこないように」「きちんと留守番すること」「家からけっしてでないこと」かわるがわるいう二人に瑠希と紗枝はものわりのいい返事をかえすし。そして、瑠希と紗枝はみおくりもせずいそいそと自分たちの部屋にもどっていった。

朔夜の場合で国会議事堂のまえまできていた。レセとサラには正装できてもらっている。朔夜は顔パスだからいいが二人はちがうのだ。あやしまれないようにしないといけない。正門から堂々とはいっていく朔夜にレセは小声でいった。

「おい、ここつて議事堂だぞ。大丈夫なのか？」

朔夜は目線をうごかすことなく小声で説明する。

「組織の支援をどこがしているとおもう。これだけの研究の資金や物資、人員の支援は日本、アメリカ、中国、ロシアにフランスなどさまざまよ。主要国のほとんどすべてといつていいわ。とくに日本は力をいれているの」

「へえ、フェインは個人の富豪ばかりだけど。どこだったかはおぼえてないけどな」

「新人類をつくるプロジェクトとして力をかしているのよ。つきない命がほしいとおもうのは権力者のさがね。ときにルフナは戦争の火種をつくることもあるわ。各国ルフナにいちもくをおいているから。なん百年たっても衰えることも死ぬこともないルフナの遺伝が

ほしいのよ。そして、その遺産をもったものが新人類だろうだがわない。K 02の件だって支援している国は実験のひとつだともっているだけだもの」

朔夜は一室にはいる。そこはなんの変哲もない部屋で不自然なところはなにひとつなかった。ひととき存在感のあるつくえもなにひとつへんなところはない。朔夜はつくえにちかづくとそのひきだしの鍵をあける。カチャとゆうかわいた音がひびいた。

なにもおこらない。レセがそうおもった瞬間、かざられた絵のうしろから機械音がきこえた。朔夜は絵をはずす。絵のうしろには人がひとりよゆうでとおれるほどの長方形のあながあいていた。

「こつたつくりだな」

フランスでのことをおもいだしながらレセがいった。半分以上あきれている。朔夜はそんなレセを無視してなかにはいった。なるほど、侵入は不可能にちかい。国会議事堂の警備がゆるいわけではない、そこに組織独自の警護とこのからくり。

「地下好きだな。せめて、階段じゃなく、エレベーターとかエスカレーターにしてほしいよ」

レセがぶつぶついつている。サラはきよろきよるとまわりを観察しながらすすんでいた。

そのころ子供たちは車のトランクのなかにいた。部屋にひきかえしたふりをしてトランクに守備よくめぐりこんだふたりは車がとまり、大人たちがさつていく足音がやんだのをみはからってトランクをあけた。用心深くひらいた隙間からまわりをみてから瑠希は得意そうにいった。

「やつぱ、よんどいてよかったな。 “危険回避100選”」

「よんだのはわたしでしょう。それにちからをつかえばよかったんじゃない？」

「わかってないな。ロマンだよ。おとこはロマンをおうんだよ。それより、はやくでるぞ。あやしまれる」

瑠希のいった言葉の意味に疑問を感じつつ紗枝は瑠希のあとをお

うように車からおりた。トランクをしめるのに手がとどかないから、力をつかってしめた。そして、しばらく歩いてから紗枝はいった。「瑠希、どこにいけばいいのかわかってるの？」

紗枝の言葉をきいてから二、三步あるいてからぴたっとまると瑠希はいった。

「わからない」

「えっ？」

ちいさい声でいわれたせいで紗枝の耳にははっきりと聞こえなかった。もう一度きいてきた紗枝に瑠希はさけんでいった。

「だからわからない!!」

「わからないって」

怒鳴るようにいった瑠希に紗枝は大声でかえす。そして、あきれたようにいった。

「じゃ、きてもしかたないじゃない」

「だいじょうぶだって」

瑠希はきまずそうにいったその時、耳にどこから歌が聞こえる。言葉としてはつきりと発音したような歌ではなく、歌詞のない歌声だった。

「瑠希？」

紗枝は瑠希のようすがおかしいことにきづき声をかけた。すると瑠希は耳に手をあてると「歌がきこえる」といったのだ。紗枝も耳を澄ましてみたけどまったくきこえない。なにもいわず怪訝な顔をしている紗枝に瑠希はいう。

「きこえるよ。すぐきれいなうただよ」

「ぜんぜんきこえないってばっ。瑠希!？」

瑠希は紗枝の腕をつかむと強引に歌のきこえるほうへと歩きだす。瑠希は歌によびよせられているように感じた。歌をうたっているものが自分をよんでいて瑠希にはそれに逆らうことができなかった。紗枝の手をひいて国会議事堂の門をくぐる。

「瑠希、おいだされちゃうよ」

紗枝は瑠希の常軌をいつした行動に戸惑う。それでも、瑠希はためらうことなくすすんでいく。不思議なことにすれ違う大人たちは紗枝たちがいることにきづいていないようだった。紗枝は瑠希の横顔を見る。その横顔は意志がないようにどこをみているのかわからなかった。そして、そんな瑠希の姿をみて紗枝はいつかサラからきいた『トランス』とゆう言葉をおもいだす。きっといまこうしてきづかれずに侵入できるのはトランス状態で潜在的な力をだしている瑠希のおかげだろう。

しかし、トランスは危険だともきいていた。瑠希がもしそうならはやくやめさせるべきである。でも、いまやめてしまえば大人にみつかつて外に追いだされてしまう。それはあまり歓迎できない。紗枝は瑠希のようすを注意深く観察した。もしものときは自分が瑠希を守ってあげないといけない。

ルフナは自室でモニターにうつる小さな子供の姿をみていた。そして、その子供がどこへむかっているのかも見当がついている。映像の中の大人たちはそこに子供がいることにきづいていないようだった。監視室にいた監視員はその映像にうつった子供たちをみて、処理しにいかうとしたがルフナはそれをとめた。

「まちなさい。ほうっておいていい、僕のお客だ」

ルフナの言葉に監視員は戸惑ったが、最高責任者がそういつているのに末端のものがなにかいえるわけでもない。

ルフナはここに子供がいるとゆうことは少なくとも彼らもきているのだろう。もしかしたら、アレもくることになるかもしれない。六年ものあいだ彼らとは冷戦状態だった。ルフナ自身もこの状態にたえかねていたのだ。

朔夜が生まれたこの日本で決着をつけるのもわるくはない。すべてを動かしたのは朔夜の誕生がきっかけだった。彼女はすべての母になるためにうまれてきたのだ。その偉大なる母を誰もが求めている。しかし、母の御胸に抱かれるのは選ばれた子達だけだ。ルフナ

の子かりヨクの子かどちらが次世代の王になるのか。その時がちかづいていた。

「役者はすべてそろわなければならないだろう」

ルフナはあるところへ電話をかける。何回かのコールのあと『はい』とゆう声が聞こえた。ルフナは電話口の相手にしたしげに笑いかける。その笑みが相手に見られることはないとわかっていても、これからおこる運命の最終章をかんがえると笑みがこぼれた。

「アレ、最後のゲームをしよう」

朔夜が動かした我々の運命の輪は大きくまわりその終焉を迎えようとしている。はるか昔、自分たちが追い求めた思いへの最終章をむかえようとしているのだ。そして、運命は軋みながらそのこたえを導きだすのだ。この朔夜が生まれた日本で。

第5話

レセたちは順調よく作戦をすすめていた。朔夜はほんとうに案内だけでけっして手を貸そうとはしなかった。いつも、すこしはなれて二人の作業をみているだけだった。まるでその瞳は人形のようにただみているだけだ。

「OK。こっちはもういい」

レセは腰を伸ばしながらいった。サラのパソコンにこの施設のすべてのプログラムがそのままうつされる。セキュリティ、施設の構図、配管の配置、研究データとそれらにかんすることすべてがそのままサラのパソコンにうつるようになった。サラはレセのケイタイに施設の詳細な地図をおくる。ここまでほんとうになんの問題もなくきた。あっけなすぎて怖いくらいだ。

「ほんとうに侵入してしまえばあっけないわね」

サラはなんの感情もなくいった。この施設はほんとうにほかの施設とはまったくちがう。ここにいる子たちには施設内であれば自由があたえられている。自分たちの力が力ギとなっているところへいけるのだ。しかし、ゆいいつ彼女たちが自由にいりできないところがある。B区だ。リヨクはそのB区の310号室にとじこめられているようだった。サラはそれをつきとめるとパソコンをとじた。その情報はもうレセのケイタイに表示されているはずだ。

「いきますか」

レセは送られてきたデータをみていった。そして、その部屋をでていこうとしたとき、アナウンスがながれる。

『Dブロックにいるサラ・サファイ、レセルバール・サトウ。楽しんでもらっているだろうか？朔夜もいるんだろう？さっきからバレバレだよ』

「ルフナ」

そのアナウンスをきいて朔夜はつぶやいた。この声はたしかにル

フナのものだ。なぜばれたのだろうか。監視カメラの映像をうつしかえてもいたのに。Dブロックの映像はいまだれもなにもうつってはいないはずなのに。

『このほんとうのセキュリティは僕の力なんだ。ここは朔夜がほんとうの意味でうまれた大切な場所だからね。朔夜、彼らをつれて僕の部屋までおいでよ。ちゃんとおもてなししないといけないだろう。』

ルフナのアナウンスはそれで終わった。朔夜たちは顔をみあわせると互いに承諾をえるようにうなずいた。居場所がばれているのだ。朔夜はもうあとにはひけない。ルフナがなにをかんがえているのかはわからない。それはいまだけのことじゃない。この六年ずっとなりにいてルフナをみてきたが朔夜は彼がなにをしてほしいのか、したいのかまったくわからなかった。彼のすることには統一性があるようでなかったし、自分のおもいが形になっても喜ぶことはなかった。

瑠希につれられてきたのはたくさんの扉のある通路だ。ここまで誰にもきづかれずにこれたのは瑠希のおかげだけど瑠希の体が心配でもあった。紗枝はこの異質な空間に体がくすんでいた。壁や床、扉がすべて白い色で統一されている。無機質なその白い色は恐怖すら感じる。ここにはいるまでは大人はスーツをきていたり白衣をはおったりしていたが、いますれちがった人の格好は白い防具服に、マスクで顔をおおっていた。瑠希はあいかわらずトランス状態で呼びかけてもなんの反応もしめしてくれない。みためやこの場の雰囲気がかわったことだけじゃない。この場所は自分たちにとっていいところではない。はやくはなれたいと紗枝は本能的に感じていた。

「瑠希？」

いちばん奥にある扉のまえで瑠希はとまった。名前をよんだがとうぜんのように返事はいってこない。瑠希は扉についた四角いでっぱりまで体をうかす。その四角いものは金属の色をしていてボタ

ンが横に三つ、縦に四つ、ついていて全部で一二個あった。瑠希は何回かボタンを押した。すると扉はあっけなくひらいた。部屋のなかからは歌がきこえてくる。

「・・・ママ？」

その部屋にいたのは鎖で手足をつながれた女性だった。彼女は朔夜とおなじ茶をおびた黒い瞳と赤みをおびた茶色の髪をしていて、まったくおなじ顔だった。しかし、朔夜とちがいがいながい髪をしていて雰囲気もちがう。紗枝が朔夜だと錯覚したのは一瞬だけだった。

「瑠希っ」

瑠希が鎖でつながれた人へとちがうていこうとする。紗枝は瑠希の手をつかんでとめようとしたが、瑠希によつてはねとばされ壁へととばされてしまった。しかし、紗枝に瑠希の力をはねかえす力はない。潜在的にもつていたとしてもいまそれをコントロールするだけの能力がないのである。紗枝は体をおもいつきり壁にぶつける覚悟をしてかたく目をつぶった。

その映像を朔夜たちはルフナの部屋でみせられている。朔夜はけわしい顔でその映像をみているしかなかった。紗枝の体が壁にぶつかりそうになったとき、朔夜はたえきれず目をつぶった。普通の人間ならあの距離で力をくらい壁にぶつかれば即死だ。紗枝はまだ力をつかえきれない。まちがいにうたではすまない。

「ああ、残念。邪魔がはいった」

ルフナの言葉に朔夜は恐る恐る臉をあける。壁にぶつかるはずの紗枝のちいさな体はアレンの腕のなかで守られていた。朔夜はしんそこほつとした顔をした。朔夜に子供たちの映像をみせてから母親の顔になっている。ルフナはそれがきにいらぬ。

「アレンはテレポートが得意だからな。よかったね、朔夜」

サラはきびしい顔つきでルフナにたずねた。

「あなた子どもたちをおびきよせたの？」

「まさか。僕にそんな能力はないよ。ねえ、朔夜」

そういつてルフナは朔夜をみる。画面からながれる歌をききながら朔夜はいった。この六年、自分の体にながれる血の習性を学んできた。自分がどうゆう種族なのかをきちんとルフナから教わったのだ。

「歌よ。瑠希はこの歌にひきつけられているの」

サラは朔夜の言葉を怪訝な顔つきでききかえした。たしかにきれいな声だがサラの耳には普通の歌のようにきこえる。けれど、おなじようにきいているレセの耳にはサラとはすこしちがうようにきこえていた。

「歌？どうゆうこと」

朔夜は歌いはじめる。曲は最近よくきく外国の歌手の歌だ。どこまでものびるような安定した声量、耳に心地よい音程。レセは思わずその朔夜の歌にききいった。ルフナでさえその声を楽しむように瞼をとじて堪能する。朔夜は二人のようすをみて歌をやめた。

「わかる？彼女たちにとって歌は異性をひきつける道具なんだ。鳥がパートナーを求めて鳴くようにね。昔話でもあるだろう『舞い歌う姿におもわず男は羽衣をかくしてしまう』とね」

ルフナはそういつて説明をする。そして、おかしそくに映像をみるとさらに説明をするようにつけたしていく。瑠希は鎖につながれた女性の首に抱きついている。

「僕たちオスは匂いでメスにきにいられる。遺伝的にはなれた者の匂いを彼女たちは魅力的な匂いとしてうけとりカップル成立だ。瑠希は今年で八歳くらいだろう。普通はもうそろそろパートナーをきめている年ごろだよ」

「この映像に映っているのは朔夜とおなじようにみえるけど」
ルフナにサラはいった。白い服をきてまったく朔夜とおなじ顔をした女は雰囲気こそちがうが朔夜とまったくおなじ身体的特徴があった。

「彼女は朔夜とおなじだよ。遺伝的には彼女と朔夜はまったくの同一人物だ。もちろん、彼女は朔夜とちがってできそこないだけだね」

くすくす、瑠希はふられるよ。彼女と瑠希の遺伝はちかすぎるからね」

そして、どこおかしそうにつづけた。これまでの自分たちの歴史をはなす。人がもう信じなくなつた伝説の起源をはなしているようでもあつた。

「彼女たちは類まれな歌声でときには女神や天女として人にうけいれられた。彼女たちは自分たちにそなわっている神秘の力でたくさんのお幸福を人にあたえ、それがまた彼女たちを神のような存在へとたかめていった。いまでも、不思議な力をもつ人間がいるだろう。あの子たちは彼女たちの子孫だよ。そして、彼女たちが消えてしまったところ、人間の一部は彼女たちの子孫を魔女として排除したこともあるんだ。ながい、ながい時のながれのあいだにその力は弱まり、彼女たちの歴史は物語のなかにだけのこつた。こうして、すべてから忘れさられていくことを“滅び”といわずしてなんというんだらうね？」

ルフナの言葉にレセとサラは言葉につまつた。そうかんがえると世界各地にのこる神秘的なものは実話としてうけいられる。彼女たちはたくさんのお能力をもっている。白鳥としておりたつた天女の物語や人が突如、獣へと変化する物語。世界にある物語や神話は彼女と彼女たちの子供がおこしたことなのだろう。

「朔夜、僕いったよね。僕を裏切つたら人間を滅ぼすよって。どうしてこんなことしたの？」

ルフナは朔夜をせめるようにいった。朔夜はなににもいえない。どうこたえるべきかかんがえていた。あまり刺激するとほんとうにやつてしまいかねない。ルフナはあまりにも人間に影響をあたえすぎる。自分の発言が人間の命をにぎつてしまつてすることに朔夜はいやな汗をながす。あのと時のような過ちは犯したくない。もう、ふつうの人々の生活をおびやかすようなことはやめてほしいのに。やはり、今回の自分の行動は軽薄すぎたのかもしれない。

「いいよ、こたえなくて。でも、償いはしてもらつ」

「償い？」

ルフナの言葉に朔夜はくりかえすようにつぶやく。ルフナはレセとサラをみていう。

「二人を殺してよ。人間ふたりの命だけでのこりの六〇億人は助けであげる。すこししかやぶっていないなら妥当だろう？それとも、完全に破棄する？」

名案だろうとでもいいいたいのかルフナはいった。朔夜はその言葉に目をみひらいた。信じられない言葉だった。どうして、ルフナには人間の命も自分たちの命もおなじような重さがあるとつたわからないのだろう。どんな命にだってその命は平等の輝きがあるのに。

「どうするの？できないならいいよ。全部、僕が殺していくから」

そういつてルフナは二人に力をむけた。朔夜はとっさにあいだにわつてはいり羽衣でその力をさえぎってしまう。ハツとして、なんとか誤魔化さなければ、六〇億の人の命がかかっている。そして、冷酷な言葉をはきながら朔夜は羽衣を刃にかえる。

「私がすればあとの人間は助けるのね」

その言葉をうれしそうにルフナはきいた。レセとサラはそんな朔夜にあとずさるが、なにもいえない。驚くほどその言葉は朔夜を動揺からすくってくれた。朔夜は無表情で剣をかまえる。朔夜は剣にぎりしめる。強くにぎりしめた。そして、ふみこむ。切っ先は弧をえがき青く光った。

ダン

「ふん」

サラとレセはとじてしまった目をあける。刃は床につきたてられていた。朔夜はうつむいたまま動こうとはしない。朔夜の表情はまったくわからない。ルフナはいつのまにか手に短刀をもっていた。

それを、無表情のまま投げつける。その軌道のさきにはレセがいた。

「朔夜ッ」

朔夜は腕で短刀をうけとめる。朔夜の腕には短刀がささっていた。朔夜はそのままルフナにむきなおる。朔夜は悲しい目をルフナにむ

けた。しかし、ルフナは朔夜の気持ちかわからない。

「きみも人間を選ぶんだ」

ルフナのといに朔夜はこたえない。なにもこたえずただ自分をみつめてくる朔夜にルフナはあきらめにも自嘲にもた笑みをうかべた。そして、自分にいうようにルフナはいった。

「もう、いい。決着をつけよう」

もう、なにもかも終わりにしたかった。疲れているのだ。ルフナが求めるものはもうなにをしても手にはいらないことがわかった。朔夜を信じたかった。でも、彼女もフェインとおなじ自分は選んではくれない。そのことがよくわかった。すべてを終わりにしよう。

アレンはルフナから連絡をもらったあとインド洋のまんなかからアルだけをつれてリヨクたちの家へといった。しかし、そこに子供たちの姿はなかった。もしやとおもい国会議事堂のまえまでくればこの歌がきこえた。もし、瑠希がきいていたとしたらこの声にひきよせられるにきまっている。

アレンは瑠希を気絶させるとアルにわたした。そして、鎖でつながれた女をみる。アレンにはその女がフェインの複製品だとひと目でわかった。でも、けっして彼女とはちがう。朔夜もおなじ遺伝であつてもやはりほかの個体であつた。けれど、彼女はどことなくフェインに似ていたけど。そう例えるならまるで親子のような感じなのかな。

アレンも瑠希とおなじように彼女の歌をたよりにここまでできた。その選択はただしかった。彼女はいまも歌いつづけている。言葉でない歌。音の羅列のような歌だった。彼女には言葉がないのだろう。アレンはその姿にたえかねて彼女にちかづいた。無言で鎖をほどく両手が自由になった彼女はくすくす笑いながらアレンに腕をまわす。雰囲気がちがついても彼女とはちがうとしても、どうしてもこんな彼女をみていられない。どんなにちがうと感ずてもフェインの彼女の一部だということはかわりない。そんな彼女をこんなふうには

うっておくことはできない。

「私はきみを選ばないよ。悲しくなるから」

首を舐めてきた彼女にアレンはいった。フェインにはじめてあったときをおもいだす。きこえてきた歌声をアレンとルフナは追いつめるように走った。歌っていた彼女は空や大地に歌をささげているようにアレンの目にうつった。アレンたち三人をむすんだのは自分たちのなかにある動物としての本能だったことが悲しい。

「アル、なにもみえない」

視界を手の平でさえぎっているアルに紗枝は文句をいった。なにがどうなっているのかわからない。アレンが鎖でつながれている朔夜にた人を助けているところをみていたら突然、アルの手の平が紗枝の視界をさえぎってしまった。

「子供はみなくていい」

アルの言葉に紗枝はブーとほっぺを膨らませてふてくされた。そんな二人の背後からガチャッと乾いた小さな金属音がきこえた。反射的にアルはふりかえる。そこには、高瀬博士たちがいた。

「まったくようすがおかしいとおもっていたら。こちらにつくなりこれですか」

明人が銃口をこちらへむけていった。まさか、高瀬博士たちもいるとおもっていなかった。二日前の情報では日本にはいなかったのに。

「まったくだからあれほどセキュリティを強化しておくようにとルフナにいつておいたのに」

明人はあきれながら侵入者をみていった。そして、紗枝をみるとうってかわってうれしそうにいった。

「でも、わるいことばかりではないようだ」

高瀬博士たちの背後からK 01タイプの戦闘員があらわれた。アレンはアルとの距離をはかる。レポートするのにもアルの体にふれないと彼をつれて逃げるができない。ピリピリとした戦闘独特の空気がながれる。そしてはりつめたなか鐘が鳴った。戦闘開

始の鐘になる。

「瑠希と大人しくしている」

アルは紗枝にそういいのこすと銃弾をはなつ。先制攻撃をしかけたがその弾はいともたやすく弾かれてしまう。超人的なK 01と戦うためになんの訓練もしていなかったわけじゃない。彼らとの戦いで必要なものそれはいちはやく危険を察知する動物の直感。

「アルっ」

アレンは無謀にもつつこんでいったアルに制止の意味でその名を呼んだ。しかし、もう戦いは動きだしとめることはできない。ならば、アルとともに戦うのみ。アレンは空気中の水分を一ヶ所にあつめる。そして、それを分裂させ瞬間的に凍結する。無数の氷の刃がアレンの身を守るようにただよっている。その一部をアレンは敵にはなつた。つぎつぎと敵に命中していく。純血のアレンにとって彼らはなんの障害にもならない。彼らには超人的なスピードと筋力が存在するが、アレンのように神の力だと人々がおそれた力はない。そんなアレンに明人は銃弾をはなつた。アレンはその銃弾に手の平をむけると彼らがしたように銃弾を弾こうとした。しかし、銃弾はとまることも弾かれることもなく、アレンの肩に命中した。

「この銃弾は特別なんです」

明人はそういうと今度は子供たちのほうに銃弾をむけた。そして、アレンをおどすようにいう。

「動くとき撃ちますよ」

アレンはくつと息をのんでその条件をうけいれるしかなかった。アルも健闘してはいるがよけきれなかった傷があちこちにできていく。アレンはそんなアルと拳銃をむけられている子供たちをききしながら明人と明人の後ろで隠れるようにたっている高志を苦しい表情で睨みつけた。

「チッ」

アルは銃弾が弾かれることにいらだちを覚える。このままでは間違ひなくやられてしまう。アルは自分のこれまでの戦闘経験と直感

だけをたよりにほとんど本能にちかいところで動くしかない。それでも、彼らに決定的な負傷をおわすことができなかった。ただ、まだましなのは今日は直感がすごく冴えているとゆうことだけだ。今世紀最大といってもいいかもしれない。でなければいまごろ血だらけでそのへんに転げまわっていないければいけない。

とつぜん、彼らの動きが鈍くなった。そして、急にぴたつと動きをとめる。戦いの騒音のなかきづかなかったが微かに歌がきこえる。これは、彼女の声だ。言葉ではなく音の歌。彼女は歌を歌っていた。朔夜の顔をしたその女の無邪気に歌う歌に彼らはききいつているようだった。そして、その歌をおわらせるように響いたのは拳銃の荒々しい音。

「邪魔をするな」

傲慢にいった明人に高志はあわててそれを諫めた。彼女はなぜこんなところにとじこめられているのだとおもう。

「兄さん、だめだ。もし彼女がッ」

しかし、高志の言葉はもうおそかった。うたれてしまった彼女は高い発狂の声をだして、叫んだ。そして、明人にむかって飛びつく。明人はあわてて数発、発砲した。彼女はそれにひるみあらずさるとふたたび叫ぶ。今度は、すべてのものを弾き飛ばすような突風が吹きあがる。敵も見方も関係なく、彼女以外その場に立っているものはいなかった。高志が恐れていた彼女の暴走がはじまった。

紗枝はうちつけられるようにドアにあたる。瑠希もおなじようにどこかへぶつかってころがっていた。紗枝はうちつけた衝撃でうまくおきあがれない。それでも、瑠希を守らないとゆう使命感でたちあがろうとする。

「紗枝」

その時、声がきこえた。その声はパパのものだった。紗枝は必死にそれにこたえる。

「パパ、パパッ！」

「紗枝ですね。そこにいるんですねッ」

「パパ、たすけて」

「パパをここからだしてください。パパたちの力が通用しないんです」

紗枝は瑠希がしていたことをおもいだす。そして、壁づたいになんとかたちあがるとその四角いでっぱりに手をのばすがとどかない
「パパ、とどかない」

リヨクはその言葉に元気づけるように紗枝に声をかける。

「大丈夫、集中してください。いつも物をつかしているように自分を浮かすイメージをもって、紗枝ならできます」

紗枝は泣きだしてしまいそんな目を必死に我慢して「うん、うん」とこたえた。そして、いわれたとおりイメージする。物を浮かすときとおなじように自分の体を浮かせるイメージ。しかし、まわりの発狂の声と銃弾の音、それらが邪魔になっておもうように集中できない。必死にパパの声を聞いて集中しようとするけど。

「大丈夫です。紗枝ならできます。パパは信じてますよ」

紗枝は必死に集中する。そして、イメージをつかんだ。体がふわりと浮かぶ。そして、四角いでっぱりまで体を浮きあげていくことができた。

「パパ、なにおせばいいの」

「大丈夫、自分が押したいものを押せばいいんです。きっとあたりますから」

リヨクは彼女たちの直感にいた感覚を信じるしかなかった。そういわれて紗枝は戸惑いながらボタンをみつめる。そして、押したくなるボタンを順番におしていった。すると、『OPEN』の青い文字が浮かんだ。それをみて紗枝はほっとした。

「紗枝ッ」

誰かのせつぱつまった声と大きな人影が紗枝のまえをたちはだかつた。赤みをおびた茶色いながい髪が舞う。そして、どさつと紗枝のまえにたおれた。

「朔夜」

リヨクは腹部から血をながしたおれている女性をみてつぶやいた。はじめであつたときとおなじながい髪をした朔夜がそこにいるのだとおもつた。彼女は血を吐きながらもたちあがると明人へとむかつた。明人はとどめをさそうと乱発する。彼女はひるまず明人の懐へはいりこむとその首筋に線をひいた。彼女の爪はいつのまにか刃よりも鋭く変形して明人の血に染つていた。

「ゴホ、ゴホ・・・ひゅう、っ」

彼女はそのまま大量の血を吐き明人のうけにかさなるようにことされる。明人ももう息はしていない。即死だつた。リヨクは蒼白な顔をしてそれをみつめていた紗枝の頭を抱きしめながらふたりをみていた。紗枝は恐ろしくてリヨクの胸で泣いている。彼女はおだやかな笑みをたたえてその生をおえている。アレンはその顔がフェイントと一瞬かさなり、あのときにタイムスリップしたかとおもつた。高志はそんな二人に自分のきていた白衣をかぶせた。そして、アレンたちに手をあげるといった。抵抗などするきはなかった。もとも自分は争うことにむいてはいない。こんな悲しい結末しか争いはうまないとなんと兄さんに忠告しただろうか。

「私の負けです。朔夜のところへ案内する。きつとあの子も大変なめにあつているだろうから、助けてあげてください」

高志の言葉にアレンやアンは疑心を感じざるおえない。まだ、彼にはK 01が二体はいる。たしかに歩はわるいが勝算がまったくないわけじゃない。どうするべきか思索しているとリヨクは紗枝を抱いたままたちあがるといふ。

「博士、朔夜のもとへつれていってください」

そして、無防備に高志へとちかづいていった。高志は悲しくもうれしそうにわらつた。自分はもうとくに研究者として冷静に朔夜をみられなくなつていた。この場所であつた朔夜とリヨクをアレンからひきとつたそのときから朔夜が成長していく過程で自分は彼女に愛をささげてしまつてにきづいていた。愛おしいわが子に無償の愛をささげながらこれからもなにも変わらずすごしたい

と自然とおもうようになっていた。それを、許さなかったのはただ一人しかいない兄へのおもいだけだった。そのおもいは高志を呪縛するかのようにつなぎとめた。しかし、兄は死んでしまった。もう、自分は兄へのおもいに縛られることはなく、やっと素直に娘に手をさしのべることができる。

朔夜はレセがルフナにむけた拳銃を刃でうけとめた。キィインとゆう甲高い音をたてて銃弾を阻止する。レセは困惑の瞳をむけた。朔夜はてつきり自分たちを選んでくれたのだとおもっていたのだ。しかし、実際はルフナにむけたレセの攻撃を彼女はさまたげたのだ。まるで彼を守るように。

「朔夜、きみはどっちの見方なの」

ルフナが理解できないとゆう感じにいった。理解できないのはルフナだけじゃない、サラもレセもだれひとり理解できていない。朔夜はルフナにむき、まっすぐと意志のある強い瞳をむけていった。「見方とか見方じゃないとかどうでもいいの。私は守りたいものを守るだけ」

朔夜の返答にルフナはしんそこ理解できないとゆうように顎に手をあてて頭をかたむけた。そして、朔夜にこたえをもとめるようにいう。

「僕には仲間かそうじゃないかただだよ。朔夜、ちゃんと選んでよ。僕につくのか彼らにつくのか」

そして、ナイフをなげつける。今度はサラとレセをかばった。レセは困惑の色をかくせず誰に標準をあわせればいいのかきめられない。それはサラもおなじだ。サラもいちおうもっている拳銃をだせずにいた。

「人間につくの？それとも僕についてくれるの？」

「いいえ、私が望むのは共存よ。だれも傷つかないように。あなたもこの子たちもアレンたちや人間もみんないっしょに生きていくのよ。ルフナ」

ルフナは愕然とする。そんなこたえをながいあいだ求めていたわけじゃない。自分が求めていたものはそんなものではないのだ。ルフナは朔夜に失望の目をむける。そして、ほんとうにすべてに疲れてしまった。もうこれ以上、朔夜も自分もそのほかのものたちもこの場所に存在させたくはなかった。いまずぐにすべてなかったことにしたい。

「この場所ごと消えよう」

それを合図にどこからか爆音がおこる。そしてともにそこらじゅうから悲鳴が聞こえた。ルフナはこの施設ごと自分たちと心中するつもりなのだろうか。噴水のようにあとこちらから火があがる。地上の建物をこわしてその火はひろがっていった。あつというまに炎がつつみこむ。そして、この部屋にも大きな地上へとつながる穴があいた。朔夜は翼をひろげてサラとレセの腰に手をまわしてとびたつ。

「朔夜、逃がさないよ」

ルフナはそういつて朔夜のあとをおう。朔夜はルフナがおつてくることにほっとしてしまふ。とりあえずここからでないといけない。そして、逃げおくれた彼女たちの姿に心を痛めた。そのとき、白銀の髪をしたちいさな男の子をみつける。

「ラウトツ」

思わずひきかえそうとしたときリヨクがラウトと抱えあげる。朔夜はホツとしてふたたびまっすぐに空をめざした。後ろからはルフナがおいかけてくる。彼もラウトもリヨクやレセたちも助からないとこの六年の意味がない。

そのころ、リヨクたちは急におこった爆発から逃げていた。なにが起きたのかわからず、朔夜をさがしたいがこれ以上は危険だとゆう判断でリヨクは子供たちをアレンにわたす。

「アレンさきに逃げてください。私は朔夜をさがしますから」

「しかしっ」

テレポートで逃げるならみんなで逃げたほうがいい。紗枝も不安

そうにリヨクの手をにぎったままだった。しかし、リヨクはその手をはなすようにうながすと、アレンと紗枝にむかっていう。

「かならず生きて帰ってきます。大丈夫ですよ。普通の人間よりは丈夫にできていますから、死んだりしません」

リヨクはそれだけをいいのこしてアレンたちからはなれた。そんなわけない。こんな高温で再生がまにあうまえに焼かれればいくらなんでも死んでしまう。アレンはその背中をみつめ高志い声をかける。高志はリヨクとおなじようにどこかへいこうとしていた。

「高瀬博士、あなたもいつしよにきてもらいますよ」

「ですが、私は・・・」

アレンは有無もいわせずその手をつかむとアルや瑠希、紗枝をつけて安全な場所までレポートした。リヨクの無事を祈るように目をとじる。神が力をかしてくださるのならどうか、この子たちに両親を幸せな家庭をあたえてあげてください。

リヨクは朔夜の名をよびながらさがしつづけていた。すると、ちいさな子供の泣き声がかきこえてきた。そして、そちらへむかうとそこには朔夜といっしょにいた。白銀の髪をした男の子がいたのだった。

「ママ、パパ」

と泣き叫んでいる。その子のまわりには建物の下敷きになった女性たちや研究員たちがころがっている。リヨクはその死体のなかに朔夜がいなかったかを確認する。そのとき、上空から「ラウト」とよぶちいさな声をきいた。空をみあげると朔夜の姿がみえた。朔夜はレセとサラを抱えている。困惑しながらこちらへこようとしている。そして、「ラウト」と朔夜がよんだのはこの子供のことだとわかった。リヨクは朔夜の後ろからルフナがせまっていることにきづき、子供をかかえて飛びあがる。すると朔夜はふたたびまっすぐに天へととびたつていった。自分が子供を抱えて逃げていくことを確認したようだった。

外へでて国会議事堂をみると三本の火柱が龍のようにつごめいて

いた。研究施設ごと国会議事堂は無にかえすつもりなのだろうか。たくさんの悲鳴は地獄の業火にかき消されその存在もわからない。

朔夜はアレンの姿をみつけた。そして、低空飛行でサラとレセをそのちかくへおろすと突風が衝突するように空へ舞いあがる。国会議事堂の頂点で朔夜はルフナをまちうけた。あつというまにルフナは朔夜の懷へとびこんでくる。朔夜はルフナの刃を寸前でうけとめる。ルフナの刃は首を落とそうと飛んできたのだ。

「くっ、ルフナッ」

朔夜はルフナの太刀筋をうけとめるのが精一杯だった。力でもまけているのだ。まともに戦って勝てる相手ではないことを知っている。まわりから何本もあらたな火柱がたちあがる。

「朔夜、疲れたんだ。きみは僕といっしょにいてくれないとダメだよ。きみは僕のものだから」

朔夜にルフナはそういつてはなれる。間合いをとって、さいど攻撃をしかける。朔夜はその攻撃をうけるだけでけっして攻撃にでようとはしなかった。ルフナはそれすらきにいらぬ。こうして、自分の命を危険にさらされても自分を敵にもしない朔夜が恨めしかった。攻撃して傷つけてほしい。自分が彼女にとってなんであったのかわからしてほしかった。それが敵であつてもよかった。自分はそれだけ彼女を傷つけてきたのだから。

「ルフナ、私は誰も傷つけない。あなたもおなじよッ」

朔夜の言葉にルフナはよけいに逆上する。きみを共用して生きていけるほど自分は強くはない。だから、あのときも自分は彼女を許せなかった。自分たち以外のものになつてしまふ彼女を許すことができずに殺してしまったのだ。そして、朔夜が彼女とおなじことを望むならいっしょに死のうとおもっていた。もう自分にとって自分と朔夜以外はどうでもよかった。この六年ずっといっしょにいたにもかかわらず彼女は自分を“特別”としてはみてはくれなかった。それが、こたえたのだ。しかも、彼女は自分をそのた大勢とおなじようにあつかう。殺したいほどの憎しみでも彼女のなかで“特

別”ならそれでいいのに、それすらあたえてはくれない。

「きみはなんにもわかってない」

そういつてルフナは力いっぱい刃をふりあげる。そして、朔夜を殺そうとふりおろそうとした。

「朔夜は傷つけさせませんっ」

リヨクはルフナの手を背後からおさえつける。ルフナは忌々しうに自分の背後にいるリヨクを睨みつけた。この男が僕たちから彼女を永遠にうばったのだ。この男さえいなければ僕たちはこんなことにはならなかった。ずっといられたのだ。あの幸せな時間のなかにいられたのだ。

「おまえがいなければよかったんだッ！」

ルフナはひときわ狂った声で叫び、リヨクを弾き飛ばす。その力の衝撃に朔夜は両腕をクロスさせてたえる。突風に弾き飛ばされないうちに朔夜はふんばった。ルフナは下をむいてうつむいたまま脱力しているようにみえた。朔夜はそんな彼をみつめちかづく。小さい子供にするように抱きしめないといけないとおもった。六年間、彼はずつと傷ついた子供のような目をしていた。彼をつつむように荒れ狂う力の波を朔夜はものともせず彼にむかつて手をのばす。

「朔夜っ」

リヨクの声が自分を制止させようとするが朔夜は手をのばす。そして、ついに朔夜はルフナを抱きしめた。ルフナはなにも反応しうとはしない。朔夜はそれでも、大切なものを抱えるようにその頭をかかえた。ルフナには朔夜の心音だけがきこえる。彼女もよくこうして頭を包み込むように抱きしめてくれた。

「ふたりで死のう」

ルフナは一筋の涙をながしている。ルフナの翼が姿をけす。彼女が息をひきとったときに自分はおなじように死にたかった。自分たちが滅びゆくことをほんとうはとうにうけいれていた。ただ、彼女にのこされたことに目を背けていたのだ。望んだのとはにもいることだけだったのに。

「一人にしてごめんなさい」

朔夜はいった。彼はずっと愛情をもとめていた。わかっていたのにどうしてあげればいいのかわからなかった。六年もそばにいてわからなかったのだ。でも、今はわかる。こうして彼をうけいれてあげればよかったのだ。リヨクや子供たちにはたくさん仲間がいるけど、彼はずっと一人で淋しかったのかもしれない。朔夜もおなじように翼をけす。そのまま彼を抱きしめたまま重力に身をまかせた。彼にはルフナには自分だけしかない。そのおもいが朔夜の心をつつんでそのまま彼とともにあることをのぞんだ。こうすれば彼にもみんなにもいちばんいいのだ。

「朔夜っ」

リヨクが手をのばして自分をおいかける。それでも、加速はとまらない。このまま死んでしまうのはわるくないとおもった。生きてと叫んでももう彼にはとどきはしないのだろうから。だから、彼を一人にするわけにはいかない。いくら朔夜たちでも、この高さから落下すれば確実に死ねる。彼を裏切って自分だけ助かるなんてできない。

「いっしょにいこう。ルフナ」

ルフナはその言葉に自分の手をひいてくれたフェインをおもいだす。彼女はいつも太陽のように明るく笑っていた。そんな彼女がまたこの世からいなくなってしまう。たくさんの子供たちをのこして自分たちをのこして彼女がいなくなってしまったように。ルフナの胸にはそのときの恐怖がうずまいた。彼女は死んではいけない。死ぬのは自分だけでいい。彼女にはたくさんなのこしてはいけないものがある。それは自分が彼女にあたえたもの。彼女への愛の証だったものたち。

「ルフナ　ッ」

ルフナに弾きとばされた朔夜は必死にその体をつかもうと手をのばした。しかし、つかめたのは彼がいつも首からさげていた青いペンダントだけ。リヨクは朔夜の体をつけとめるとおいかけようと

かく朔夜をとりおさえた。ルフナはそんな朔夜の姿に自然と微笑がうまれる。そして、彼女にずっと、ずっとたえたかった言葉をおくった。はじめからこうすればよかった。

落下する速度は驚くほどおだやかでルフナはその空間をうけとめる。こんなおだやかな死がむかえられるなんておもわなかった。フエインが自分を許してくれたのかな。朔夜がこの研究所で生まれたとき自分はしりたかった。フエインがなぜ人間に恋をして彼らを選んだのか。朔夜もおなじように人間を選ぶのか。ほんとうの彼女の気持ちがりりたいとおもった。だから、高瀬兄弟に朔夜をわたした。人間として育てさせた。でも、彼女はどちらか愛していたのだ。その愛を疑いうけいれられなかったのは自分だった。いつでも、彼女は手をさしのべてくれていたのに。彼女が亡くなったことに耐えられず自分の気持ちに目をそむけて長い間、どうでもいい言い訳をして彼女をおいもとめた。

アレンはとうにすべてをうけいれていたのに。アレンのようにきみのかえる場所はここだからと手をひろげて彼女のきがすむのをまっていたればよかった。人間に恋をしたときいたとき自分も彼女を許してあげればよかったのだ。“裏切り者”と罵らなければよかった。それから、彼女は笑わなくなった。太陽のように明るい笑みをもうみることにはなくなった。もういちどみたかった彼女の笑っている顔を。

ごめん、愛している

サラと高志はK 02の完全な治療薬を完成させた。その薬は揮発性が高く、K 02の感染を予防する役目もある。完成した治療薬はやはり朔夜の血液を原料としている。大量の薬は感染のひどいアジア地域を中心に無料で配られた。その結果、感染者は急激に減りいまは人口の一割にも満たないとゆう報告がつたえられた。K 02の被害者がいなくなる日もちかいとサラはうれしそうにいつている。

「高瀬博士、私は兄さんが最後までなにがしたかったのかわからない。あれほどのことをしてまで、兄さんはなにを求めていたんだろう」といまでも疑問におもうんだ」

アレンは海をみつめている朔夜を窓ごしにみながらいった。高志は朔夜が二歳のときのことをおもいだして彼にきかせることにした。「朔夜は覚えていないでしょうが、ルフナが朔夜をみにあの家にきたことがあるのです。幼い朔夜は彼に抱かれながらほほ笑んだことがあったんです。そのときルフナはなんともいえないうれしそうな顔をしました。それは私がみた最高の彼の顔だったとおもいます。

彼はずっと笑顔がみたかったのかもしれませんが。朔夜はあなたたちとはなれてからいままでのように笑ったりはしなかったですから。」

そして、もうひとつ高志はこんなはなしをした。高瀬家は代々ルフナにつかえている家柄だった。高瀬家はフェインと人間とのあいだにできた子供の子孫でルフナがその子供たちを保護して育てていったそうだった。この事実にはアレンもおどろいていた。だから、うまくいくだろうとリヨクの誕生に自分の遺伝をつかったのだ。そして、その思惑はみごと成功しリヨクが生まれ、朔夜がうまれた。そして、ルフナにたのまれてあの家で朔夜をあのかでリヨクを育てたのだった。

「しかし、ルフナがリヨクにどうしてあんなにつらくあたったのかわからない。はじめは彼も朔夜とおなじように人間として育てることになっていたんです。朔夜と兄妹としてね。しかし、ルフナはリヨクをみて、あんなところに閉じこめ、彼とゆう“個別の存在”が存在してはいけないように教育するように命じてきた」

アレンにはその理由がわかった。リヨクをひと目みただけでそのこたえは明白だった。彼はよく似ていた。ルフナがはじめて誰よりも憎んだあの男に。

「リヨクはよく似ているですよ。フェインが愛した人間に。リヨクはまるで彼のいきうつしのようですね」

「え？」

アレンは高志になぜ自分が高瀬の人間をルフナが保護したことを驚いたか説明するようにいう。

「ルフナはフェインが亡くなったあと、彼女が愛した人間を殺したんです。もちろん、その村ごとね。私はその人間たちを必死に守ろうとしたが結局、守りきれなかった。これをきっかけに私たちは決別したんです。そのとき、彼のもとにいたフェインが産んだ赤ん坊をつれていってしまったから、てっきりいままで私はその子も手にかけたんだとおもっていたぐらいです」

高志はそのはなしをきいて研究所にいた彼女たちの遺伝をおもいだした。ルフナは種族とゆうくりであつめっていると主張したが、彼女たちは共通のおなじ遺伝をもっていた。それは、フェインの遺伝だと高志は途中できづいていた。それは朔夜の遺伝をつかつて薬をつくったときのことだった。彼は種族をとゆうより彼女の子供たちを目覚めさせていた。けれど、彼がほんとうに求めていたのはそれらではなかった。どんなにいい報告をもつてきても彼は興味なさそうに「そう」とこたえるだけだった。だからよけいに彼が朔夜をだいてほほ笑んだあのかの顔が印象にのこったのだろう。

「もつとはやく、彼女につたえればよかったんだ。あんな言葉ばかりを彼女になげかけるのではなく。ずっとそばで笑っていてほしいと」

アレンはルフナのことをおもいながら遠い目をしていった。そして、いまは朔夜の胸元でひかっている青い石のペンダントをおもいだした。三本のチューリップをモチーフにしたそのペンダントは自分も色ちがいのものをもっていた。彼女からおくられたそれを、自分は彼女が亡くなってしまったときに彼女の亡骸とともに埋めたのだ。彼女のそばにいけない自分のかわりに彼女が少しでも淋しくないうようにと。自分が彼女を愛していた証に。でも、ルフナは彼女をもとめるように彼女への愛を叫ぶように大切にもつていたのだろう。本来ならルフナもあれを手ばなしてしまえばよかったのだ。彼女のおもいがつまつたそれを手にもつていなければ、まだあんなに縛ら

れないですんだかもしれない。

コンコンとノックの音がして、ガチャッと扉がひらく。そこから瑠希と紗枝そしてラウトが顔をのぞかしている。そして、誰かをさがすように部屋をみると高志に紗枝がいった。

「おじいちゃん、パパとママしらない？ずっとさがしてるの」

高志は三人にほほ笑む。高志はこんなふうに朔夜の子供たちに“おじいちゃん”といわれる日があるなんておもわなかった。アレンは無邪気な子供たちをみていると、まるで昔にもどったようなきがした。あのころは三人で生まれてきた子どもたちに囲まれてくらしていた。あたたかな彼女の笑顔と子供たちの安らいだ顔があたりまえのようにそこにあつた。

「ごめん、わからないな。部屋にはいなかったのかい？」

高志の言葉に子供たちは首をふりながらそれぞれにいう。

「いなかったよな。パパもママも」

「うん、おふねさがしてもいない」

「おじいちゃんもいつしよにさがそうよ」

そういつて三人は高志の手をひっぱる。高志は「はい、はい」といいながら部屋をでていこうとした。アレンは朔夜にちがづいてくるリヨクの姿を窓越しにみながらいう。

「しばらくパパとママはふたりつきりにさせてあげよう」

紗枝はアレンのところへかけてきて窓にはりつく。そして、朔夜とリヨクの姿をみつけるとアレンに抗議するようにいった。

「どうして？」

アレンは紗枝とおなじ目線になると秘密話をするように口に入さし指をあてていった。

「ラブラブだから」

すると紗枝はおかしそうにでも、しあわせそうにわらっている。たまに紗枝は女の子の顔になってドッキとするような態度をとる。ちいさくても女の子なんだなあと感じさせられる。

「だって、パパとママだもん」

ラウトと瑠希も紗枝とおなじように窓までくるとしたでよりそっている朔夜とリヨクの姿をみた。高志も子供たちの横にたつ。海をみている朔夜によりそうようにリヨクはたっていた。

海を眺めているとリヨクがショールを肩にかけてくれた。うすいショールをはおり朔夜は胸元でゆれるペンダントをにぎりしめた。そうして、ペンダントをにぎる手をリヨクはみつめる。そんなときはいつもルフナのことをおもっているときだ。リヨクはそれでも朔夜から目をそらしはしない。自分が朔夜を愛しているのはかわらない。どんなことになってもそばにいたかった。朔夜のそばにいるために自分は自分の気持ちをおさえつけてまで朔夜の願いをかなえようとした。そうすればそばにいられるとおもっていたから。

「朔夜、体がひえます」

そういつてリヨクは朔夜を背後から抱きしめた。彼女の体は海風で冷えたのだろうつめたかった。こんなちいさなほそい体で朔夜はいままで必死に戦ってきたのだとおもえば切なさがかみあげてくるそばにいてわかちあいたかった。朔夜がにぎりしめているその手に自分の手をかさねた。彼女の苦しみをすべてしりたい。彼女がいまなにをおもっているのかそのおもいを教えてほしい。それは言葉をかわさないとわからないこと。

「ルフナのことをおしえてくれますか？」

朔夜にそういうと自分がおもったよりもずっとずっとやさしい声になったことにおどろく。朔夜はルフナを丁寧におもいだす。ううん、おもいださなくてもいい。この六年ずっと彼をみてきた。ちかくでみていてつらくなるほど彼は愛をもとめていた。わかっていたのに。

「私、ルフナの手をはなしてしまった。ルフナはずっと淋しかったのに」

ルフナはいつも後悔している子供のような顔をしていた。そして、不器用に自分を主張していたのだった。彼が自分にないを求めている

るのかわからなかった。ラウトを「きみの子だ」と手渡されたとき
モルフナがなにを求めているのかわからなかった。産んだ覚えのな
いその子をどうしてふたりの子として自分に育てさせようとしてい
るのか。でも、子供をみたときに自分の子だと本能でおもった。そ
して、白銀の髪をしたその子はルフナの子でもあった。彼との子を
愛おしいとおもっていたのは事実だった。それと同時に抱きしめた
腕のなかで無邪気に眠るその姿に手放してしまった子供たちをおも
つてもいた。

「傷つけてしまった。じゅうぶん傷ついている人だったのに。だか
ら、ずっとそばにいたのに」

朔夜の肩はふるえていてリヨクはその肩に顔をうずめた。この六
年、自分が朔夜のそばにどうしていられなかったのだろうか。あの
とき朔夜の手をはなさなければよかった。

「ルフナはラウトをみるときに懺悔をささげるような目でみたの。
彼がどうして、そんな目をするのかわからなかった・・・彼には私
しかいなかったのに・・・」

朔夜の言葉にリヨクはちがうとおもった。朔夜だけを求めていた
のはルフナだけじゃない。自分だって彼となんらかわりはないのだ。
彼とおなじように子供で朔夜をしばらくつけられるとおもっていた。
だから子供がいることに安心していた。そこにもかかわらず朔夜が自
分のもとからさってしまったことが衝撃でうごけなくなったのだ。
朔夜はそれほどに母性のつよい人だったから。身に覚えのないあ
の子たちを迷わず産むと育てていくといった彼女だから。

「ちがいます。あなたを求めたのは彼だけじゃない・・・彼が心ご
と朔夜をほっしたように私もおなじようにあなたを求めています」
リヨクは自分の気持ちを語りはじめ。彼とルフナとおなじよう
な過ちを犯さないように、その結果、愛している人を失わないよう
に傷つけないように。朔夜はリヨクをみつめる。こんなふうに背を
むけてきいてはいけないうなきがした。目をみて彼の表情を刻み
つけるようにきかなければいけないようなきがしたのだ。どうすれ

ばいいのかわからず目をそむけるような過ちをもう犯さないですむように。わからなくても目をそむけてはいけないのだ。

「私は彼よりずるい男です。子供を育てていればいずれあなたがかえつてくると信じてあの子たちを育ててきた。自分ですら子供たちを抱くその手に愛情があつたのかさえわからない」

それは懺悔だった。ずっとずっと隠して目をそむけてきた罪だ。

そして、自分も彼とおなじだ。愛しかたもわからずに愛を欲している子供とおなじなのだ。こうして縛りつけていっしょにいられたとしてもけつして満たされることはなく、そのことにイラついて癩癩をおこしひどくあたってしまふ。彼と自分は似ていたのだ。ただ、自分だけのものになって欲しかった。

「私はあなたに尽くすようなふりをして、あなたを縛りつけていた。そばにいただけでいい、と言葉にしながら朔夜の心に自分だけいれたいと願っていた」

朔夜はリヨクの頬にふれる。その頬は冷えていて冷たかった。それだけじゃない、表情もかたくなで冷えきっている。いつもの優しいあたたかいおだやかさはない。今のリヨクには朔夜が好きだったあの温かさはなかった。リヨクがいたからリヨクがあんなふうに温かくおだやかにほほ笑むから自分はいままで歩いてこれたのだ。子供を産んで育てようと、子供を手ばなしてルフナのもとへいこうといつも勇気をくれたのは彼だった。

もう一度、あの顔がみたい。

ああ、そうか。ルフナの願いがやっとわかった。彼は願いを口にしていた。いつだって朔夜をみつめて主張していた。ほんとうにほしいものがなんなのか。

僕に笑いかけてよ

私は彼に笑いかけてあげればよかったのだ。とびつきの笑顔で彼を抱きしめてあげるだけでよかった。それを彼はずっとずっと求めていて、それなのにわからず私は目をそむけることしかできなかった。

「許して」

朔夜はつぶやいた。ただの一度でも笑ってあげればよかった。涙でにじんでいるリヨクの目をみながら朔夜はちいさくつぶやいた。そして、リヨクの顔をひきよせる。頭をくっつけて朔夜は泣いた。やっと彼のために泣けたようなきがした。ううん、彼をおもいつづけていた彼女が泣いているのだ。彼女もきつとちゃんとルフナをおもっていた。だから、私がこの世に生まれることができたのだ。彼女が彼を助けるために私はこの世に産みおとされた。

朔夜の言葉にすべてを許されたようなきがした。リヨクはやっと朔夜に自分の願いをいえる。長い間おもいつづけた言葉。あの暗い暗い部屋のなかでも、朔夜のそばにいたときにもけっしていえなかった。どういえばよかったのかわからなかった言葉。リヨクは目をとじる。閉じた瞳からは一筋の涙が流れていくのを感じた。その涙は自分の罪を洗い流してくれるように静かにゆっくりと頬をつたう。「愛してください」

神に祈りをささげるようにいわれた言葉に朔夜はさらに涙がでる。リヨクのことをおもえば次から次へと涙がぼろぼろと流れた。リヨクの頭を抱えるようにまわしていた手で頬にふれるとリヨクの頬もぬれていた。指にふれるその冷たさとおもいに愛おしさと切なさがかみあげてくる。朔夜はリヨクの唇にふれた。愛おいしい人をきちんと愛せるように、愛してもらえるように。リヨクのことをおもうと涙があふれるほど切なかった。そのおもいをつたえるかのように朔夜はくちづけた。

海が深いように、空がどこまでもつづいていくように、深く深くつつまれていくような、どこにいてもどんなに離れていても愛しているとかわかってもらえるように深くどこまでも愛してあげたい。愛おいしいとんでもなさやいて、なんども安心してもらえるように温もりを感じてほしい。

リヨクの手が朔夜の手にかさねる。手の平をあわせ指をからませリヨクは朔夜を感じるように手をつないだ。愛していると愛された

いとなんどもなんどもその温かさをたしかめるように相手が安らげるように手をかさねる。互いの手の暖かさに自分たちを感じながら誓う。今このときにすべてをかけるようなおもいで誓いあった。

あなたのそばにいます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849c/>

Wing Fabric ~ はねころも ~

2010年10月8日15時34分発行